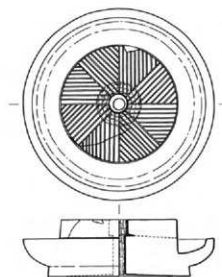


# 大宰府条坊跡 31

—第233次調査—



平成18年

太宰府市教育委員会

○平成 19 年度発送報告書正誤表

■『大宰府冬坊跡 31』太宰府市の文化財 第 89 集 正誤表

		誤	正
37 頁	34 行	同安窯系青磁 I-1b 類	同安窯系青磁碗 I-1b 類
44 頁	14 行	VII-1 類の . . . . .	VII 類の . . . . .
54 頁	24 行	灰釉陶器	青磁
54 頁	28 行	産地不明。	越州窯系青磁碗 I-2a エ類。

# 大宰府条坊跡 31

—第233次調査—

平成18年

太宰府市教育委員会

## 序

本報告書は、平成16年度におこなった太宰府市五条2丁目における民間開発事業により埋蔵文化財発掘調査を実施した報告書であります。

今回報告する大宰府条坊跡233次調査地点は、平安時代と鎌倉時代からなる2つの異なる時代の生活面が重層的に検出され、各々から区画を示す溝跡や建物が確認され往時の本地域の都市的な様相を復原するために貴重な資料が得られました。

本書が、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対しご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

平成18年6月

太宰府市教育委員会

教育長 關 敏治



# 例 言

1. 本書は、大宰府条坊跡第233次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地点は大宰府市五条2丁目2724-30外5筆に所在し、調査対象面積は703.8㎡、調査面積は573.8㎡（文化層2面調査延べ1147.6㎡）である。調査は平成16年5月22日から10月27日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、大宰府市教育委員会の指導のもとに（株）玉川文化財研究所（所長 戸田哲也）が行った。
4. 遺構の実測図作成および写真撮影は、北平朗久・香川達郎・中山豊が行い、調査地点の空中写真は、（有）空中写真企画が行った。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって報告書に示す方位はすべて座標北（G、N）を指している。なお、現地周辺の磁北は座標北から6°30′西偏する。
6. 本書に掲載した遺構番号は、以下の要領で理解される。なお、本書中では遺構略称の「条」を基本的に省略している。



7. 報告書作成業務は、（株）玉川文化財研究所において行った。
8. 遺物の実測・拓本は木村百合子・野木は美・荒井陽子・唐原賢一・花本晶子が行い、遺物の写真撮影は赤間和重が行った。
9. 本書の執筆は、戸田哲也の指導のもとに北平朗久・香川達郎が担当し、分担は以下のとおりである。  
北平朗久 第Ⅰ～Ⅴ章・第Ⅵ章第1節・第Ⅷ章  
香川達郎 第Ⅵ章第2節
10. 写真図版（カラー）については付属のCD-ROMに収録している。詳細はCD-ROM内のテキストデータ「CD-ROMをご使用にあたって」を参照のこと。
11. 出土遺物および図面、写真等の記録録は大宰府市教育委員会が保管し、公開・活用していく予定である。
12. 本報告書で用いた土器・陶磁器・瓦の分類基準は以下の文献に準拠した。また、陶磁器分類は山村信榮の指導のもとに香川達郎が行った。  
土器・陶磁器・中世須恵器  
大宰府市教育委員会 1983 『大宰府条坊跡Ⅱ』  
大宰府市教育委員会 1992 『宮ノ本遺跡Ⅱ―窯跡編―』  
大宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡ⅣⅤ』  
日本中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』  
土師賢・瓦質土器  
山村信榮 1990 『大宰府出土の瓦質土器』『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会  
瓦  
松松好雄・高橋 章 1978 『大宰府出土の瓦について（二）』『九州歴史資料館 研究論集4』  
山村信榮 2004 『宝満山出土の瓦分類について』『宝満山遺跡群4』

# 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

紀年表	A/D	大宰府土器型式	遺構区分	陶器(1層位)	陶器(2層位)	略称	標識群	学名/遺構			
④	900	V	A	折戸O-10	片戸O-10	長門?・畿内	白磁1類 緑州須恵青磁1、2類 多量須恵青磁・其他 陶器-磁器	唐三彩・二彩 磁胎			
	825	VI		片戸O-78	片戸O-78	光+赤1号					
	800	VII		黒塚K-14	黒塚K-14	赤色 黒塚K-90?					
	900	VIII		黒塚K-90	黒塚K-90	光+赤1号					
	925	IX		大原2号	大原2号	近江					
	950	X		大原1号	大原1号						
	1000	XI		東山H-72	東山H-72	東山H-72			瀬州須恵青磁類 白磁1類		
	1050	XII		百代寺	百代寺	東山H-72					
	⑤	1100		XIII	A	東山H-G-108			東山H-G-108	白磁陶器、磁、赤、V1-3、 VI、VII、VIII、IX、X、XI、XII、 XIII、XIV、XV、XVI、XVII	北朝類及鎌倉・室町須恵青磁類 瀬州須恵青磁 白磁須恵青磁1、2、3類 白磁須恵青磁、陶XIV類
		1150		XIV		瀬州須恵青磁類1-1~4、6 品1類 阿波須恵青磁類1-2、品1			白磁陶器、V*4、品群類埋土		
1200		XV	瀬州須恵青磁類2-a、b類	白磁陶器、藍瑠1類							
1230		XVI	瀬州須恵青磁類2-c類 白磁X類 赤陶類								
1250		XVII	瀬州須恵青磁類2-c類 白磁X類 赤陶類								
1300		XVIII	瀬州須恵青磁類2-c類 白磁X類 赤陶類								
1330		XIX	瀬州須恵青磁類2-c類 白磁X類 赤陶類								
1350		XX	瀬州須恵青磁類2-c類 白磁X類 赤陶類								
⑥		1450						白磁土、C類 赤陶類			
⑦		1500									

- 紀年表資料
- ① A.D. 927 延長5年、大宰府74次S D266A類
  - ② A.D. 1091 寛治5年、平安京北左4条1坊S E 8并戸
  - ③ A.D. 1244 寛政3年、大宰府23次S D469類
  - ④ A.D. 1304 享和2年、大宰府108、111坊S D3200類
  - ⑤ A.D. 1330 元禄2年、大宰府45次S X1200類
  - ⑥ A.D. 784 延暦3年、長門県102次S D10201類
  - ⑦ A.D. 1459-1465 長祿3-寛正5年、福岡市井原田CⅡ-S G16類
  - ⑧ A.D. 1501 文亀元年、大宰府70次S D1805類
  - ⑨ A.D. 1385 文永2年、博多2次T13土器

- 文献
- ① 九州歴史資料館『大宰府発掘昭和56年度発掘調査報告』1982
  - ② 田辺三三・若川昌彦『平安京跡発掘調査報告書左四末一丘』1975 平安京調査会
  - ③ 九州歴史資料館『大宰府発掘昭和49年度発掘調査報告』1975
  - ④ 九州歴史資料館『大宰府発掘昭和63年度発掘調査報告』1989
  - ⑤ 九州歴史資料館『大宰府発掘昭和62年度発掘調査報告』1978
  - ⑥ 奈良文化財研究所センター『長門県中世埋蔵文化財発掘調査報告書1』1988
  - ⑦ 福岡市教育委員会『井原田CⅡ遺跡』『福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書178』1988
  - ⑧ 九州歴史資料館『大宰府発掘昭和56年度発掘調査報告』1982
  - ⑨ 福岡市教育委員会『博多4』『福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書387』1995

## 目 次

I. 位置と環境	1
II. 調査組織	2
III. 調査経緯	4
IV. 調査方法	4
V. 層 位	4
VI. 調査の概要	17
1. 遺 構	17
1) 溝	17
2) 井 戸	20
3) 掘立柱建物	28
4) 橋 列	31
5) 土 坑	33
6) その他の遺構	35
a) たまり状遺構	35
b) 小 穴	36
c) 不明遺構	36
2. 遺 物	37
1) 溝出土遺物	37
2) 井戸出土遺物	55
3) 掘立柱建物出土遺物	66
4) 土坑出土遺物	66
5) その他の遺構出土遺物	76
a) たまり状遺構	76
b) 小 穴	82
c) 不明遺構	82
6) その他の遺物	82
VII. 小 結	84
遺構番号台帳	88
土師器計測表	92
出土遺物一覧表	106
報告書抄録	巻末

## I. 位置と環境

太宰府市は福岡平野の南東部に位置し、北に大野山を抱える四王寺山脈、東に愛嶺山、宝満山などの三郡山地の山々が連なり、西には背振山地とその前山となる牛頭山、天祥山、基山などの低い山地が控える。その両山系に囲まれた狭い盆地状の小平野で、南東は筑紫平野と接している。

市内には大佐野川、鷺田川、御笠川が流れ、牛頭川などの幾つかの河川と合流しながら福岡平野を北流し、博多湾に注いでいる。

太宰府市は、古代の外交・軍事機能をもった官衙「太宰府」が置かれた地として知られる。市域とその周辺には、天智2年(663)白村江での敗戦により唐・新羅の侵攻に備えて水城、大野城、基肆城などの軍事防衛施設が築かれ、7世紀末から8世紀初頭には古代の西海道九国二島を統括する地方最大の官衙となり、条坊制を有する古代都市へと発展した。

大宰府条坊跡は、鏡山猛氏の『大宰府都城の研究』(1968)によって存在が指摘され、条坊復元案の提示により世に知られることとなった。その規模は南北二十二条(約2.4km)、東西十二坊(約2.6km)におよび、現在の太宰府市と筑紫野市にまたがっている。

大宰府政庁および大宰府条坊は、7世紀後半代に掘立柱形式の第Ⅰ期政庁が成立し、8世紀前半に祠堂院形式の第Ⅱ期政庁に改められる。政庁は天慶4年(941)の藤原純友の乱によって焼け落ち、その後、第Ⅲ期政庁として再建された。現在、地表に露出している礎石は第Ⅲ期政庁時のものと画期が示されている。第Ⅲ期政庁も11世紀中頃には機能を停止し、条坊の中央から西側は荒廃し、中世以降、都市としての機能は条坊左部の観世音寺周辺や天満宮安楽寺周辺へと移行することが発掘調査から明らかになりつつある。

今回の調査地は鏡山条坊復元案によると左郭7条9坊にあたる。御笠川上流域左岸の河成低段丘Ⅱ面に立地し、標高は現地表面で約38.7mを測る。調査区の南側では昭和53年に九州歴史資料館により調査が実施されており、鎌倉時代の溝などが検出され、東側の隣接地は大宰府条坊跡第157次調査として平成6年度に太宰府市政委員会により調査が行われ、条坊関連の道路遺構、鎌倉時代の所産と推定される掘立柱建物、井戸、溝、土坑などが検出されている。

当該地が含まれる五条地区は、古くからの史料・伝承も多く、今川了俊居館跡の伝承地が調査地点西側に隣接し、中世都市の中核の一面と推定されている。今回の調査では2面の生活面が確認され、平安・鎌倉時代の掘立柱建物、棚列、溝、井戸、土坑などが検出された。これらの遺構は、比較的良好な遺存状態で発見され、太宰府の古代から中世を理解する上で新たな資料が追加されたことは大きな成果と考える。

## II. 調査組織

### 太宰府市教育委員会調査組織 (平成16/2004年度)

総括	教育	長	關 敏 治
庶務	教育部	長	松 永 栄 人
	文化財課	長	木 村 和 美
	保護活用係	長	久保山 元 信
	調査係	長	水 尾 彰 朗
	事務	主 査	藤 井 泰 人 (～6月30日)
			齋 藤 実 貴 男 (7月1日～)
			大 石 敬 介
調査			大 城 戸 康 利
			山 村 信 榮 (調査担当)
			中 島 恒 次 郎 (事前審査担当)
			井 上 信 正
			高 橋 学
			宮 崎 亮 一
			下 川 可 容 子
			森 田 レイ 子
			柳 智 子
			渡 邊 仁
			長 直 信
			松 浦 智

### (平成17/2005年度)

総括	教育	長	關 敏 治
庶務	教育部	長	松 永 栄 人
	文化財課	長	木 村 和 美 (～6月30日)
	保護活用係	長	齋 藤 廣 之 (7月1日～)
	調査係	長	久保山 元 信
	主任	主 査	水 尾 彰 朗
	事務	主 査	齋 藤 実 貴 男
調査			大 石 敬 介
			大 城 戸 康 利
			山 村 信 榮 (整理担当)
			中 島 恒 次 郎
			井 上 信 正
			高 橋 学
			宮 崎 亮 一

技師 (嘱託)	下 川 可 容 子
	柳 智 子
	長 直 信
	松 浦 智

### (平成18/2006年度)

総括	教育	長	關 敏 治
庶務	教育部	長	松 永 栄 人
	文化財課	長	齋 藤 廣 之
	保護活用係	長	久保山 元 信
	調査係	長	水 尾 彰 朗
	主任	主 査	齋 藤 実 貴 男
	事務	主 査	大 石 敬 介
調査			大 城 戸 康 利
			山 村 信 榮 (整理担当)
			中 島 恒 次 郎
			井 上 信 正
			高 橋 学
			宮 崎 亮 一
			柳 智 子
			下 高 大 輔

### (株)玉川文化財研究所調査組織

所 長	戸 田 哲 也
調査研究部長	河 合 英 夫
主任研究員	小 山 裕 之
主任研究員	中 山 豊
主任研究員	北 平 朗 久 (調査・整理担当)
主任研究員	香 川 達 郎 (調査・整理担当)

### Ⅲ. 調査経緯

今回の調査は、太宰府市五条2丁目2724-30外5筆に計画された共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。当該地は大宰府条坊跡内に所在し、昭和53年度に九州歴史資料館により調査が実施され、鎌倉時代の遺構が検出されていたことから、大宰府条坊跡第233次調査として本格調査が行われる運びとなった。調査の具体化に伴い、太宰府市教育委員会から株式会社王川文化財研究所に発掘調査・整理報告業務の委託がなされた。調査対象面積は703.8㎡、調査面積は文化層2面の調査で延べ1147.6㎡である。調査は平成16年5月22日から10月27日の期間で実施され、その後整理報告に移行した。

### Ⅳ. 調査方法

今回の調査地点は単道筑紫野・古賀線と西鉄太宰府線に挟まれ、西鉄五条駅のホームに隣接することから、安全対策として調査区域にガードフェンスを設置した。また安全面を考慮し、セツトバックを充分にとり、壁面の崩落防止などを考えて調査区の壁は傾斜をつけて掘削した。

平成16年5月25日から表土剥ぎを開始し、遺構確認面（地表下1.7~2.0m）まで重機を用いることとした。また、調査の効率化を図るため、発生した土砂は搬出した。重機での作業が終了した時点で、調査区内に3m方眼を基本とするグリッドの設定と遺構の検出作業を行い、その後遺構検出写真撮影と縮尺1/100の略測図を作成し、記載済みの遺構から順次、掘削作業を開始した。遺物は土層ごとに取り上げを行い、遺構の完掘後に写真撮影と縮尺1/20の遺構全体図を作成した。遺構の状況によって適宜縮尺1/20の個別図も作成し、10月6日には上空からの全体写真撮影を実施している。

第Ⅰ面の調査が終了した10月13日に再び重機を搬入して整地層の掘削を開始した。第Ⅱ面も第Ⅰ面と同様に略測図、遺構全体図、個別図などの作成と写真撮影を行い、10月22日から埋め戻し作業を開始し、10月27日の重機搬出をもって現地におけるすべての作業を完了している。

### Ⅴ. 層位

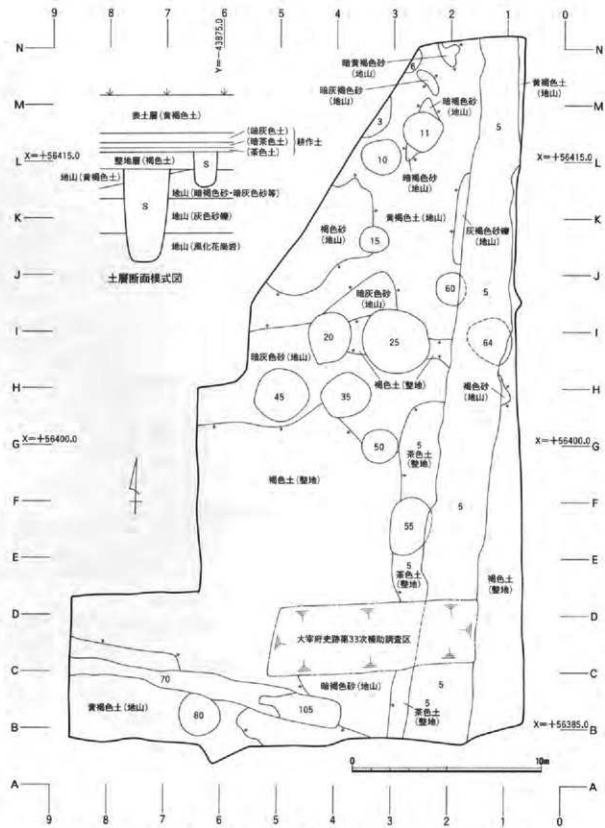
今回の調査区は御笠川左岸の氾濫低地に立地するが、現在では盛土されて平坦にならされている。盛土は黄褐色土（2層）で、層厚は1.7~2.0mを測る。それを除去すると昭和の後半まで耕作が行われていたと考えられる水田層の暗灰色土（3層）・暗茶色土（4層）・茶色土（5層）が現れ、層厚は10~40cmを測る。その下からは褐色土（60・61層）の整地層と黄褐色土（65層）・暗黄褐色砂・暗灰褐色砂・褐色砂・灰褐色砂礫の地山層が確認され、この面が遺構検出面の第Ⅰ面である。褐色土（整地層）は調査区の中央から南側に分布し、黄褐色土・暗褐色砂・暗灰色砂（地山層）は調査区の北側と南西隅で確認されている。整地層を剥がすと、北側で観察された黄褐色土（地山層）が確認され、この面を遺構検出面の第Ⅱ面とした。さらにその下には御笠川の氾濫に起因すると推定される砂礫層（灰褐色砂礫・灰褐色砂礫・暗灰褐色砂礫・褐色砂礫）が確認され、井戸の掘り方の下位には橙色粘土層（風化花崗岩）が観察されている。



- |             |                 |           |                   |
|-------------|-----------------|-----------|-------------------|
| 1. 大野塚跡     | 11. 大宰府庁跡       | 21. 前田遺跡  | 31. 横田山遺跡         |
| 2. 宮城跡      | 12. 観音堂跡        | 22. 齊木本遺跡 | 32. 大宰府天満宮（安徳寺跡）  |
| 3. 障ノ尾・妙見遺跡 | 13. 遺灰埋戻し土塊     | 23. 鴨川遺跡  | 33. 渡城跡           |
| 4. 筑前部分寺跡   | 14. 大宰府条坊跡（被線内） | 24. フクニ遺跡 | 34. 岩倉跡           |
| 5. 止土跡      | 15. 菅原遺跡        | 25. 尾崎遺跡  | 35. 大宰府条坊跡第244次調査 |
| 6. 岡守杉本遺跡   | 16. 松若寺跡        | 26. 湯沢遺跡  | 36. 大宰府条坊跡第233次調査 |
| 7. 筑前部分寺跡   | 17. 帯ノ上遺跡       | 27. 舟城戸遺跡 |                   |
| 8. 湯子足取遺跡   | 18. 舟人塚跡        | 28. 舟中遺跡  |                   |
| 9. 柳並埋戻し土塊  | 19. 柳口遺跡        | 29. 舟人塚遺跡 |                   |
| 10. 水塚跡     | 20. 柳塚遺跡        | 30. 重遺跡   |                   |

第1図 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)





第5図 大宰府史跡第333次調査土壌分布図 (1/200) および土層模式図

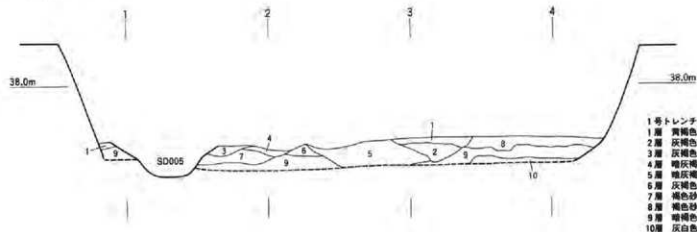




第7圖 大宰府桑坊跡第233次調査第Ⅱ面遺構全体図 (1/150)

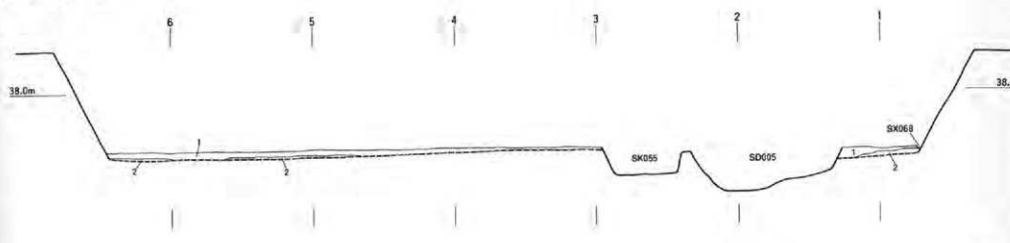


1号トレンチ (Kライン)



- 1号トレンチ (第8回)
- 1層 黄褐色土 地山層 (粒径5mmの礫を少量、環状状の酸化鉄を含む)。
  - 2層 灰褐色土 地山層 (1層に隣接。酸化鉄を含まない)。
  - 3層 灰褐色砂礫 地山層 (砂5；礫5)。
  - 4層 増反褐色砂礫 地山層 (砂7；礫3)。
  - 5層 増反褐色砂 地山層 (増褐色砂と灰褐色砂の混合)。
  - 6層 灰褐色砂礫 地山層 (環状状に増褐色砂が混入)。
  - 7層 褐色砂礫 地山層 (砂7；礫3)。
  - 8層 褐色砂礫 地山層 (砂5；礫5)。
  - 9層 増褐色砂礫 地山層 (礫6；砂4)。
  - 10層 反白色砂 地山層 (粒径5～20mmの礫を少量含む)。

2号トレンチ (Fライン)



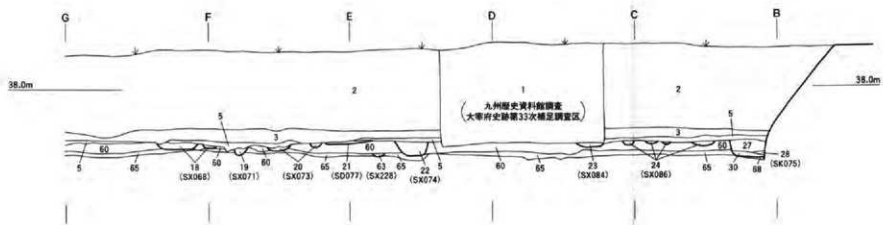
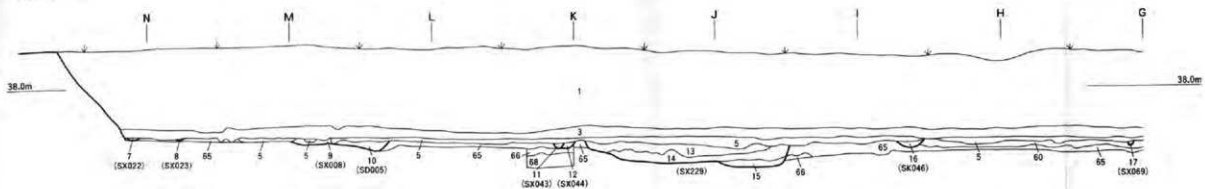
- 2号トレンチ (第9回)
- 1層 褐色土 築地層 (環状状の酸化鉄を含む)。
  - 2層 黄褐色土 地山層 (粒径5mmの礫を少量、環状状の酸化鉄を含む)。

- 調査区東端 - 南端 (第9回)
- 1層 黄褐色土 3.南端に長尺柱状調査土層向次跡跡33次補足調査区。
  - 2層 黄褐色土 表土層。黄砂土主体の硬い土。
  - 3層 増褐色土 耕作土。
  - 4層 増褐色土 2層に隣接。酸化鉄、灰色土が少なく。(3-4層耕作土)
  - 5層 赤色土 全体に酸化鉄が混入。(水田跡)
  - 6層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。粘性が強いM。砂子が多い。
  - 7層 増褐色土 粒径3-5mmの酸化鉄を少量含む。(233X022)
  - 8層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。(233X023)
  - 9層 増褐色土 粒径3-5mmの酸化鉄を少量含む。(233X043)
  - 10層 増褐色土 酸化鉄が少量。粒径3-5mmの礫を多く含む。(233SD005)
  - 11層 増褐色土 粒径3-5mmの酸化鉄を少量含む。(233X043)
  - 12層 増褐色土 粒径3-5mmの酸化鉄を少量含む。(233X044)
  - 13層 増褐色土 粒径3-5mmの酸化鉄を少量含む。粒径1-1.5mmの礫を少量含む。
  - 14層 増褐色土 粒径3-5mmの礫を少量。黄褐色粘質土を多量含む。
  - 15層 増褐色土 粒径3-5mmの礫。黄褐色粘質土を多量含む。(13-15層233X029)
  - 16層 増褐色土 粒径1-3mmの酸化鉄を少量。粒径1-1.5mmの礫を少量含む。(233X045)
  - 17層 反白色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233X068)
  - 18層 増褐色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233X068)
  - 19層 増褐色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233X071)
  - 20層 増褐色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233X073)
  - 21層 増褐色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233SD077)
  - 22層 増褐色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233X074)
  - 23層 反白色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233X084)
  - 24層 黄褐色土 粒径1-3mmの酸化鉄。粒径3-5mmの礫を少量含む。(233X086)
  - 25層 増褐色土 粒径1mmの酸化鉄。粒径5mmの礫を少量含む。(233X087)
  - 26層 褐色土 シルト質。粒径5mmの酸化鉄を少量含む。(25-26層233X088)
  - 27層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄を少量。粒径5mmの礫を多く含む。
  - 28層 褐色土 粒径10mmの酸化鉄を少量。粒径5mmの礫を多く含む。
  - 29層 褐色土 粒径10mmの酸化鉄を少量含む。(27-30層233X079)
  - 30層 褐色土 粒径10mmの酸化鉄を少量。黄褐色粘質土を中量含む。(233X117)
  - 31層 反白色土 粒径5mmの礫を多く含む。
  - 32層 増褐色土 粒径3-5mmの酸化鉄を少量。反白色粘質土を中量含む。(233X117)
  - 33層 増褐色土 粒径10mmの酸化鉄を少量含む。黄褐色粘質土を少量含む。
  - 34層 増褐色土 粒径20mmの酸化鉄を多く含む。黄褐色粘質土を少量含む。
  - 35層 反白色土 粒径5mmの酸化鉄。塊状の黄褐色土を少量含む。(35-35層233X110)
  - 36層 増褐色土 粒径10mmの酸化鉄を少量含む。黄褐色粘質土を少量含む。
  - 37層 増褐色土 粒径20mmの酸化鉄を多く含む。黄褐色粘質土を少量含む。
  - 38層 反白色土 粒径5mmの酸化鉄。塊状の黄褐色土を少量含む。(38-38層233X090)
  - 39層 増褐色土 粒径5-20mmの酸化鉄を少量。塊状の赤褐色土を少量含む。(233X146)
  - 40層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄。粒径10mmの礫を少量含む。
  - 41層 増褐色土 層下に粒径100mmの礫を多く含む。
  - 42層 増褐色土 粒径5mmの礫を少量含む。(40-42層233X145)
  - 43層 反白色土 粒径2mmの酸化鉄を少量含む。砂子が多い。(233X159)
  - 44層 増褐色土 粒径10mmの反白色土を塊状に含む。(233X181)
  - 45層 反白色土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。
  - 46層 反白色土 粒径20mmの礫を少量含む。全体に砂質である。
  - 47層 増褐色土 粒径3mmの酸化鉄を少量含む。粘性。砂まりが強い。
  - 48層 反白色土 層下位置を中心に粒径4-10mmの礫を多く含む。
  - 49層 反白色土 粒径4mmの黄褐色粘土を少量含む。
  - 50層 黄褐色土 黄褐色粘土塊を多量含む。
  - 51層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。
  - 52層 反白色土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。
  - 53層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄を少量。粒径2mmの酸化鉄を多量含む。
  - 54層 増褐色土 粒径20mmの褐色土。黄褐色土を塊状に多量含む。
  - 55層 増褐色土 粒径20mmの褐色土を少量含む。
  - 56層 灰色粘土 管状の酸化鉄を少量含む。
  - 57層 黄褐色粘土 管状の酸化鉄を多く含む。
  - 58層 黄褐色粘土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。
  - 59層 黄褐色土 環状状の黄褐色粘土を中量含む。(45-59層233D005)
  - 60層 褐色土 環状状の酸化鉄を少量含む。
  - 61層 褐色土 管状状。
  - 62層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。(233X022)
  - 63層 増褐色土 粒径1-5mmの酸化鉄を少量含む。(233X023)
  - 64層 増褐色土 粒径5mmの酸化鉄を少量含む。(233X024)
  - 65層 黄褐色土 地山層 (環状状に酸化鉄を含む)。
  - 66層 黄褐色土 地山層 (粒径5mmの礫を少量、環状状の酸化鉄を含む)。
  - 67層 黄褐色土 地山層。
  - 68層 褐色砂礫 地山層 (砂7；礫3)。

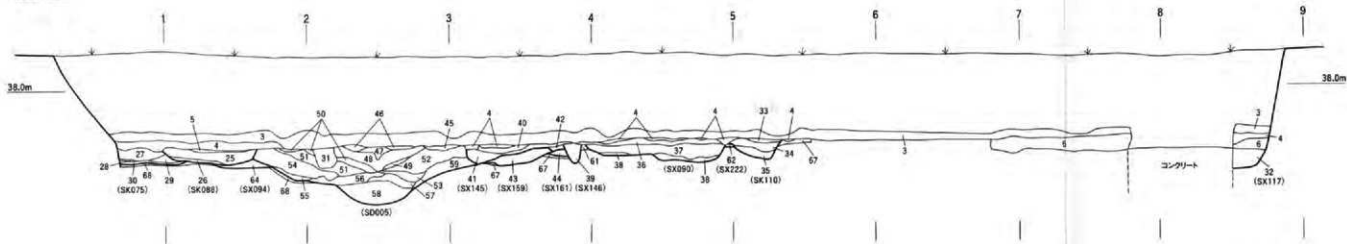
- 233SD005の遺物取り上げ土層
- 45-47層 褐色土
  - 48層 反白色土
  - 49-51層 褐色土
  - 52-55層 赤色土
  - 56-59層 増褐色土

第8図 1・2号トレンチ土層断面図 (1/80)

調査区東壁



調査区南壁



第9図 調査区東壁・南壁土層断面図 (1/80)



## VI. 調査の概要

### 1. 遺構

今回の調査では2面の生活面が確認され、第I面からは溝7条、掘立柱建物1棟、櫛列1列、井戸12基、土坑19基、たまり状遺構、小穴群、第II面からは溝3条、掘立柱建物2棟、櫛列1列、土坑3基、たまり状遺構、小穴群が検出されている。

#### 1) 溝

##### 233SD005 (第6・10図、図版3)

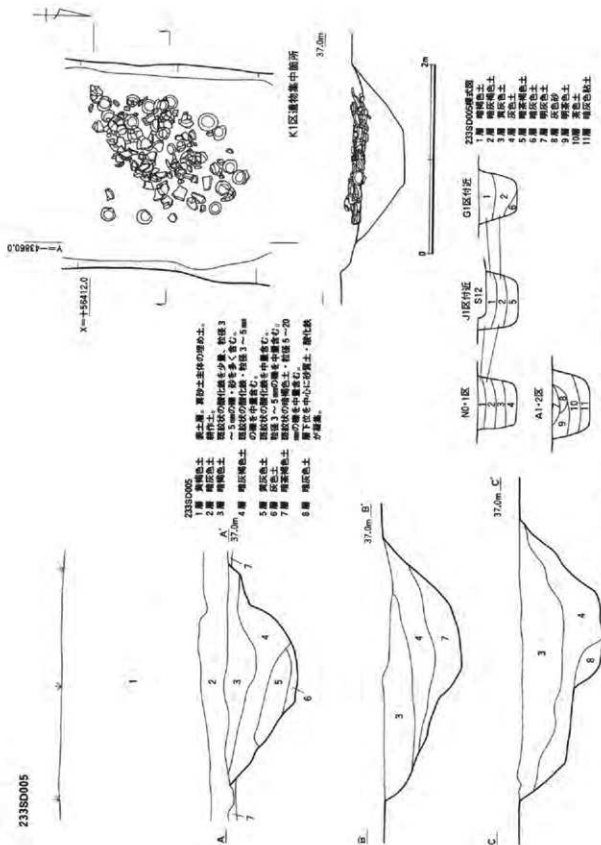
調査区第I面の東端に位置し、A1・2区からN0・1区にかけて南北に走る。両端とも調査区外に展開し、井戸(233SE060・064)を壊して構築されているが、土坑(233SK037・055)、たまり状遺構(233SX012・036・094)、小穴(233SX027・089・092・093・096)に切られている。最終的に検出された範囲は、長さ37.3m、幅1.8~3.5m、深さ75~120cmを測り、走向は中軸線でN-6°-Eを指針する。底面(中軸線上)の標高は北端(N0・1区)で36.27m、中央(G1区)で35.93m、南端(A1・2区)で35.64mを測り、南側に傾斜している。断面は逆台形を基本形とするが、部分的にテラス状の平坦面を有する。覆土は北側の上・中層は暗褐色土と暗灰褐色土で形成されているが、下層は黄灰色土・灰色土・暗茶褐色土・暗灰色土に分かれ、若干の相違が認められる。南側では上層から明灰色土・灰色砂・明茶色土・茶色土・暗灰色粘土が観察され、北側とは異なる様相を呈している。また、D・E2区付近では上層の暗灰褐色土と下層の暗茶褐色土の間に炭化物・焼土を含む黒褐色土が堆積している。K1区の覆土上層(暗褐色土)からは一箇所に集中して廃棄された遺物が出土している。本遺構が切る井戸(233SE064)が12世紀中頃までの遺物を含むことから、構築はそれ以降であり、出土遺物の様相から、13世紀中頃~14世紀前半(大宰府XVII~XX期)頃の埋没と考えられる。

##### 233SD018 (第6図)

調査区第I面の北側に位置し、J2区からK4区にかけて東西に走る。たまり状遺構(233SX033・034)を壊して構築されているが、土坑(233SK014)、たまり状遺構(233SX012)に切られている。東側は遺構間の重複により消失し、西側は調査区外に展開している。最終的に検出された範囲は、長さ5.65m、幅45~85cm、深さは3~19cmを測り、走向は中軸線でN-87°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は東端で36.72m、西端では36.84mを測り、わずかに東側に傾斜している。覆土は暗灰褐色土で構成され、出土遺物の様相から、大宰府陶磁器編年(以降略)のF期(13世紀前後~14世紀初頭、大宰府XVII~XIX期)頃の埋没と考えられる。

##### 233SD040 (第6図)

調査区第I面のほぼ中央に位置し、H2区からH5区にかけて東西に走る。井戸(233SE020・025)に北側の一部を壊され、東側は途切れ、西側は調査区外に展開している。最終的に検出された範囲は、長さ8.2m、幅20~96cm、深さは2~10cmを測り、走向は中軸線でN-77°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は東端で36.7m、西端では36.82mを測り、わずかに東側に傾斜している。覆土は黒褐色土で構成され、出土遺物は僅少で、埋没時期は井戸(233SE020)に先行する平安後期か。

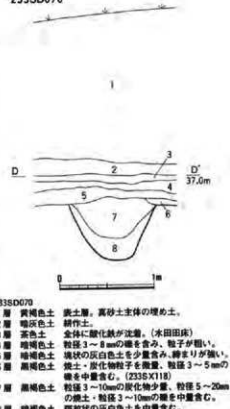


第10図 233SD005土層断面・遺物集中国所実測図 (1/40)

## 233SD070 (第6・11図、図版3)

調査区第1面の南側に位置し、B4区からC8区にかけて東西に走る。溝(233SD115)を壊して構築されているが、井戸(233SE080)、溝(233SD105・120)、土坑(233SK095)、たまり状遺構(233SX118・126)、小穴および小穴群(233SX123・133・162・166)に切られている。東側は遺構間の重複により消失し、西側は調査区外に展開する。最終的に検出された範囲は、長さ12.2m、幅85~150cm、深さは30~55cmを測り、走向は中軸線でN-78°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は東端で36.32m、西端では36.21mを測り、わずかに西側に傾斜している。断面形は逆台形を呈する。覆土は下層から灰褐色土→暗褐色土→黒褐色土の順に堆積し、出土遺物の様相から、C期(11世紀後半~12世紀前半、大宰府XII~XIII期)以降の埋没と考えられる。

233SD070



第11図 233SD070土層断面実測図 (1/40)

## 233SD077 (第6図)

調査区第1面南東側のC1区からD0区にかけておおむね南北に走り、小穴(233SX074・076)に切られている。北端は調査区外に展開し、南端は途切れている。最終的に検出された範囲は、長さ6.15m、幅20~35cm、深さは3~11cmを測り、走向は中軸線でN-12°-Eを指針する。底面(中軸線上)の標高は北端で36.7m、南端では36.69mを測り、高低差はほとんど無い。断面形はU字形を呈する。覆土は暗灰褐色土で構成され、出土遺物は僅少であるが、土師器供膳具の底部には糸切り調整が施されることから、12世紀中頃(大宰府XIV期)以降の埋没と考えられる。

## 233SD105 (第6図)

調査区第1面の南側に位置し、B4区からB5区にかけて東西に走る。溝(233SD070・120)、土坑(233SK100)、小穴(233SX221)を壊して構築されているが、土坑(233SK095)、小穴(233SX149)に切られている。両端とも途切れ、規模は全長4.75m、幅135~165cm、深さは5~36cmを測り、走向は中軸線でN-83°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は東端で36.68m、西端では36.51mを測り、わずかに西側に傾斜している。断面形は逆台形を呈する。覆土は下層から灰褐色土→暗褐色土の順に堆積し、出土遺物の様相から、E期(13世紀前後~前半、大宰府XVI~XVII期)以降の埋没と考えられる。また、本遺構は前述の溝(233SD070)の延長上に位置することから、同一遺構の可能性も考えられる。

## 233SD115 (第6図、図版3)

調査区第2面の南側に位置し、B5区からB8区にかけて東西に走る。他遺構との重複関係では本遺構が最も古く、溝(233SD070)、井戸(233SE080)、土坑(233SK095)、たまり状遺構(233SX134)、小穴群(233SX127)に切れ、北壁は遺存していない。両端とも途切れ、最終的に検出された範囲は、遺構間の重複で途切れるが現存長8m、現存幅70~110cm、深さは7~45cmを測る。走向は中軸線でN-

79°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は東端で36.47m、西端では36.62mを測り、東側に傾斜している。覆土は下層から灰白色土→灰褐色土の順に堆積し、出土遺物の様相から、B期(10世紀後半~11世紀初頭、大宰府X~XI期)頃の埋没と考えられる。

#### 233SD120 (第6図)

調査区第I面の南側に位置し、B5区から検出された。溝(233SD070)を壊して構築されているが、溝(233SD105)、土坑(233SK095)、小穴(233SX162)に切られている。溝(233SD105)とはほぼ重なり、同一遺構の可能性もある。両端とも途切れ、規模は全長3.75m、幅55~155cm、深さは29~53cmを測り、走向は中軸線でN-83°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は東端で36.32m、西端では36.35mを測り、高低差はほとんど無い。断面形は逆台形を呈する。覆土は暗灰色土で構成されるが、前述の溝(233SD105)と平面形がほぼ一致することから同一遺構の可能性が考えられる。遺構間の重複関係および出土遺物の様相から、E期(13世紀前後~前半、大宰府XVI~XVII期)頃の埋没と考えられる。

#### 2) 井戸

今回の調査で検出された井戸は12基で、すべて第I面から発見された。その中で、石組井戸が2基(233SE011・015)、井戸枠および井戸痕跡が確認されたものが6基(233SE020・025・035・045・050・080)で、残りの4基(233SE003・010・060・064)については、井戸枠は確認されず、形態や規模等から井戸と推定している。調査区の中央から北側にかけて主に分布し、南側からは1基(233SE080)が確認されたのみである。また、北端の1基(233SE003)は調査区の制約から全容は捉えきれていない。

#### 233SE003 (第6・12図)

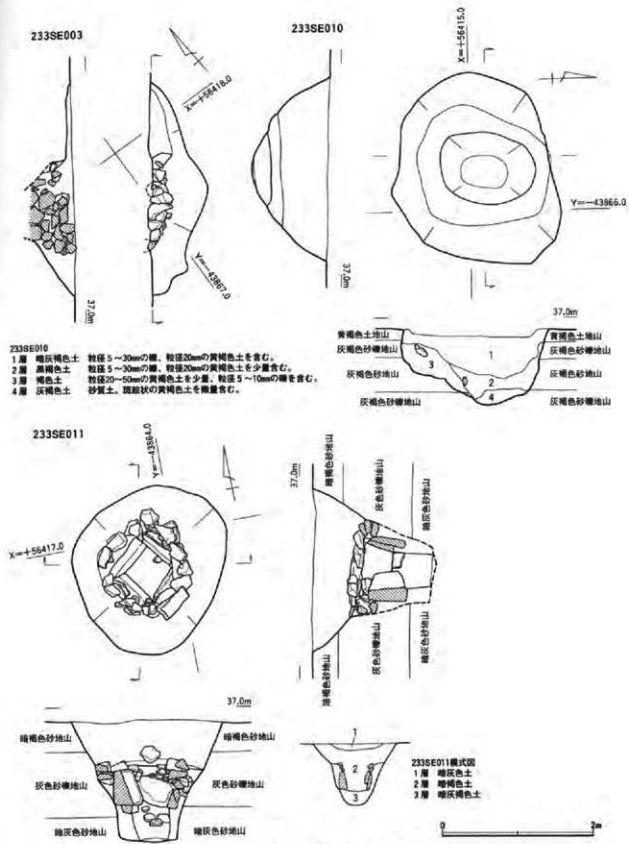
調査区北端のL3区から検出され、小穴(233SX017)を切って構築されている。北西側の大半は調査区外に展開し、全容は不明であるが、掘り方の平面形態と礫の出土状態からここでは井戸(石組)として扱うことにした。掘り方の平面形は楕円形と推定されるが、規模は不明である。覆土は上層から暗褐色土→褐色土の順に堆積している。出土遺物は僅少であるが、供膳具の底部調整において糸切り、へら切りの両者が混在することから、12世紀中頃(大宰府XIV期)以降の埋没と想定した。

#### 233SE010 (第6・12図)

調査区北側のK・L2・3区から検出され、小穴(233SX017)を切って構築されている。掘り方の平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径(東西)2.5m、短径(南北)2.2m、深さは1.0mを測る。覆土は上層から暗灰褐色土→黒褐色土→褐色土→灰褐色土の順に堆積するが、井戸枠の痕跡は認められなかった。最深部の地山層は灰褐色砂礫である。出土遺物の様相から、11世紀前後~12世紀前半(大宰府X期~XIII期)頃の埋没と考えられる。

#### 233SE011 (第6・12図、図版4)

調査区北側のL2区から検出され、たまり状遺構(233SX016)、小穴(233SX024・026)を切って構築されているが、上面の一部はたまり状遺構(233SX001)に覆われていた。掘り方の平面形は楕円形を呈し、規模は長径(北東-南西)2.2m、短径(北西-南東)1.95m、深さは1.6mほどを測る。井戸枠は石組で、開口部は楕円形を呈し、規模は長径100cm、短径80cmを測り、傘大から人頭大の花崗岩で乱



第12図 233SE003・010・011実測図 (1/50)

石積みされる。下段は断面を長方形に加工した花崗岩の切石を用い方形に組み上げられ、長軸48cm、短軸43cm、深さは最上段から最大113cmを測る。井戸枠内の覆土は上層から暗灰色土→暗褐色土→暗灰褐色土の順に堆積し、裏込めは井戸枠内の最下層と近似した暗灰褐色土が充填されている。最深部の地山層は暗灰色砂である。出土遺物の様相から、11世紀前後（大宰府X期）頃の埋没と考えられる。

#### 233SE015 (第6・13図、図版4)

調査区の北側に位置し、J3区から検出された。掘り方の平面形は略円形を呈し、規模は径約1.5m、深さは1.5mほどを測る。井戸枠は石組で、開口部径は約80cmを測り、拳大の花崗岩で乱石積みされる。中～下段は断面を長方形に加工した花崗岩の切石を2～3段方形に積み上げ、長軸52cm、短軸48cmを測る。深さは最上段から145cmほどである。井戸枠内の覆土は上層から暗褐色土→褐色土→暗黄褐色土→茶色土→灰色砂の順に堆積し、裏込めは上層から暗黄褐色土→褐色土→暗茶色土が充填されている。最深部の地山層は灰色砂礫である。出土遺物の様相から、E期（13世紀前後～前半、大宰府XVI～XVII期）頃の埋没と考えられる。また、後述する小穴群（233SX028）は本遺構を取り囲むように検出されたことから上層施設に関わる遺構であった可能性が指摘される。

#### 233SE020 (第6・13図、図版4・5)

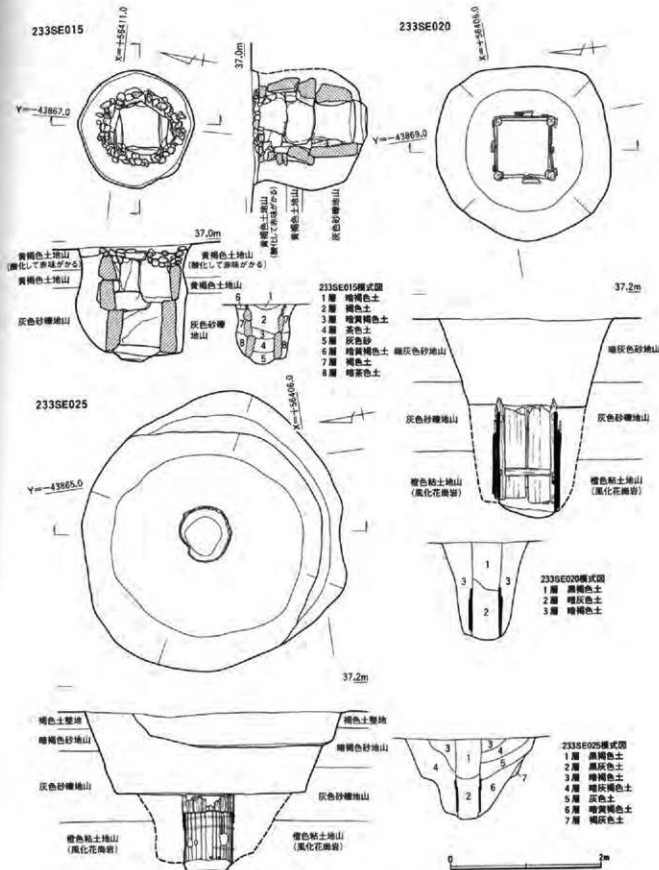
調査区はほぼ中央のH・I3・4区から検出され、溝（233SD040）を切って構築されている。掘り方は径約2.3mの略円形を呈し、深さは2.6mほどを測る。井戸枠は方形を呈し、四隅に柱を立て、横棧を渡し枠組を作り、各辺に3枚の縦板を張り付けている。規模は一辺約70cm、枠材の残存長は約130cmを測る。井戸枠内の覆土は上層から黒褐色土→暗灰色土の順に堆積し、裏込めは暗褐色土が充填されている。最深部の地山層は橙色粘土（風化花崗岩）である。出土遺物の様相から、11世紀前後（大宰府X期）頃の埋没と考えられる。

#### 233SE025 (第6・13図、図版5)

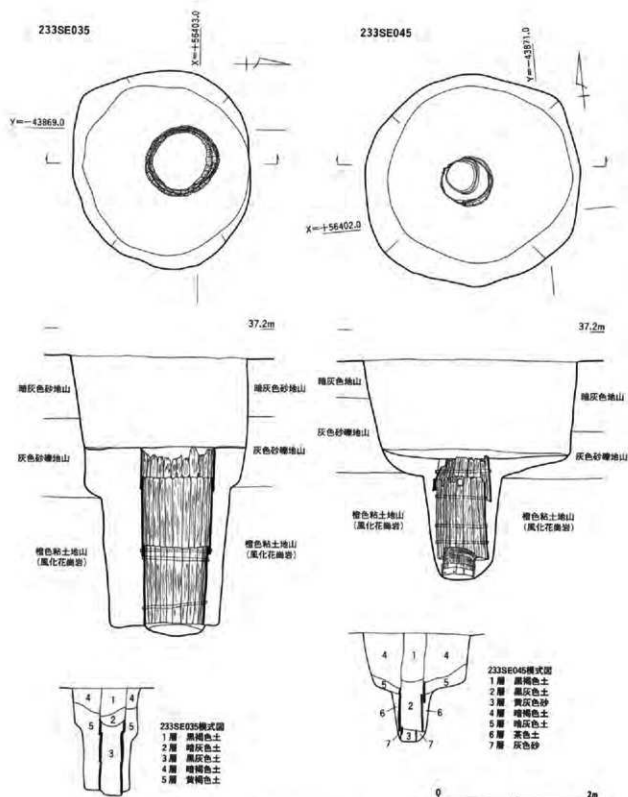
調査区はほぼ中央のH・I2・3区から検出され、溝（233SD040）、たまり状遺構（233SX033）を切って構築されている。掘り方の平面形は楕円形を呈し、規模は長径（北西～南東）3.8m、短径（北東～南西）3.6m、深さは2.15mほどを測る。枠材は円筒形の結核で2段が確認され、1・2段目とも28枚の板材で構成されている。一部が歪むが、径約72cm、残存高は約90cmを測る。井戸枠内の覆土は上層から黒褐色土→黒灰色土の順に堆積し、裏込めは上層から暗褐色土→暗灰褐色土→灰色土→暗黄褐色土→褐色土が充填されている。最深部の地山層は橙色粘土（風化花崗岩）である。出土遺物の様相から、14世紀前半～後半（大宰府XX期）以降の埋没と考えられる。

#### 233SE035 (第6・14図、図版6)

調査区はほぼ中央のG・H3・4区から検出され、土坑（233SK101）を切って構築されている。掘り方の平面形は楕円形を呈し、規模は長径（東西）2.6m、短径（南北）2.38m、深さは3.7mほどを測る。井戸枠はやや北側に寄った位置から検出された。枠材は円筒形の結核で3段が確認され、上段が28枚、中段が25枚、下段が23枚の板材で構成されている。径約96cm、残存高は約235cmを測る。井戸枠内の覆土は上層から黒褐色土→暗灰色土→黒灰色土の順に堆積し、裏込めは上層から暗褐色土→黄褐色土が充填されている。最深部の地山層は褐色粘土（風化花崗岩）である。出土遺物の様相から、F期（13世紀前後～14世紀前半（大宰府XVII～XIX期）頃の埋没と考えられる。



第13図 233SE015・020・025実測図 (1/50)



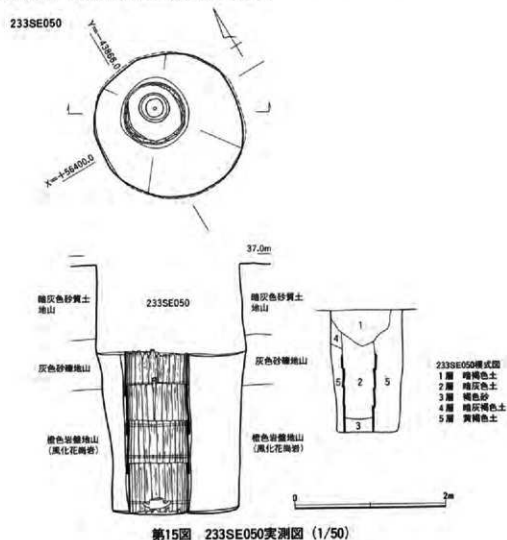
第14図 233SE035・045実測図 (1/50)

233SE045 (第6・14図、図版6・7)

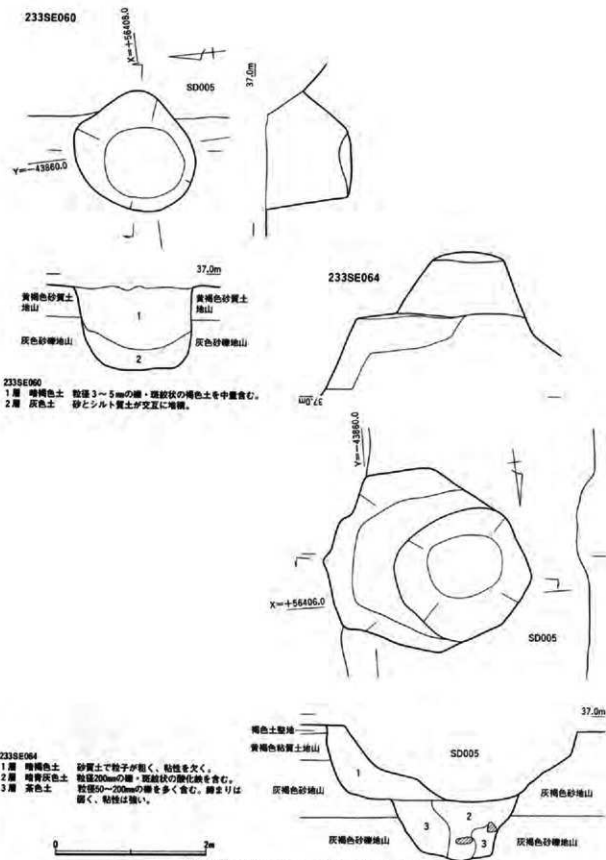
調査区中央のやや西側に位置し、G・H4・5区から検出された。掘り方は径約2.8mの略円形を呈し、深さは2.9mほどを測る。枠材は円筒形の結物で2段が確認され、1・2段目とも24枚の板材で構成されている。径約70cm、残存高は約135cmを測る。水溜には径40cm、高さ35cmほどの曲物を据えている。井戸枠内の覆土は上層から黒褐色土→黒灰色土→黄灰色砂の順に堆積し、裏込めは上層から暗褐色土→暗灰色土→茶色土→灰色砂が充填されている。最深部の地山層は橙色粘土（風化花崗岩）である。出土遺物の様相から、F期（13世紀前後～14世紀前半、大宰府XVII～XIX期）頃の埋没と考えられる。

233SE050 (第6・15図、図版7)

調査区ほぼ中央のF・G2・3区から検出された。掘り方は径約1.95mの略円形を呈し、深さは3.3mほどを測る。枠材は円筒形の結物で4段が確認され、上から1段目は25枚、2段目は27枚、3・4段目は各24枚の板材で構成されている。径約85cm、残存高は約215cmを測る。井戸枠内の覆土は上層から暗褐色土→暗灰褐色土→褐色砂の順に堆積し、裏込めは上層から暗灰褐色土→黄褐色土が充填されている。最深部の地山層は橙色粘土（風化花崗岩）である。出土遺物の様相から、F期（13世紀前後～14世紀初頭、大宰府XVII～XIX期）以降の埋没と考えられる。



第15図 233SE050実測図 (1/50)



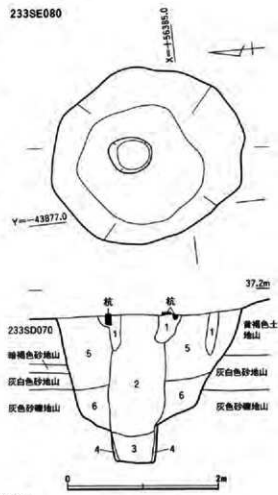
第16図 233SE060・064実測図 (1/50)

233SE060 (第6・16図)

調査区北側の1・2区から検出され、溝(233SD005)、たまり状遺構(233SX012)の一部を削られているが、たまり状遺構(233SX033)を切って構築されている。掘り方の平面形は楕円形を呈し、規模は長径(北西-南東)1.6m、短径(北西-南東)1.4m、深さは1.1mほどを測る。覆土は上層から暗褐色土→灰色土の順に堆積するが、井戸枠の痕跡は認められなかった。最深部の地山層は灰色砂礫である。出土遺物は僅少であるが、土師器供膳具の底部は糸切り調整が施されることから、12世紀中頃(大宰府XIV期)以降の埋没と考えられる。

233SE064 (第6・16図)

調査区東側のH・I・0・1から検出され、溝(233SD005)、土坑(233SK046)の一部を削られている。掘り方の平面形は不整形円形を呈し、規模は長径(東西)2.8m、短径(南北)2.45m、深さは1.75mほどを測る。覆土は上層から暗褐色土→暗青灰色土→茶色土の順に堆積するが、井戸枠の痕跡は認められなかった。最深部の地山層は灰褐色砂礫である。出土遺物は僅少で、土師器供膳具の底部は糸切り調整が施される。埋没時期は重複関係にある溝(233SD005)も加味して判断すると、D期(12世紀中頃～後半、大宰府XIV～XV期)頃の埋没と考えられる。



第17図 233SE080実測図 (1/50)

233SE080 (第6・17図)

調査区南端のA・B6区から検出され、溝(233SD070・115)、たまり状遺構(233SX134)を切って構築されている。掘り方の平面形は楕円形を呈し、規模は長径(南北)2.6m、短径(東西)2.35m、深さは1.95mほどを測る。井戸枠は径約50cm、深さは約45cmを測るが、板材・曲物は検出されず、壁面に沿って暗褐色土(4層)の腐植土(井戸枠痕跡)を確認している。覆土の最上層には現代の杭列(1層)が確認された。井戸枠内の覆土は上層から暗褐色土→黒褐色土の順に堆積し、裏込めは上層から灰褐色土→暗灰褐色土が充填されている。最深部の地山層は灰色砂礫である。出土遺物の様相から、13世紀前半～後半(大宰府XVII～XVIII期)頃の埋没と考えられる。

- 233SE080
- | 層  | 土質   | 現代杭の掘り方。                         |
|----|------|----------------------------------|
| 1層 | 灰色土  | 径約10cmの腐植土を多量含む。締まりが強い。          |
| 2層 | 暗褐色土 | シルト質土。粘性が強く、締まりが強い。              |
| 3層 | 暗褐色土 | 腐植土。(井戸枠の痕跡)                     |
| 4層 | 暗褐色土 | 粒径15cmの腐植土を少量、粒径20mmの黄褐色粘土を多量含む。 |
| 5層 | 暗褐色土 | 粒径10cmの腐植土を多量含む。                 |
| 6層 | 暗褐色土 | 粒径10cmの腐植土を多量含む。                 |

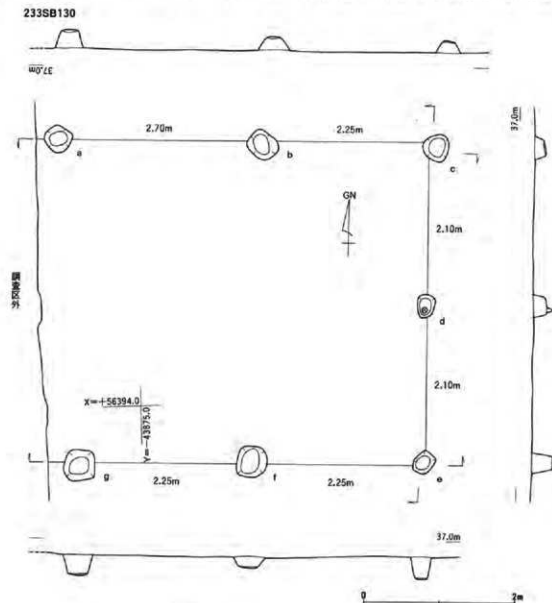


### 3) 掘立柱建物

今回の調査で検出された掘立柱建物は3棟で、第Ⅰ面から1棟(233SB130)、第Ⅱ面からは2棟(233SB135・140)が発見されている。調査区の制約や遺構間の重複により全容を捉えられたものはないが、構造的には側柱建物が2棟(233SB130・135)、不明ではあるが、総柱建物の可能性を残すものが1棟(233SB140)存在している。また、検出面は異なるが、側柱建物の2棟はほぼ同位置から検出されている。

#### 233SB130 (第6・18図、図版8)

調査区の西端に位置し、第Ⅰ面のD-F4-6区から検出され、西側が調査区外に展開している。溝(233SD231)を切って構築され、櫛列(233SA125)と重複するが、直接的な切り合い関係は認められない。調査区の制約から全容は不明であるが、東西棟の側柱建物と推定され、最終的には梁行2間、桁

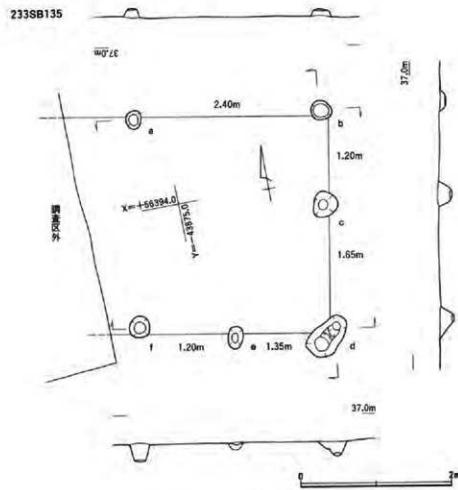


第18図 233SB130実測図 (1/50)

行は2間までの検出となった。柱心々間の梁行総長は4.2m、確認された桁行の長さは4.5~4.95mを測る。東側梁行の柱間は2.1m(7小尺)(1小尺 $\approx$ 0.297mで計算)等間に取まる。北側桁行は西からa~b間は2.7m(9小尺)、b~c間は2.25m(7.5小尺)となり、南側桁行は2.25m(7.5小尺)等間に取まる。主軸方位は桁行(柱穴a~c)を基準とするとN-89°-Wを指針する。柱穴の掘り方は楕円形を呈し、規模は長径で28~42cm、深さは13~30cmを測る。覆土は暗褐色土・褐色土・暗赤褐色土で構成され、遺物は検出されていない。

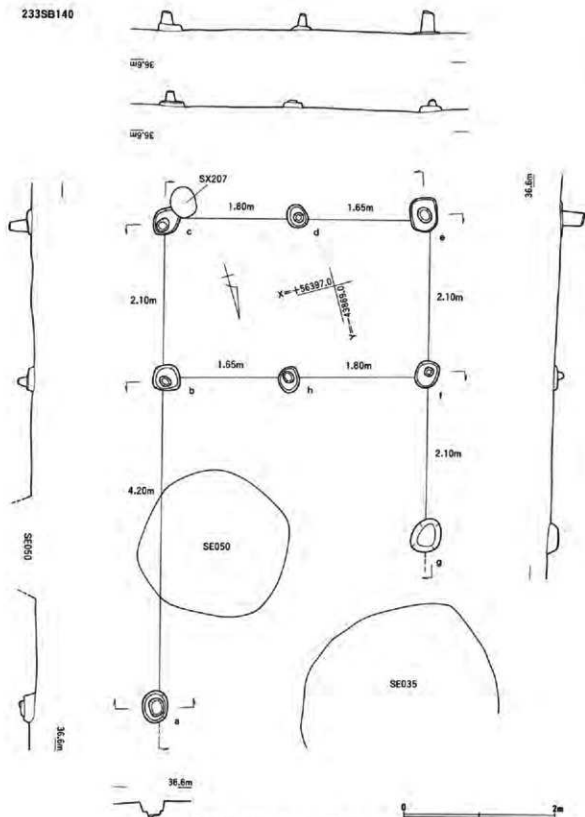
#### 233SB135 (第7・19図、図版8)

調査区の西端に位置し、第Ⅱ面のD・E5・6区から検出された。西側が調査区外に展開し、全容は不明であるが、東西棟の側柱建物と推定される。最終的に検出された範囲は梁行2間、桁行は1間であるが、南側桁行のd~f間には小穴eが確認されている。柱心々間の梁行総長は2.85m、確認された桁行の長さは2.4~2.55mを測る。東側梁行の柱間は北からb~c間は1.2m(4小尺)、c~d間は1.65m(5.5小尺)となる。北側桁行はa~b間が2.4m(8小尺)、南側桁行は東からd~e間は1.35m(4.5小尺)、e~f間は1.2m(4小尺)となる。主軸方位は桁行(柱穴a~b)を基準とするとN-82°-Wを指針する。柱穴の掘り方は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で23~62cm、深さは8~23cmを測る。覆土は暗褐色土で構成され、出土遺物は僅少である。



第19図 233SB135実測図 (1/50)

233SB140



第20図 233SB140実測図 (1/50)

## 233SB140 (第7・20図、図版8)

調査区のはほぼ中央に位置し、第Ⅱ面のE-G3・4区から検出された。井戸 (233SE035・050)、小穴群 (233SX207) に壊され、全容は捉えきれない。直接的な切り合い関係は認められないが、小穴群 (233SX203) とも重複する。梁行2間×桁行3間の南北棟の建物と推定され、柱心々間の桁行総長は6.3m、梁行総長は3.45mを測る。桁行の柱間はすべて (b-c・e-f・f-g間) 2.1m (7小尺) 等間で収まり、南側梁行は東からc-d間は1.8m (6小尺)、d-e間は1.65m (5.5小尺) となる。また、柱穴bとfを結んだ線上の中央から柱穴hが検出され、遺構間の重複により全容が不明なことから判断は難しいが、東柱を有する側柱建物ないし間仕切りを有する建物の可能性が考えられる。主軸方位は桁行 (柱穴a-c) を基準とするとN-16°-Eを指針する。柱穴の掘り方は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で33~50cm、深さは10~30cmを測る。覆土は暗灰褐色土・暗褐色土の順に形成され、12世紀中頃に形成されたと考えられる褐色土 (整地層) との先後関係や出土遺物の様相から、11世紀前後 (大宰府X期) 頃のものと考えられる。

## 4) 構列

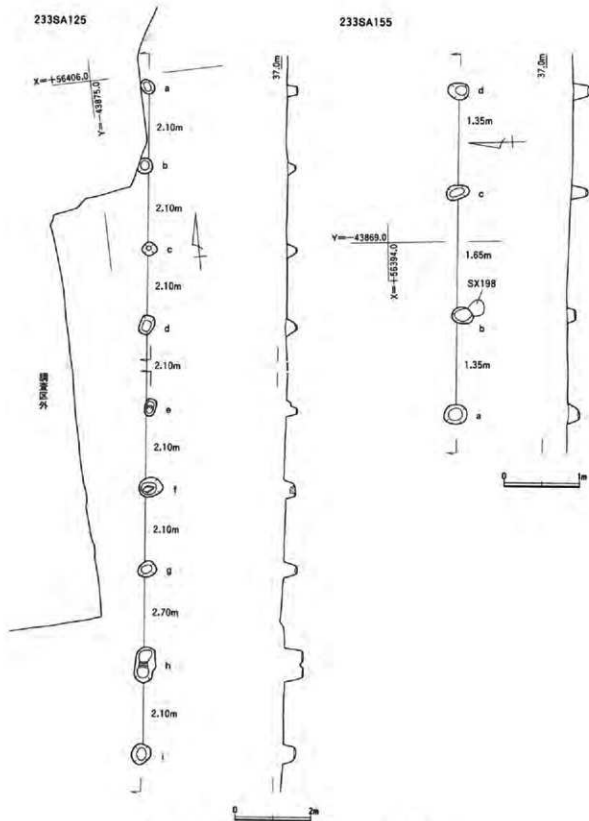
今回の調査で検出された構列は2列である。第Ⅰ面の調査区西側から1列 (233SA125) が確認されたが、調査区の制約や遺構間重複により全容は把握されていない。また第Ⅱ面の調査区中央のやや南側から1列 (233SA155) が発見されている。

## 233SA125 (第6・21図、図版9)

調査区の西側に位置し、第Ⅰ面のI5区からC6区にかけて8間が出された。小穴群 (233SX057) を切って構築されているが、南側の柱穴上部がたまり状遺構 (233SX126) により削られている。また直接的な切り合い関係はないが、掘立柱建物 (233SB130) と重複する。南北方向に延びるが、北側は調査区外に展開すると考えられ、南側は遺構間の重複により確認されず、全容は捉えきれない。最終的に検出された長さは17.4mを測り、柱穴間の距離は北からa-g間は2.1m (7小尺) 等間、g-h間は2.25m (7.5小尺)、h-i間は2.55m (8.5小尺) となるが、柱穴hには重複が認められ、g-h間2.7m (9小尺)、h-i間2.1m (7小尺) となる可能性も想定される。主軸方位はN-7°-Eを指針し、溝 (233SD005) に並行する。柱穴の掘り方は、略円形または楕円形を呈し、規模は長径で35~92cm、深さは12~50cmを測る。覆土は暗灰褐色土・暗褐色土・褐色土で構成され、遺物は検出されていない。

## 233SA155 (第7・21図)

調査区の南側に位置し、第Ⅱ面のD3・4区から3間が出された。小穴群 (233SX198) に一部を壊されているが、小穴群 (233SX200) の一部を切って構築されている。東西方向に延び、全長は4.35mを測る。柱穴間の距離は西からa-b間は1.35m (4.5小尺)、b-e間は1.65m (5.5小尺)、c-d間は1.35m (4.5小尺) であり、主軸方位はN-87°-Wを指針する。柱穴の掘り方は、略円形または楕円形を呈し、規模は長径で28~32cm、深さは13~24cmを測る。覆土は黒褐色土で構成され、出土遺物は僅少である。



第21図 233SA125 (1/100)、233SA155 (1/50)

### 5) 土坑

今回の調査で検出された土坑は22基（第Ⅰ面19基、第Ⅱ面3基）である。ここでは7基（233SK014・037・055・075・088・095・110）について述べることにする。特に2基（233SK055・095）からは大量の遺物が出土している。

#### 233SK014（第6図）

調査区第Ⅰ面北側のK2・3区から検出され、溝（233SD018）、たまり状遺構（233SX013・016）を切って構築されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径（東西）1.95m、短径（南北）1.4m、深さは4～17cmを測る。覆土は暗褐色土で構成される。出土遺物は僅少であるが、土師器環aの量から13世紀中頃（大宰府XV期）の埋没と考えられる。

#### 233SK037（第6図）

調査区第Ⅰ面中央のやや東南側に位置し、F1・2区から検出された。南側をたまり状遺構（233SX036）に壊されているが、溝（233SD005）の上部を切って構築されている。平面形は楕円形と推定され、最終的に検出された範囲は、長径方向（北東-南西）2.35m、短径（北西-南東）1.73m、深さは8～34cmを測る。底面には凹凸が認められ、覆土は暗褐色土で構成されている。埋没時期は溝（233SD005）より後の13世紀後半～14世紀前半とすべきか。

#### 233SK055（第6・22図、図版9）

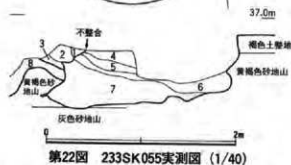
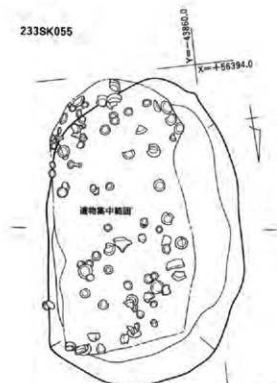
調査区第Ⅰ面中央のやや南側に位置し、E2区から検出された。たまり状遺構（233SX036）に切られ、溝（233SD005）を切って構築される。平面観察時には溝（233SD005）が新しいと判断されたが、本遺構と溝（233SD005）の埋没後に溝（233SD005）側の下位層に不等沈下が生じ、本遺構東側の一部が溝（233SD005）側に円弧状に滑り落ちたと考えられ、最終的には本遺構が新しいと判断された。平面形は楕円形を呈し、規模は長径（南北）6.2m、短径（東西）3.7m、深さ60～90cmを測る。覆土は下層から黄褐色土→褐色土→黒褐色土→褐色土→暗褐色土→黒褐色土→明褐色土→暗灰色土の順に形成され、覆土全体に遺物は包含されているが、特に黄褐色土と褐色土には遺物が多量に含まれ、その上面に形成される黒色土は炭化物主体層である。出土遺物の様相から、F期（13世紀後半～14世紀前半、大宰府XVII～XIX期）以降の埋没と推定される。

#### 233SK075（第6図）

調査区第Ⅰ面南東隅のB0・1区から検出された。土坑（233SK088）と小穴（233SX089）に切られ、南側から東側は調査区外に展開することから平面形および規模については不明であるが、深さは38cmほどを測る。覆土は下層から暗灰色土→褐色土→黒褐色土→暗褐色土の順に形成されている。埋没時期は出土遺物の土師器供膳具から、13世紀前後（大宰府XVI）頃と考えられる。

#### 233SK088（第6図）

調査区第Ⅰ面の南端に位置し、A・B1区から検出された。土坑（233SK075）、たまり状遺構（233SX094）を切って構築されているが、南側は調査区外に展開している。平面形は楕円形と推定され、最終的に検出された範囲は、東西方向で1.90m、深さは30cmほどを測る。覆土は下層から暗灰色土→暗褐色土の順で形成される。出土遺物の土師器供膳具から、13世紀前半～後半（大宰府XVI～XVII期）以降の



第23図 233SK095実測図 (1/40)

- 233SK095
- 1層 褐色土 粒径5mmの花崗岩片を多数、粒径10mmの炭化物を少量含む。
  - 2層 褐色土 粒径10mmの灰色土ブロック、粒径5mmの炭化物を少量、粒径5mm以下の花崗岩片を少量含む。
  - 3層 黒褐色土 炭化物主体層。
  - 4層 黒褐色土 層は1層と同じ。
  - 5層 黒褐色土 層は3層と同じ。
  - 6層 褐色土 粒径20mmの炭化物を少量含む。
  - 7層 黒褐色土 最大粒径150mmの黒褐色粘土ブロック、最大粒径20mmの炭化物を少量含む。
  - 8層 茶色土 233SD005茶色土。

- 233SK095
- 1層 黒褐色土① 粒径3~10mmの炭化物・粒径3~5mmの礫・遺物を包含する。
  - 2層 黒褐色土② 多数の遺物が含まれる。
  - 3層 黒褐色土③ 粒径3~10mmの炭化物を少量、遺物を多く含む。
  - 4層 灰褐色土 粒径3~8mmの炭化物を少量含む。

埋没と考えられる。

233SK095 (第6・23図、図版9)

調査区第I面の南端に位置し、A・B・5区から検出された。土坑(233SK110)、小穴(233SK162)の一部を壊されているが、溝(233SD070・105・115・120)、小穴(233SK164)を切って構築されている。平面形は不整形円形を呈し、規模は長径(東西)2.5m、短径(南北)1.75m、深さは10~40cmを測る。覆土は灰褐色土→黒褐色土②→黒褐色土③→黄灰色土→黒褐色土①の順に形成され、黒褐色土②中には遺物が多量に含まれている。出土遺物の様相から、13世紀後半(大宰府XV期)以降の埋没と考えられる。

233SK110 (第6図)

調査区第I面の南端に位置し、A・4・5区から検出された。土坑(233SK095)、たまり状遺構(233SX222)、小穴(233SX221)を切って構築されているが、南側は調査区外に展開している。平面形は楕円形と推定され、最終的に検出された範囲は、東西方向で1.12m、深さは40cmほどを測る。覆土は下層か

ら灰褐色土→黒褐色土→暗灰色土の順で形成されている。出土遺物の土師器供養具から、14世紀初頭~後半(大宰府XIX~XX期)頃の埋没と考えられる。

6) その他の遺構

ここでは、たまり状遺構6基(233SX001・012・036・090・126・180)、小穴群4カ所(233SX028・030・093・221)、不明遺構(233SX117)について述べる。

a) たまり状遺構

233SX001 (第6図)

調査区第I面の北端に位置し、L1~M2区にかけて検出された。溝(233SD005)、井戸(233SE011)、土坑(233SK006)、たまり状遺構(233SX016)、小穴および小穴群(233SX007・009・024・026)の上面に構築され、北西側は調査区外に展開する。最終的に検出された範囲は、長軸(北西~南東)5.0m、短軸(北東~南西)2.5m、深さは5cmほどを測る。覆土は暗褐色土を呈し、出土遺物の様相から、F期(13世紀前後~14世紀初頭、大宰府XVII~XIX期)以降の埋没と考えられる。

233SX012 (第6図)

調査区第I面の北側に位置し、I~K1・2区から検出された。溝(233SD005・018)、井戸(233SE060)、たまり状遺構(233SX016・033・034)、小穴(233SX027・041・042)を切って構築されている。平面形は不整形を呈する。規模は長軸(南北)6.60m、短軸(東西)4.25m、深さは2~18cmを測る。覆土は下層から褐色土→黒褐色土→暗褐色土・褐色土の順に形成されている。出土遺物の様相から、F期(13世紀前後~14世紀初頭、大宰府XVII~XIX期)以降の埋没と考えられる。

233SX036 (第6図)

調査区第I面の南側に位置し、D・E1・2区から検出された。溝(233SD005)、土坑(233SK037・056)を切って構築され、南側は昭和53年度の九州歴史資料館の調査地点に及んでいる。平面形は長円形と推定され、最終的に検出された範囲は、長軸方向(南北)5.35m、短軸(東西)3.50m、深さは7~37cmを測る。底面には凹凸が認められ、覆土は下層から黒褐色土→黒灰黄色土の順に形成されている。出土遺物の土師器供養具から、14世紀初頭~後半(大宰府XIX~XX期)以降の埋没と考えられる。

233SX090 (第6図)

調査区第I面の南端に位置し、A・4区から検出された。たまり状遺構(233SX222)を切って構築されているが、南側が調査区外に展開し、全容は捉えられていない。形態および規模は不明であるが、深さは5~30cmを測る。覆土は下層から灰褐色土→黒褐色土→暗灰色土の順で形成され、出土遺物の様相から、F期(13世紀前後~14世紀初頭、大宰府XVII~XIX期)以降の埋没と考えられる。

233SX126 (第6図、図版9)

調査区第I面の南側に位置し、B~D6区から検出された。溝(233SD070)、溝列(233SA125)、小穴群(233SX133)の上面に構築されている。平面形は不整形を呈し、長軸(南北)5.0m、短軸(東西)1.5~2.5m、深さは10cmほどを測る。覆土は暗褐色土で構成され、出土遺物の土師器供養具から、13世紀前半(大宰府XVI期)頃の埋没と考えられる。

### 233SX180 (第7図)

調査区第Ⅱ面中央のやや西側のF4・5区から検出され、一部を小穴群(233SX201)に切られている。平面形は不整形を呈し、長軸(北西-南東)3.25m、短軸(北東-南西)0.9~2.45m、深さは2~10cmを測る。覆土は下層から暗褐色土→暗黄褐色土→暗褐色土の順に形成され、出土遺物はない。

### b) 小穴

#### 233SX028 (第6図)

調査区第Ⅰ面北側のJ2・3区から検出された9穴の小穴である。井戸(233SE015)を囲むように確認されていることから井戸の上層施設の可能性が考えられ、たまり状遺構(233SX033)を切って構築されている。平面形は略円形ないし楕円形を呈し、長径15~35cm、深さは2~23cmを測る。覆土は暗褐色土で構成され、出土遺物の様相から、12世紀中頃以降の埋没と考えられる。

#### 233SX030 (第6図)

調査区第Ⅰ面西端のI4・5区から検出された3穴の小穴で、一部は調査区外へ展開し、たまり状遺構(233SX019)、小穴(233SX031)に切られている。いずれも平面形は楕円形を呈し、規模は長径で約75cm、深さは12~53cmを測る。3穴の配置は鉤の手状を呈することから掘立柱建物構成の可能性も考えられる。覆土は暗褐色土→灰褐色土→暗灰色土の順に形成され、出土遺物の様相から、下期(13世紀前後~14世紀初頭、大宰府XVII~XIX期)以降の埋没と考えられる。

#### 233SX093 (第6図)

調査区第Ⅰ面南東側のB1・2区から検出された6穴の小穴で、溝(233SD005)を切って構築されている。平面形は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で25~50cm、深さは13~24cmを測る。覆土は黒褐色土で構成され、出土遺物の様相から、平安時代中期頃の埋没と考えられる。

#### 233SX221 (第6図)

調査区第Ⅱ面南端のA・B4区から検出された1穴の小穴で、第Ⅰ面の溝(233SD105)、土坑(233SX095・110)に切られている。平面形は楕円形と推定され、規模は東西方向で50cm、深さは35cmほどを測る。覆土は暗褐色土で構成される。出土遺物は土師器A類の小片が僅かに出土したに留まり、詳細は不明。

### c) 不明遺構

#### 233SX117 (第6図)

調査区第Ⅰ面の南西端に位置し、A8区から検出された。西側から南側は調査区外に展開し、東側はコンクリート基礎により壊され、全容は捉えきれていない。調査し得た範囲が狭く、形態および規模については不明であるが、深さは42cmを測る。覆土は暗褐色土で構成され、出土遺物の様相から、11世紀前後(大宰府X期)頃の埋没と考えられる。

## 2. 遺物

### 1) 溝出土遺物

#### 233SD005暗褐色土出土遺物(第24・25図)

##### 土師器

坏a(1~6) 口径14.0~15.0cm、器高2.6~3.4cm、底径9.3~10.7cmを計測し、いずれも底部は糸切り離し。1・3~6の内面見込みには螺旋状の回転ナダが施される。2の胎土には白雲母を多く含む。坏a(遺物計測表) 口径11.8~15.6cm、器高2.2~3.5cm、底径7.6~11.6cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。M-002・007・012・022・034・040・043・046・047・048・055・058の見込みには細線状を呈する螺旋状の回転ナダが残る。

小皿a(7~13) 7~11の法量は口径8.2~9.2cm、器高0.7~1.4cm、底径6.0~7.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。9の内面見込みには糸原体(単節R)が弧状に付着した痕が観察される。11の底面中央には径0.6cmの孔が焼成後に穿たれる。12は口径8.6cm、器高1.4cm、底径6.0cmに復原され、底部は手捏ねによって仕上げられる。13は手捻りによって口縁部を波状に仕上げた資料であり、口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.2cmに復原される。底部は糸切り離し。

小皿a(遺物計測表) 口径6.8~9.5cm、器高0.8~1.4cm、底径6.0~8.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。M-090・102の見込みには螺旋状の回転ナダが残る。

小皿(14~16) 14はコースター状を呈し、口径6.0cm、器高0.8cm、底径5.4cmに復原される。15は口縁部が内湾する器形を呈し、口径7.0cm、器高1.1cm、底径6.7cmを測る。16は体部が内傾する器形を呈し、口径7.3cm、器高0.9cm、底径8.4cmを計測する。14・15の底部は糸切り離し。16の底面調整は不明である。

##### 瓦器

碗c(17) 体部から高台の破片で、現存高4.6cm、底径7.0cmに復原される。外面は指頭調整ののち回転ナダが施され、内面は指頭調整が観察される。

##### 須恵質土器

鉢(18) 口縁部から体部下端の破片で片口器が遺存する。口径28.4cm、現存高10.0cm、底径9.6cmに復原される。東播磨系であり、第Ⅱ期2段階に属する。

##### 瓦質土器

鉢(19) 口縁部から体部上半の破片で、現存高4.8cmを計測する。A1類。

##### 白磁

碗(20) 口縁部から体部上半の破片で、口縁部には屈折し、外方に尖る。現存高2.4cmを計測する。V-4類あるいはⅡ-1・3類と考えられる。

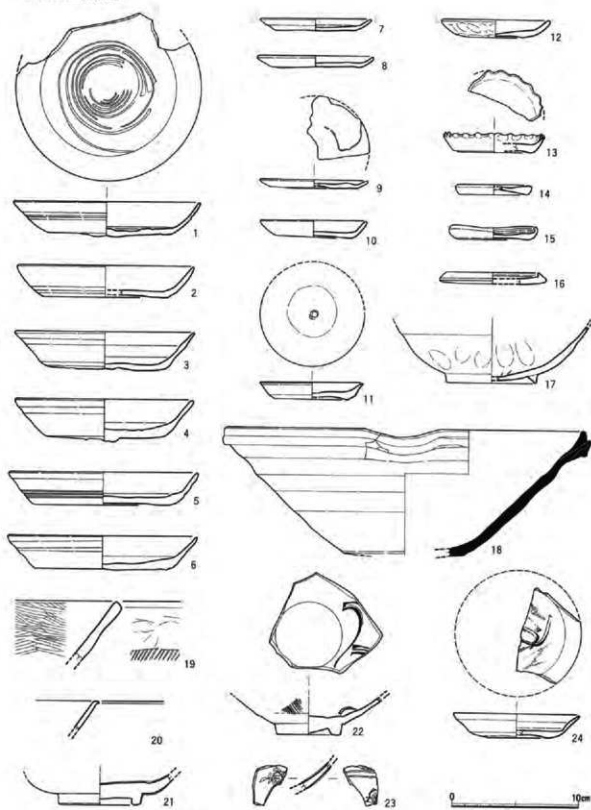
##### 青磁

碗(21・22) 21は現存高2.5cm、底径6.5cmを計測する。龍泉窯系青磁I類。22は現存高3.1cm、底径5.0cmを計測する。同安窯系青磁I-Ib類。

碗か(23) 現存高2.2cmを計測する碗の体部と推定される破片。胎土は堅緻で黒色微粒子を含み、暗灰色を呈する。外面には團線と花を黒・白象嵌し、内面には花果と葉が白象嵌される。暗青緑色に発色する釉は内外面に施され、柔らかな光沢を持つ。象嵌高麗青磁。

皿(24) 口径10.0cm、器高2.1cm、底径5.2cmに復原される。同安窯系青磁I-1b類。

233SD005暗褐色土



第24図 233SD005遺物実測図1 (1/3)

瓦製品

瓦玉 (25) 明灰色を呈する瓦片を研磨し円柱状に成形する。径2.5~2.6cm、厚さ1.7cm、重量11.4gを計測する。

金属製品

釘 (26・27) 鉄素材を鍛造により成形。26・27とも先端部を欠損する。26は現存長3.3cm、重量5.0g、27は現存長6.6cm、重量7.5gをそれぞれ計測する。

板形鍛冶滓 (28) 断面上半の色調は茶褐色で鉄錆状、断面下半の色調は黒灰色で多孔質構造の金属状を呈する。底部は比較的平滑で、小孔はみられないことから炉底部に接していたと推定される。非磁着。規模6.8×11.2cm、厚さ4.2cm、重さ390gを量る。

233SD005暗灰褐色土出土遺物 (第25・26図)

土師器

环 a (29) 口縁部から体部上半約 $\frac{1}{2}$ を欠損する。口径15.2cm、器高3.0cm、底径10.8cmを計測し、底部は回転糸切り難し。見込みには螺旋状の細い条線を残す回転ナデが施される。

环 a (土師器計測表) 口径13.6~15.2cm、器高2.4~3.4cm、底径8.2~11.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。M-002・013・024の見込みには螺旋状の回転ナデが残る。M-011の外面上には油煙が観察される。

大椀 c (30) 高台部が遺存する。現存高3.6cm、高台径11.2cmを計測する。

小皿 a (31・32) いずれも底部は糸切り難し。31の内底面は螺旋状の回転ナデののち、横ナデを施す。底部中央には径0.6cmの円孔が焼成後に穿たれる。口径7.8cm、器高1.2cm、底径5.6cmを測る。32は外面体部から底部にかけて墨跡が観察される。口径9.4cm、器高1.1cm、底径7.2cmに復原される。

小皿 a (土師器計測表) 口径6.4~9.3cm、器高0.6~1.7cm、底径5.0~7.6cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。M-024・032の見込みには螺旋状の回転ナデが残り、M-019の外面上には油煙が観察される。

小环 (33) 口縁部から底部外周が遺存する破片で、現存高3.4cmを計測する。胎土は緻密で白色微粒子をやや多く含む。底部は糸切り難し。焼成は良好で黒灰色を呈する。体部外面と内底面には油煙が付着する。未分類資料。

瓦器

椀 c (34) 体部下半から高台の破片。現存高1.8cmを計測する。高台周辺は高台貼り付けにともなう回転ナデ、その他の器面にはミガキが施される。

菊皿 (35) 底部を欠損する破片。口径10.0cm、現存高2.8cmに復原される。菊花状の内型による成形ののち、弱い回転ナデが内外面に加わる。胎土は堅緻。焼成は良好で灰白色を呈する。

須恵質土器

鉢 (36) 口縁部から体部上半の破片で現存高4.8cmを計測する。胎土は堅緻。焼成は良好で暗灰青色を呈する。東播系であり、第Ⅱ期2段階に属する。

瓦質土器

鉢 (37) 口縁部から体部上半の破片で現存高4.0cmを計測する。内外面ハケ目ののち、口縁部横ナデ、体部外面に指頭調整を施す。胎土は堅緻で、白色粒子をやや多く含む、角閃石も含有する。焼成は良好。AⅠ類。

### 緑釉陶器

碗×皿 (38) 体部下端から高台が遺存する。現存高1.6cm、高台径6.5cmを計測する。高台は削り出し。器面はミガキののち、高台内から登付を除いて、非常に薄い釉を施す。胎土は軟質緻密で薄黄灰色を呈し、釉は光沢質で薄黄白色に発色する。京都系。

壺 (39) 高台部の破片で現存高2.9cmを計測する。高台は貼り付け。胎土は堅緻、須恵質で暗灰色を基本とするが、部分的に酸化焙焼成気味で黄褐色を呈する。釉は濃緑色に発色し光沢がある。産地不明。

### 灰釉陶器

壺 (40) 頸部付近の破片とみられ、現存高3.9cmを計測する。胎土は緻密で暗青灰色あるいは灰黄色を呈する。外面は頸部下半に横位のカキ目が8条遺存し、外面には暗緑色に発色する釉が薄く施される。内面は摩耗が著しく調整不明。

### 白磁

碗 (41・42) いずれもⅡ-2類あるいはⅢ-3類の体部下半から高台が遺存する資料で、41の見込み軸剥ぎ部分には重ね焼きによる白土が付着する。42の高台内には「十」であろうか、墨書が観察される。41は現存高3.6cm、高台径7.0cm、42は現存高2.6cm、高台径6.2cmをそれぞれ計測する。

皿 (43) 約半遺存し、口径10.0cm、器高2.2cm、底径3.7cmに復原される。Ⅱ-1b類。

### 青磁

壺 (44) 体部と推定される破片で、現存高3.4cmを計測する。外面上位にヘラ状工具による施文が観察される。胎土は粘質緻密で灰黄色を呈し、半光沢質の釉は暗緑色に発色する。越州窯系青磁Ⅲ系か。

碗 (45) 口径16.4cm、器高6.4cm、底径5.9cmを計測する。遺存部位から体部内面に施される略花文は3単位と考えられる。体部内外面には横方向の微細な擦痕が観察される。龍泉窯系青磁Ⅰ-2a類。

### 青白磁

碗 (46) 体部下半から高台にかけて遺存する。現存高1.6cmを計測し、高台径3.2cmに復原される。内面にはヘラ状工具によって花卉あるいは葉状の施文がなされる。胎土は堅緻で灰白色を呈するが、高台は酸化焙焼成気味で暗黄褐色を呈する。釉は高台を置いて施され、釉調は光沢質で青緑灰色に発色し、貫入が生じる。

皿 (47) 口縁部破片で、現存高1.5cmを計測する。鋭利な口縁端部には輪花と推定されるキザミが1か所遺存する。胎土は堅緻で灰白色を呈し、光沢質で緑白灰色に発色する釉が内外面に施される。

合子蓋 (48) 現存高2.2cmを計測する破片。胎土は堅緻で灰白色を呈し、光沢質で青緑灰色に発色する釉は下端部を除いて施される。

### 中国陶器

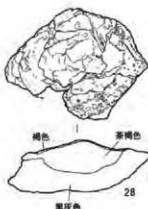
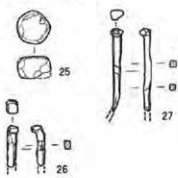
盤 (49) 口縁部から体部上半の破片で、口縁部上面が湾曲し先端を曲げる。現存高3.8cmを計測する。Ⅰ-1'類。

耳壺 (50) 胴部上半の破片で横耳が1個遺存し、耳の上部には横沈線が2条入る。現存高は5.4cmを計測する。胎土は堅緻で黒・白色粒子を含み、暗灰色を呈し、外面には暗緑灰色の釉に濃茶色の釉が掛け流される。胎土、釉の特徴からB群に属する。

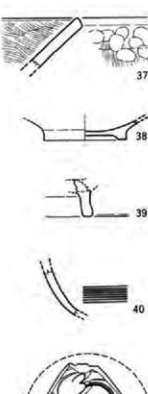
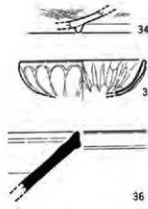
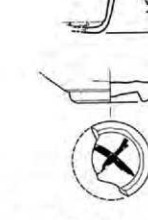
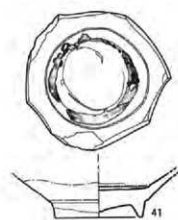
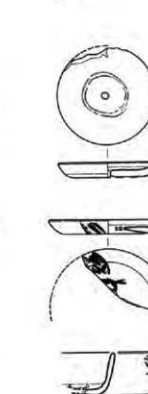
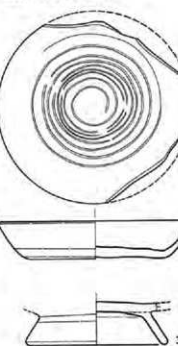
耳壺×壺 (51) 体部下半から底部が遺存し、現存高2.5cm、底径7.6cmを計測する。底部には判読困難な墨書が書かれる。胎土は堅緻で黒色粒をやや多く含み、明青灰色を呈するが、底部付近の焼成は酸化焙焼成気味で黄褐色を呈する。内面底部に茶灰色から緑灰色に発色する釉が観察される。B群。

壺 (ミニチュア) (52) 体部から底部が遺存する資料で、現存高1.7cmを計測し、底径1.7cmに復原さ

### 233SD005暗褐色土



### 233SD005暗灰褐色土



第25図 233SD005遺物実測図2 (1/3)

れる。胎土は砂質で堅緻だが、酸化焙焼成気味で薄い赤褐色を呈する。釉は黄緑灰色から白灰色に発色し、内面と外面上位に施される。胎土、軸の特徴からB群に属する。

#### 瓦類

軒平瓦 (53) 瓦当左側が遺存し、現存長5.5cm、現存瓦当幅8.7cm、瓦当面の厚さ4.0cmを計測する。内区には唐草文、外外区には鋸齒文、下外区には珠文が配置される。焼成は良好で須恵質を呈する。

瓦玉 (54-57) いずれも瓦を研磨し、略円柱状に成形する。54には瓦凸面の格子目が残し、55・56には瓦凹面の布目が残る。57は全面が顕著に研磨される。各法量は、54は径2.2-3.0cm、厚さ2.3cm、重量16.8g、55は重量2.0-2.8cm、厚さ1.4cm、重量8.8g、56は径2.3-3.0cm、厚さ2.0cm、重量14.8g、57は径2.2-2.35cm、厚さ1.9cm、重量9.5gをそれぞれ計測する。

#### 土製品

柱状土製品 (58・59) 板状粘土を丸めて角柱状に成形し、表面をナメ仕上げする。58は端部に向けやや反り気味に幅・厚さを減じる。現存長14.8cm、最大幅・厚さは4.0×3.8cmを計測する。胎土は砂質で白色礫を多く含み、淡黄褐色を呈する。59は現存長6.2cm、最大幅・厚さは4.0×4.0cmを計測する。胎土は砂質で白色礫をやや多く含み、暗茶灰色を呈する。

輪羽口 (60) 羽口端部付近の破片。現存長4.8cm、厚さ1.7cmを計測する。端部付近外面は外面が発泡し多孔質となり黒灰色を呈し、基部側は灰色を呈する。内面送風部は淡黄灰色を呈する。

#### 金属製品

鉄滓 (61) 長さ5.5cm、最大幅2.65cm、重量17.2gを計測する。表面には0.5-1.0mmの円孔が多く生じ、内部も発泡している。実測図左側の面は流動痕跡が顕著で暗灰色を呈し、同右側の面は凹凸が少なく鉄錆化した茶色を呈する。非磁着。

#### 石製品

硯 (62) 黒灰色を呈する粘板岩系の石材を素材とする。視面は使用により凹み、墨が部分的に付着する。現存長8.5cm、現存幅4.2cm、最大厚1.8cmを計測する。

### 233SD005灰色土出土遺物 (第26図)

#### 土師器

坏 a (63) 口径14.0cm、器高2.7cm、底径10.2cmに復原される。底部は糸切り離し。

坏 a (土師器計測表) 口径15.6cm、器高2.2cm、底径12.0cmを計測する。底部は糸切り離し。

小皿 a (土師器計測表) 口径8.8cm、器高1.1cm、底径6.8cmを計測する。底部は糸切り離し。

#### 青磁

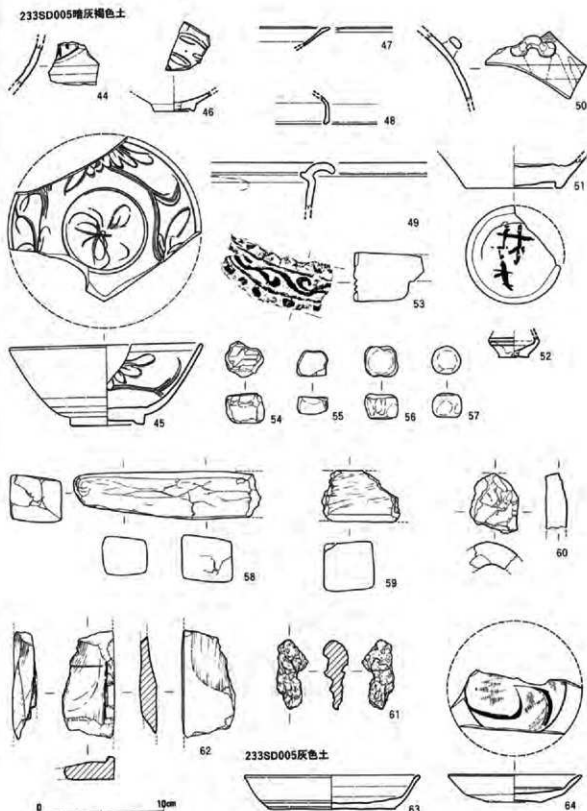
皿 (64) 口径10.6cm、器高2.2cm、底径4.4cmに復原される。同安楽系青磁 I-2 b 類。

### 233SD005暗茶褐色土出土遺物 (第27図)

#### 土師器

坏 a (土師器計測表) 口径14.4-15.2cm、器高2.1-3.3cm、底径8.5-12.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。M-002・003・004の見込みには螺旋状の回転ナデが施される。

坏 (65) 口縁部から底部外周の破片。現存高3.3cmを測る。内面調整は口縁部に向けナデ上げられており、手持ちでの成形が考えられる。京都系。



第26図 233SD005遺物実測図 3 (1/3)



小皿 a (土師器計測表) 口径8.6~9.4cm、器高0.9~1.4cm、底径6.6~7.6cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。M-011の内面には油煙が付着する。

小皿 (66) 口縁部から底部の破片で、コースター状の器形を呈し、口径5.2cm、器高0.9cm、底径5.6cmに復原される。底部は糸切り難し。

#### 土師質土器

鍋 (67・68) 67は口縁部から体部上半の破片。現存高は7.8cmを計測する。歪みのある口縁部上端面には疎らな縄の圧痕が観察される。外面には煤が付着する。A類。68も口縁部から体部上半の破片。現存高は3.4cmを計測する。体部は口縁に向かって内湾し、口縁下1.5cmの部位に断面三角形の鈎を貼付する。鈎の下面には煤が付着する。CⅢ類。

#### 須恵質土器

鉢 (69) 口縁部から体部下端の資料で片口部が遺存する。口径27.2cm、現存高10.3cmを計測する。東播系であり、第Ⅱ期2段階に属する。

#### 白磁

椀 (70) Ⅱ-1類の体部下半から高台にかけての破片で、現存高2.8cmを計測する。内面見込み釉剥ぎ部分に茶色を呈する膜状の附着物が観察される。

#### 青磁

椀 (71) 口縁から体部下端にかけての破片で、口径12.4cmに復原され、現存高5.2cmを計測する。龍泉系青磁Ⅰ-6a類。

#### 青白磁

合子蓋 (72) 直径6.4cm、器高1.7cmに復原される。型成形により、外面に花文を打ち出す。胎土は堅緻で黒色粒子を含み、白灰色を呈する。光沢質で青緑色に発色する釉は外面および内面天井部に施され、内面の釉は細貫入を生ずる。

#### 土製品

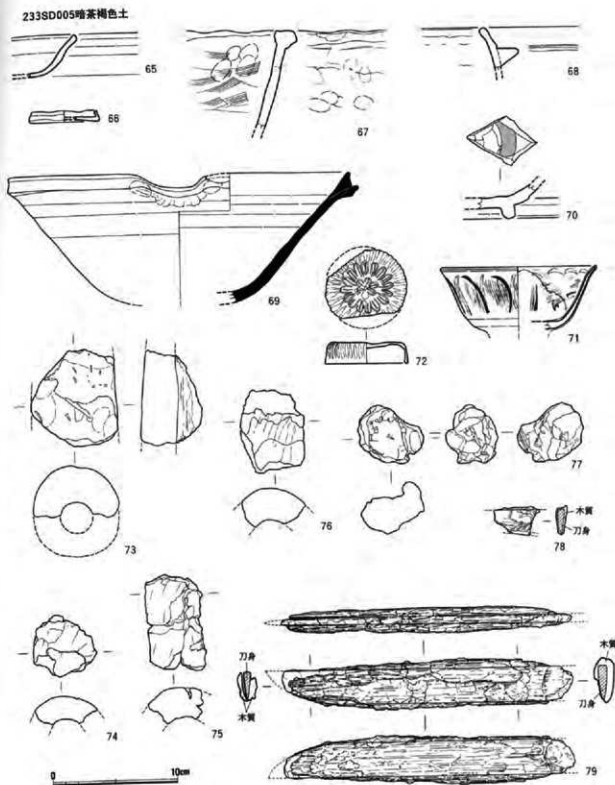
輪羽口 (73~76) いずれも送風方向は実測図上方と推定される。73は現存長7.7cmを計測し、送風孔径2.7cm、外径6.8cmに復原される。送風孔内面には縦方向の条痕が観察され、芯棒の抜き取り跡と推察される。胎土は白色礫を多く含み、先端部付近外面は暗灰色を呈し、基部側に向け灰白色に色相変化する。内面送風部は淡橙色を呈する。74は現存長4.9cmを計測し、送風孔径3.0cm、外径7.0cmに復原される。外面は灰色を呈し、内面送風部は淡赤橙色を呈する。75は現存長7.65cmを計測し、送風孔径2.0cm、外径7.0cmに復原される。外面基部側は黒灰色を呈し、基部側に向け灰白色に色相変化する。内面送風部は橙色を呈する。76は現存長6.6cmを計測し、送風孔径2.0cm、外径7.0cmに復原される。先端部付近外面は暗灰色を呈し、基部側に向け灰白色から褐色に色相変化する。内面送風部は橙色を呈する。

焼土塊 (77) 規模は4.6×5.2×4.1cmを計測する。芯材の痕跡と推定される器面の滑らかな部位が1ヵ所観察される。胎土中にはササの痕跡を包含する。胎土は淡赤褐色から黄灰色を呈する。

#### 金属製品

刀子 (78) 切先付近とみられ、現存長3.6cm、身幅2.0cmを計測する。刀身は平造り両刃で、錆化し褐色を呈する。刀身は全体を木質に覆われている。

刀 (79) 切先を欠損した刀身の一部で、現存長23.0cm、身幅2.6cm、棟幅0.7cmを計測する。刀身は平造り両刃で、ほぼ全体を木質に覆われている。



第27図 233SD005遺物実測図4 (1/3)

233SD005明灰色土出土遺物 (第28図)

白磁

皿 (80) 明灰色土最上端面から出土した。口縁から体部上半約1/2を欠損している。口径8.8cm、器高1.7cm、底径5.4cmに復原される。やや青味がかかる軸が内外面に施されるが、体部外面下位以下は露胎となる。Ⅲ-1'類。

233SD005明茶色土出土遺物 (第28図)

土師器

坏 a (81~83) いずれも底部は糸切り難し。81は口径14.2cm、器高2.9cm、底径9.9cm。82は口径14.4cm、器高3.2cm、底径10.1cm。83は口径14.4cm、器高2.9cm、底径10.0cmをそれぞれ計測する。

丸底坏 a (84) 口縁部から体部の小片で、現存高2.9cmを計測する。口縁部回転ナデ、体部内外面にはナデが施され、体部外面下位には指頭痕が僅かに認められる。

小皿 a (85~88) 85は口径8.8cm、器高1.1cm、底径7.2cmで、底部は糸切り難し。86は口径8.9cm、器高1.5cm、底径7.3cm。87は口径8.8cm、器高1.5cm、底径6.8cm。88は口径9.9cm、器高1.6cm、底径7.1cmをそれぞれ測り、底部調整はいずれも手捏ね。

小皿 a 2 (89) 口径8.8cm、現存高1.7cm、底径7.0cmを計測する。底部調整は不明。

土製品

土馬 (90) 土馬の頭部から胴部前半の左半身が遺存する資料で、現存長10.6cm、現存最大幅2.8cmを計測する。指頭調整で粗形を作ったのちヘラケズリにより頭部を成形し、鼻先にヘラ状工具で真一文字のキザミを入れ口吻部を表現する。胴部下端には略円形の器面剥離が観察されるが、この部位に左前脚が貼付されていたものと推定され、脚の貼付位置から頭を垂れる姿勢が想定される。胎土は堅緻であり、瓦質焼成で器面は暗青灰色を呈する。

233SD005茶色土出土遺物 (第28図)

土師器

坏 a (91) 口径15.4cm、器高3.1cm、底径10.8cmを計測する。底部は糸切り難し。

坏 (92) 口径13.8cm、器高2.7cm、底径9.4cmを計測する。内面は不定方向のナデで仕上げられ、体部下半には指頭調整が観察されることから、手持ちでの成形が考えられる。京都系。

小皿 (93) 体部が内傾しコースター状を呈する。体部は回転ナデ、底部内外面はナデ調整。口径6.2cm、器高1.3cm、底径7.6cmを計測する。

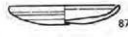
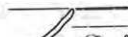
緑釉陶器

碗×皿 (94) 体部下端から高台の破片。現存高1.3cmを計測し、高台径6.4cmに復原される。底部内面はヘラミガキ、底部外面は回転ナデののち高台貼り付け。胎土は緻密。焼成はやや酸化焙焼成気味で部分的に薄赤橙色を呈する。光沢質で緑黄色に発色する軸は全面に施されるが、剥落が著しい。防長系。

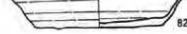
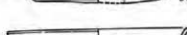
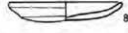
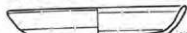
石製品

滑石製坏状製品 (95) 暗灰色を呈する滑石を素材とし、切削により成形し、底部の中心に径1.5cmの孔を穿つ。体部外面には煤が付着する。現存高2.8cm、底径7.6cmを計測する。

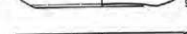
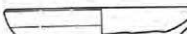
233SD005明灰色土



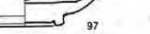
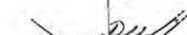
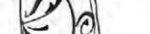
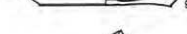
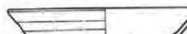
233SD005明茶色土



233SD005茶色土



233SD005暗灰色粘土



第28図 233SD005遺物実測図5 (1/3)

233SD005暗灰色粘土出土遺物 (第28・29図)

土師器

坏 a (96) 口径15.4cm、器高3.1cm、底径10.6cmを測る。底部は糸切り離し。内面見込みには螺旋状のナデが施されるが、中心部は一方向けのナデによって消される。

青磁

碗 (97) 体部下半から高台が遺存し、現存高4.7cmを計測し、高台径6.2cmに復原される。龍泉窯系青磁 I-2 類。

青白磁

碗 (98) 体部下半から高台が遺存し、現存高3.3cmを計測し、高台径6.2cmに復原される。高台内の割り込みは浅く、体部は高台盤から直線的に立ち上がる。内面には片影による略花文が施される。施釉は内外面に及ぶが高台部は露胎。半光沢で濁化した釉は灰白色に発色し、細貫入やピンホール状の釉切れを生じる。胎土は堅緻であるが、焼成は酸化焙焼成気味で高台付近露胎部は黄灰色を呈する。

木製品

火鑽臼 (99) 現存長12.4cm、最大幅3.1cm、厚さ1.4cmを計測し、針葉樹材の側端面表裏交互片側に合計12個の火鑽孔が遺存する。孔内は炭化し、孔形成に先行してV字の切り込みが入れられる。

箸 (100) 端部を欠損する。先端を尖らすように削り、断面を略円形に仕上げる。現存長10.4cmを計測する。

屑 (101・102) 櫛屑の要付近と推定される針葉樹素材の薄板で、101は現存長4.9cm、最大幅1.7cm、厚さ0.3cm、孔径0.3cm。102は現存長7.5cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、孔径0.3cmを測る。

下駄の歯 (103) 露卯下駄の歯と考えられる。形状は楕形を呈し、上部には柄を2ヶ所削り出す。遺存する片側の柄上面には、台との接腕を強固にするため、硬木素材の楔が3回打ち込まれている。接地部は斜めに磨減し、花崗岩粒が木質内に食い込んでいる。接地部幅14.7cm、上端幅10.1cm、最大厚1.9cm、高さ6.5cmを計測する。

穂杖の球 (104) 穂杖4.5cmを測る幹の上下端部を切り刻み、略球形に仕上げる。高さ4.3cmを計測する。摩擦等の使用痕はみられない。

板状製品 (105・106) いずれも針葉樹素材の薄板で、105は長さ10.5cm、幅3.4cm、厚さ0.6cmを計測する。下端面が摩擦している。106は現存長13.9cm、幅3.6cm、厚さ0.4cmを計測する。上部を主頭状に成形する。

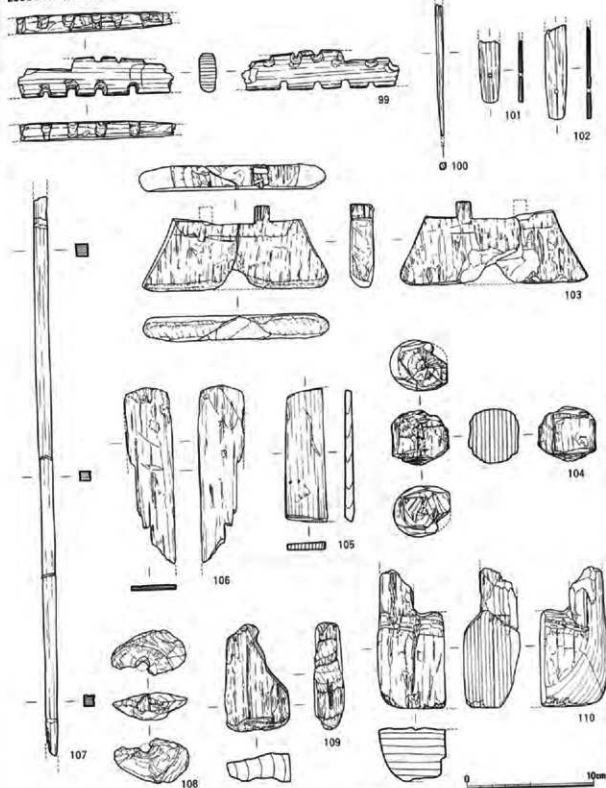
棒状製品 (107) 断面矩形の棒状製品で端部は欠損している。現存長44.0cm、幅1.0cmを計測する。  
用途不明木製品 (108~110) 108は切削により、最大径5.9cm、厚さ2.0cmのソロバン玉状に成形し、中央部付近に径1.0cmの円孔を穿つ。109は厚さ2.3cmの板材側面を階段状に切削している。下端には炭化が観察される。現存長8.4cm、最大幅5.2cmを計測する。110は最大厚4.2cmの材を切削により船底形に成形する。上部には両面から切り込みを入れ柄穴を穿つ。現存長10.9cm、最大幅5.3cmを計測する。器面摩擦が著しい。

233SD018暗灰褐色土出土遺物 (第30図)

白磁

床置物か (1) 小片であり、現存高は1.4cmを計測する。型成形とみられ、外面には突起が欠損した痕跡が観察される。薄い胎土は堅緻で灰色を呈し、淡緑灰色に発色する釉が外面と内面上半に施される。

233SD005暗灰色粘土



第29図 233SD005遺物実測図6 (1/3)

**染付磁器**

瓶(2) 肩部と推定される破片で、現存高3.1cmを計測する。成形は回転ナデ。胎土は整微で黒色微粒子を含み白灰色を呈する。染付は光沢質で微細な気泡が疎らに生じる透明釉の下に施されており、唐草文風文様の外形線を黒褐色の釉で線描したのち、同質の釉で内部を塗りつぶす技法で描かれる。内面には透明釉が施される。類例の少ない希少品である。

**土製品**

輪羽口(3・4) いずれも送風方向は実測図上方と推定される。3は基部付近と考えられる破片で、現存長3.3cmを計測する。外面は黒褐色を呈し発泡著しい。内面送風部は橙色を呈する。4は先端部と考えられる破片で、現存長4.0cmを計測する。先端部外面には黒灰色を呈するガラス質付着物が観察される。内面送風部は橙色を呈する。

**233SD040黒褐色土出土遺物(第30図)**

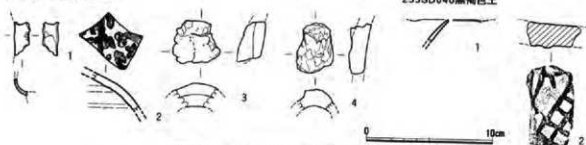
**青磁**

坏×碗(1) 口縁部から体部上半の破片で、現存高1.8cmを計測する。鋭利な口縁端部には輪花とみられるキザミが1カ所遺存する。胎土は整微で灰青色を呈し、焼成は良好。内外面に施される光沢質の釉は緑灰色に発色し、貫入を生じる。越州窯系青磁Ⅰ系。

**瓦類**

平瓦(2) 太線の斜格子目と「佐」字の下半が観察される。Ⅱ-3類。

**233SD018暗灰褐色土**



**233SD040黒褐色土**



第30図 233SD018・040遺物実測図(1/3)

**233SD070黒褐色土出土遺物(第31図)**

**土師器**

坏a(遺物計測表) 口径10.0~11.1cm、器高1.9~2.3cm、底径6.6~8.4cmを計測する。いずれも底部はヘラ切り摩し。

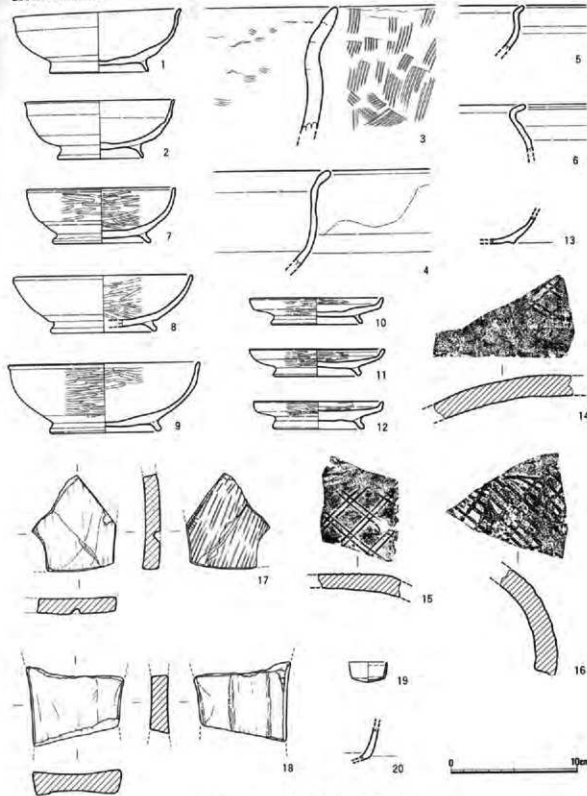
碗c(1・2) 1は口径13.2cm、器高5.0cm、底径7.8cmを計測する。2は口径11.8cmに復原され、器高4.6cm、底径6.8cmを計測する。

小皿a2(土師器計測表) 口径8.6~9.6cm、器高1.1~1.2cm、底径5.4~5.6cmを計測する。底部はヘラ切り摩し。

甕a(3) 口縁部から体部の破片で、現存高10.1cmを計測する。外面は縦位から斜位のハケ目、内面は器面が摩耗するが僅かにハケ目が残る。

鉢(4~6) いずれも口縁部から体部上半の破片で、現存高は4が7.7cm、5は3.6cm、6は3.8cmをそれぞれ計測する。4・5は丸みを帯びた体部から口縁部が緩やかに屈曲する器形を有する。内外面と

**233SD070黒褐色土**



第31図 233SD070遺物実測図(1/3)

もに横ナデ調整が施され、4の外面上位および5の外面上には煤が付着する。6は内傾気味の体部から口縁部が「く」字状に屈曲する器形を有する。内外面ともに横ナデ調整が施され、煤が付着する。

#### 黒色土器B類

椀c(7~9) 7は口径11.8cm、器高4.4cm、底径7.8cm。8は口径14.2cm、器高4.5cm、底径8.4cm。9は口径15.2cm、器高5.5cm、底径8.8cmにそれぞれ復原される。9の底部内面には横位の刻線状擦痕が観察される。

皿c(10~12) 10は口径10.6cm、器高2.1cm、底径7.3cm。11は口径10.8cm、器高2.2cm、底径7.0cm。12は口径10.4cm、器高2.2cm、底径7.3cmにそれぞれ復原される。

#### 中国陶器

小盤(13) 体部下半から底部の小片で、現存高2.1cmを計測する。胎土は黄灰色を呈し粗い。内面に暗黄灰色の釉が施される。I類。

瓦(14~16) 14・15は平瓦、16は丸瓦であり、いずれも凸面は格子目叩きである。14・15は二重斜格子目で、15の側縁には分割時裁断痕が観察される。いずれも正格子でII-A類に属する。16は横長の単斜格子目で、線の太さと格子の大きさにばらつきがある。側縁に分割時裁断痕が観察される。I-Cb類。

#### 土製品

猿面鏡(17) 須臾質土器破片の破断面を研磨、成形し内面を使用面とする。胎土は堅緻で白色粒子を多く含み、暗灰色を呈するが、部分的に暗赤褐色に発色する。裏面には須臾器製作時のハケ目調整が残る。現存長7.6cm、幅6.7cm、厚さ1.2cmを計測する。

#### 石製品

砥石(18) 灰色を呈する硬砂岩を素材とし、4面を使用し摩耗する。現存長7.6cm、幅6.3cm、最大厚1.8cmを計測する。

坏形ミニチュア滑石製品(19) 口縁部が、体部から底部が残り、口径3.0cm、器高1.6cm、底径2.5cmに復原される。切削による成形後に研磨され、薄く滑らかに仕上げられる。

坏形滑石製品(20) 体部から底部外周の破片で現存高2.6cmを計測する。内外面に研磨が施される。

#### 233SD077暗灰色土出土遺物(第32図)

##### 土師器

小皿a(1) 口縁部から底部外周の小片で、現存高0.9cmを計測する。底部は糸切り離し。

#### 233SD105暗褐色土出土遺物(第32図)

##### 土師器

坏a(遺物計測表) 口径12.8~14.2cm、器高2.4~3.3cm、底径7.0~10.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

小皿a(遺物計測表) 口径8.0~9.2cm、器高0.9~1.2cm、底径6.4~7.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

小皿(1) 口縁部から底部外周の小片で、コースター状の器形を呈し、現存高1.0cmを計測する。底部は糸切り離し。

#### 青磁

椀(2) 体部下半から高台部の破片で、現存高4.3cmを計測し、底径5.2cmに復原される。体部に片影蓮弁文が観察される。胎土は堅緻で焼成は良好、灰色を基本とするが、部分的に酸化焙焼成となり黄褐色に発色する。龍泉窯系青磁II-a類。

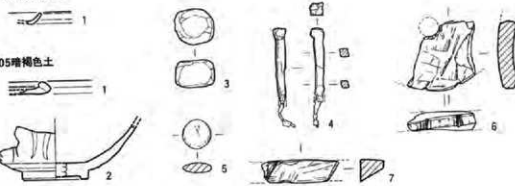
#### 瓦製品

瓦玉(3) 黄灰色を呈する土師質の瓦を打割、研磨し略円柱状に成形する。径2.8~3.3cm、厚さ2.1cmを計測する。

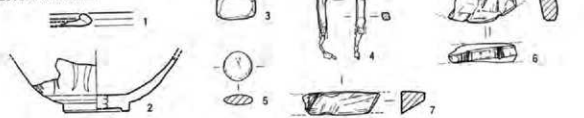
#### 金属製品

釘(4) 鉄素材を鍛造で成形、先端が折れ曲がる。現存長7.9cmを計測し、重量は14.2gを量る。

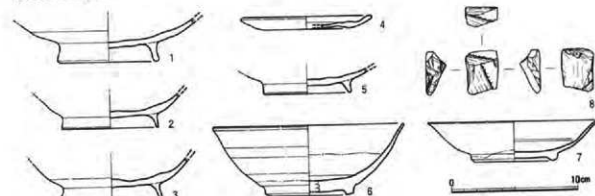
#### 233SD077暗褐色土



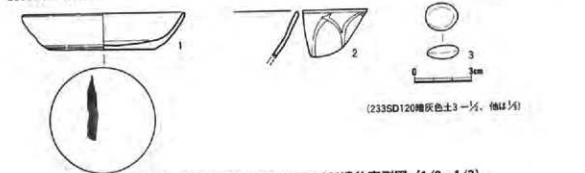
#### 233SD105暗褐色土



#### 233SD115灰褐色土



#### 233SD120暗灰色土



(233SD120暗灰色土3-坏、横4/4)

第32図 233SD077・105・115・120遺物実測図(1/2・1/3)

## 石製品

- 碁子(5) 明灰色を呈する玄武岩を素材とする。全面研磨。径2.3cm、厚さ0.8cmを計測する。
- 円盤状滑石製品(6) 外面に煤の付着する石鍋部を転用したとみられる。円盤状に成形し、中心部に円孔を穿つ。外周側面にはキザミが2カ所観察される。現存規模5.6×5.3cm、厚さ1.3cmを計測し、重量は58.5gを量る。
- 滑石製用途不明品(7) 形状から下面に煤が付着した石鍋の鋳部を転用したとみられ、両端部を欠損し、転用時に体部側を研磨する。現存長6.2cmを計測し、重量は15.4gを量る。

## 233SD105灰褐色土出土遺物

### 土師器

- 坏a(遺物計測表) 口径13.0~13.8cm、器高2.6cm、底径6.2~8.8cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。
- 小皿a(遺物計測表) 口径8.2~8.8cm、器高1.0~1.1cm、底径6.8~7.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

## 233SD115灰褐色土出土遺物(第32図)

### 土師器

- 坏a(遺物計測表) 口径10.6cm、器高1.7~2.3cm、底径7.0~7.6cmを計測する。底部はヘラ切り離し。
- 碗c(1~3) いずれも体部下半から高台が遺存する。1は現存高3.5cm、高台径8.0cm。2は現存高2.7cm、高台径7.5cm。3は現存高3.2cm、高台径8.0cmをそれぞれ計測する。
- 皿(4) 口縁部から底部の破片で、口径10.4cm、器高1.0cm、底径6.6cmに復原される。底部はヘラ切り離し。
- 皿c(5) 口縁部から高台部の破片で、口径12.3cm、器高2.2cm、高台径7.6cmに復原される。

### 灰釉陶器

- 碗(6) 口縁部から高台まで遺存し、口径15.2cm、器高5.6cm、高台径7.0cmに復原される。口縁部から体部は回転ナデ。低い角高台は削り出し。胎土は緻密であるがやや粗く砂味があり灰青色を呈し、白色微粒子と径1~2mmの白色礫を含む。半光沢質で細貫入を生じる釉は暗緑灰色から暗黄緑灰色に発色し、体部内面上位から体部外面下半まで薄く不均一に施される。産地不明。

### 白磁

- 皿(7) 口縁部から高台まで遺存し、口径13.6cm、器高3.2cm、高台径6.8cmに復原される。胎土は緻密で黒色微粒子を含み、白灰色を呈する。光沢質の釉は青白色に発色し、内面から外面体部下位まで施される。高台内に焼台痕と推定される煤が付着する。XI類。

### 石製品

- 楔状滑石製品(8) 滑石小片を切削および研磨によって楔状に成形する。表面には煤が部分的に付着する。長さ3.4cm、幅2.5cm、最大厚1.7cmを計測し、重量は15.4gを量る。

## 233SD120暗灰色土出土遺物(第32図)

### 土師器

- 坏a(1) 口縁部から底部が遺存し、口径12.9cm、器高3.0cm、底径8.4cmを計測する。底部は糸切り離し。底部外面に「一」文字の墨書が施される。

- 坏a(遺物計測表) 口径12.4cm、器高2.8cm、底径7.4~8.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。
- 小皿a(遺物計測表) 口径8.2~9.6cm、器高1.0~1.1cm、底径6.5~7.8cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。M-004の胎土には白雲母が多く含まれる。

### 青磁

- 碗(2) 口縁部から体部上半の小片で、現存高3.7cmを計測する。外面に片影連弁文が施される。龍泉窯系青磁II-a類。

### 石製品

- 碁子(3) 黒灰色を呈する片岩系の石材を素材とする。径1.45~1.7cm、厚さは0.7cmを計測する。

## 2) 井戸出土遺物

### 233SE010褐色土出土遺物(第33図)

#### 土師器

- 丸底坏a(1) 口縁部、底部が弱く遺存する資料で、口径15.0cm、器高4.2cm、底径5.6cmに復原される。調整は口縁部内外面回転ナデ、内面はナデ、体部外面下半には指頭調整痕が観察される。胎土は白色を呈し、白雲母と小礫を少量含有する。

### 233SE011暗灰色土出土遺物(第33図)

#### 土師器

- 小皿a(土師器計測表) 口径10.3cm、器高1.4cm、底径8.0cmを計測する。底部はヘラ切り離し。

#### 黒色土器B類

- 碗c(1・2) ともに口縁部を欠く資料で、1は現存高1.9cm、高台径6.8cm、2は現存高3.2cm、高台径6.4cmを測る。体部内外面ともにミガキ、高台周囲は貼り付け後に回転ナデ調整が施される。

#### 土師質土器

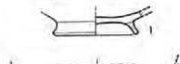
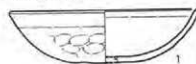
- 鉢(3) 片口部の資料で、現存高7.2cmを計測する。手捻りによって注ぎ口を作出したのち、器面にナデ調整を施す。焼成は良好であり、胎土はやや粗く3mm以下の白色粒子を多く含み、茶褐色から褐色に発色する。

#### 白磁

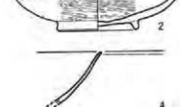
- 碗(4) 口縁部から体部が遺存し、現存高は4.1cmを計測する。緻密で灰白色を呈する胎土には黒色細粒子を含有し、内外面に施された光沢質の釉には細貫入が生じる。XI類。

233SE010褐色土

233SE011暗灰色土



233SE015暗黄褐色土



0 10cm 4

第33図 233SE010・011・015遺物実測図(1/3)

233SE015暗黄褐色土出土遺物 (第33図)

須恵貫土器

甕 (1) 口縁部から頸部の資料で、現存高3.1cmを測る。内外面を回転ナデで仕上げる。胎土には黒色・白色細粒子を含み、焼成は良好で還元化が顕明青灰色に発色する。産地不明。

233SE020黒褐色土出土遺物 (第34図)

土師器

坏 a (1) 口径10.8cm、器高2.0cm、底径7.5cmを計測する。底部はヘラ切り離し。

小皿 a 2 (土師器計測表) 口径11.6cm、現存高1.3cm、底径8.2cmに復原される。底部はヘラ切り離し。

黒色土器B類

椀 c (2) 口縁から底部にかけて約1/3が残存する資料で、口径15.6cm、器高5.4cm、高台径9.3cmに復原される。体部内外面にヘラミガキが施され、底部ヘラ切りののち、高台貼り付けに伴う回転ナデが施される。

緑釉陶器

椀×皿 (3) 口縁から体部上半を欠く資料で、現存高1.3cm、高台径6.4cmを計測する。底部は回転糸切り後に高台貼り付け。胎土は灰色から淡橙色を呈し緻密。暗緑色から緑黄色に発色する釉は高台内を除いて施される。近江系。

233SE020暗灰色土出土遺物 (第34図)

土師器

椀 c (4) 口縁部約1/3を欠くがほぼ完形の資料。口径13.0cm、器高5.0cm、底径7.8cmを計測する。口縁部と高台内に油漚が付着する。

緑釉陶器

皿 (5) 口縁部から体部上半の資料で、現存高1.3cmを計測する。胎土は緻密で灰青色を呈し、白色微粒子を含有する。光沢質で暗緑色から緑灰色に発色する釉は薄く施されており、潤滑しやすい。京都系と推定される。

木製品

櫛 (6・7) いずれも黒褐色を呈する硬木を素材とした挽歯式横櫛。歯の挽き出し位置は背部に平行して比較的直線的であり、歯は密に挽き出される。6は歯を一部欠損するのみで全形を把握でき、幅11.3cm、高さ3.8cm、背の厚さは0.9cmを計測する。7は両端を欠損し、現存幅4.7cm、高さ3.1cm、背の厚さは1.1cmを計測する。

金属製品

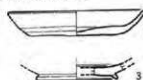
刀子 (8) 鉄素材を鍛造により成形。錆化が進行し切先、刃部、中子端部が欠損している。刃部は両刃と推定される。現存長13.8cm、刃部の最大幅1.7cm、厚さ0.4cm。中子部は最大幅1.1cm、厚さ0.3cmを計測する。

233SE020暗褐色土出土遺物 (第34図)

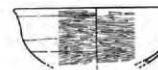
土師器

坏 a (9) 口径11.7cm、器高2.6cm、底径7.8cmに復原される。底部はヘラ切り離し。内面見込みには同心円状の回転ナデ痕が残る。

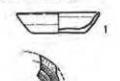
233SE020黒褐色土



233SE020暗褐色土



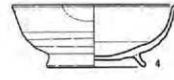
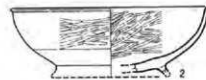
233SE025暗褐色土



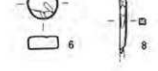
233SE025暗褐色土



233SE020暗灰色土



233SE025暗褐色土



第34図 233SE020・025遺物実測図 (1/3)

鉢(10) 口縁部から体部上半の小片であり、現存高5.1cmを計測する。口縁部内外面を横ナデ、体部内面は斜位のナデが施される。体部外面は摩耗し調整が不明瞭であるが、口縁部直下に指頭痕跡が観察される。胎土に角四石を含有する。

#### 黒色土器口類

碗c(11) 底部を欠損する資料で口径13.0cm、現存高4.4cmに復原される。内外面にヘラミガキが施される。

### 233SE025暗褐色土出土遺物

#### 土師器

小皿a(遺物計測表) 口径7.8~8.9cm、器高1.0cm、底径5.8~6.5cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿b(1) 約1/4弱が遺存する資料。口径6.6cm、器高1.6cm、底径4.2cmに復原される。底部は糸切り難し。

### 233SE025暗灰褐色土出土遺物(第34図)

#### 土師器

坏a(遺物計測表) 口径11.4cm、器高2.2~2.5cm、底径7.0cmを計測する。底部は糸切り難し。

小皿a(遺物計測表) 口径8.4cm、器高1.1cm、底径6.4cmを計測する。底部は糸切り難し。

小皿b(遺物計測表) 口径6.6~7.0cm、器高1.4~1.5cm、底径4.0~5.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

#### 須恵質土器

鉢(2) 口縁部から体部上半の破片資料。現存高4.0cmを計測する。器面調整は回転ナデであり、口縁端部を内側へ屈折させる。胎土はやや粗く、焼成は堅緻で青灰色を呈する。口縁端部外面は黒灰色に発色する。東播系であり、第Ⅲ期1段階に属する。

#### 青白磁

合子蓋(3) 現存高1.3cmを計測する。胎土は酸化焙焼成気味で淡褐色に発色し、釉には焼成不良のため白濁がみられる。

碗(4) 口縁部から体部の破片であり、現存高3.0cmを計測する。外面にはヘラ状工具による遊弁文、内面にはクシ状工具による縦沈線が施され、口縁端部に輪花とみられるキザミが1ヵ所遺存する。胎土は灰白色を呈し堅緻。光沢質で薄青緑色に発色する釉は内外面に施され、細密な貫入を生ずる。

#### 中国陶器

鉢(5) 口縁部の破片資料。現存高4.4cmを計測する。内面には1単位7本以上の櫛目が施される。胎土は白色細粒子を含有し、灰赤茶色を呈する。暗褐色に発色する釉は口縁端部内側から外面にかけて施される。Ⅱ-1a類。

#### 土製品

円盤状加工土器片(6) 暗褐色を呈する土師器片を転用、研磨し円盤状に成形した資料であり、直径2.4cm、厚さ1.0cmを計測する。

輪羽口(7) 先端部の破片資料であり、黒灰色、黄白色を呈する残滓が送風口に付着する。胎土は外面が灰白色、内面は淡褐色に発色する。現存長6.9cm、送風口径8.0cm、外径10.8cmに復原される。

#### 金属製品

銭貨(第50図1) 開元通寶(唐、621年初鑄)。量法は「銭貨計測表」に掲載した。

釘(8) 鉄素材を鍛造により成形する。両端部が欠損し、現存長5.3cm、重量3.7gを計測する。

### 233SE025褐色土出土遺物(第34図)

#### 土師器

小皿a(遺物計測表) 口径8.0cm、器高0.8~1.0cm、底径6.0~6.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

#### 瓦質土器

火鉢(9) 口縁部の破片であり、現存高3.5cmを計測する。摩耗のため外面の器面調整は不明瞭であるが、外面から縦方向の押圧を加えている。内面には疎らなミガキが施される。BⅢ類。

### 233SE035黒褐色土出土遺物(第35図)

#### 土師器

坏a(遺物計測表) 口径11.0~13.6cm、器高2.3~2.8cm、底径5.8~8.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿a(遺物計測表) 口径8.2~11.0cm、器高0.8~1.2cm、底径6.4~9.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

#### 須恵質土器

鉢(1) 現存高4.3cmを計測する口縁部破片。外面回転ナデ、内面不定方向のナデが施される。胎土は堅緻で、外面は灰褐色を呈するが、内面は酸化焙焼成のため赤褐色に発色する。東播系であり、第Ⅱ期2段階に属する。

#### 白磁

皿(2) 器高2.2cmを計測する。全面施釉後に底部の軸を削り取る。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は半光沢質。Ⅶ-1'類。

#### 青白磁

合子蓋(3) 約1/4遺存し、径7.0cm、器高1.7cmに復原される。型成形により上面に鶴の意匠、側面に花文を打ち出す。胎土は精良で灰白色を呈し、明緑灰色に発色する。

合子身(4) 小片で現存高1.7cmを計測する。焼成不良で、胎土は灰白色を呈し、釉は明緑灰色に発色する。

#### 土製品

円柱状土製品(5) 径3.5cm、器高4.0cmを計測する。表面はナデ調整されるが、下端面は特に平滑に仕上げられる。胎土は粗く白色・黒色粒子・礫を多量に含む。焼成は良好で淡黄色に発色する。製品に付属する歇脚と推定される。

土錘(6) 一端を欠損し、現存長2.4cm、最大径0.9cm、孔径0.35cm、重量2.5gを計測する。胎土はやや粗く白色粒子を少量含む。焼成は良好で褐色から赤褐色に発色する。

### 233SE035黒灰色土出土遺物(第35図)

#### 土師器

鍋(7) 口縁部から体部上半の破片で、現存高は2.7cmを測る。内湾する体部外面には跗を貼付しナ

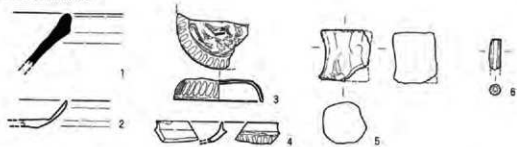


テ調整される。胎土は白色粒子小瘻を含み、焼成は良好で灰褐色から灰黄色を呈する。外面には煤が付着する。CⅢb類。

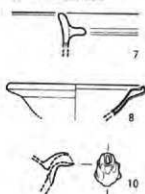
**青磁**

坏(8) 口縁から体部上半の破片で、口径11.0cmに復原され、現存高2.5cmを計測する。龍泉窯系青磁Ⅲ-3類。

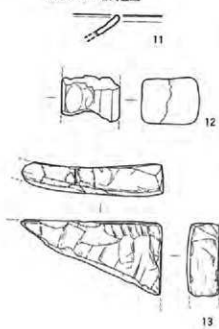
**233SE035黒褐色土**



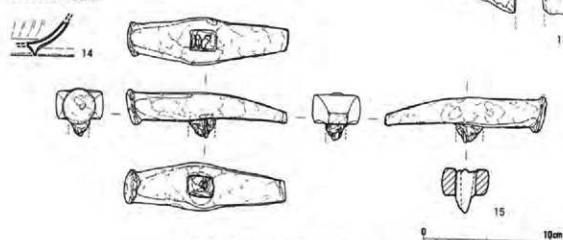
**233SE035黒灰色土**



**233SE035暗褐色土**



**233SE035黄褐色土**



第35図 233SE035遺物実測図 (1/3)

皿(9) 口縁から底部の破片で、口径10.8cm、器高2.1cm、底径5.0cmに復原される。底部に墨跡が観察できる。阿安窯系青磁1-2b類。

**青白磁**

水注(10) 注ぎ口の破片で、現存高2.6cmを計測する。胎土は堅緻で黒色細粒子を含む。焼成は良好。光沢質の軸は外面に施され、薄い青白色に発色する。

**233SE035暗褐色出土遺物 (第35図)**

**土師器**

坏a (遺物計測表) 口径12.4cm、現存高2.4-2.6cm、底径7.8-8.4cmを計測する。いずれも底部は余切り離し。

小皿a (遺物計測表) 口径7.6-9.0cm、器高0.8-1.4cm、底径5.8-7.8cmを計測する。いずれも底部は余切り離し。

**中国陶器**

皿(11) 口縁部から体部の破片で、現存高1.7cmを測る。胎土は緻密で薄い赤褐色を呈し、暗褐色に発色する軸は内外面に施される。胎土特徴と軸調からB群と考えられる。

**土製品**

柱状土製品(12) 幅3.8×4.6cm、現存長3.6cmを測る。器面は瓦質焼成で暗灰色を呈する。

**金属製品**

銭貨(第50図2) 皇宋通寶(北宋、1038年初鑄)。量法は「銭貨計測表」に掲載した。

**石製品**

滑石製用途不明品(13) 石調を転用したものとみられ、口縁部破片の破断面を平滑に研磨する。現存規模5.8×11.2cm、厚さ2.5cm、重量190gを計測する。表面には煤が付着する。

**233SE035黄褐色出土遺物 (第35図)**

**土師器**

坏a (遺物計測表) 口径12.4-12.8cm、器高2.4-2.6cm、底径7.2-8.6cmを計測する。いずれも底部は余切り離し。

小皿a (遺物計測表) 口径9.0cm、器高0.9-1.0cm、底径6.8-7.2cmを計測する。いずれも底部は余切り離し。

**青磁**

坏(14) 体部下位から高台にかけての破片で、現存高2.8cmを計測する。龍泉窯系青磁Ⅲ-3b類。

**金属製品**

金鎖(15) 金鎖の頭であり、鉄素材を鍛造によって片尖りの形態に成形する。全長は12.9cm、最大幅3.8cmを計測し、重量は400gを量る。主要敲打面は径2.8cmを測る円形を呈し、片面は1.5×0.9cmを測る長方形を呈す。両面とも使用によってめくれているが、特に円形敲打面は著しく、打面が鉛直方向に対して傾いている。上面観は舟形を呈し、重心位置に2.0cm角の方孔を設ける。方孔内には柄の木質が遺存し、鉄素材の楔が2個打ち込まれる。

233SE045黒灰色土出土遺物

土師器

小皿 a (遺物計測表) 口径8.8~9.0cm、器高0.9~1.0cm、底径5.8~6.6cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

233SE045黄灰色砂出土遺物 (第36図)

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径12.4~13.1cm、器高2.9cm、底径8.0~9.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.2~8.7cm、器高1.1~1.4cm、底径6.8~7.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

金属製品

用途不明金具 (1) コの字状に遺存する銅素材の鋳造品であり、断面形は半円形を呈する。縦2.6cm、現存高0.6cmを計測し、重量は2.4gを量る。

233SE045暗褐色土出土遺物 (第36図)

土師器

小皿 a (遺物計測表) 口径9.0~9.6cm、器高1.3~1.8cm、底径6.6~6.8cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

青白磁

合子身 (2) 口縁から底部まで残存する資料。口径8.2cm、器高1.9cm、底径8.2cmに復原される。胎土は堅緻。薄い青灰色から青白色に発色する軸は光沢質であるが、失透気味で貫入が入る。

中国陶器

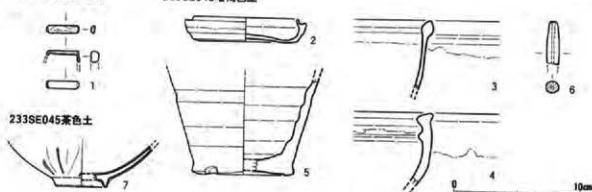
盤 (3) 口縁部から体部にかけての破片で、現存高は5.5cmを測る。口縁部はぶい玉縁状。胎土はやや粘質で黄褐色を呈する。灰黄褐色に発色する軸を口縁部内外面に施す。I-2<sup>a</sup>類。

鉢 (4) 口縁部から体部にかけての破片で、現存高5.5cmを計測する。胎土は粗く暗赤褐色を呈し、薄い緑黄色に発色する軸を口縁部内外面に施す。I-2<sup>b</sup>類。

耳壺×壺 (5) 体部下半から底部にかけて遺存する。現存高7.8cm、底径8.0cmを計測する。体部外側から底部にかけては回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ、底部脇には指痕復が観察される。胎土特徴と

233SE045黄灰色砂

233SE045暗褐色土



第36図 233SE045遺物実測図 (1/3)

輪調からB群と判断される。

土製品

土鉢 (6) 一端を欠損し、現存長3.4cm、最大径1.0cm、孔径0.2cm、重量3.5gを計測する。胎土は緻密で黒色細粒子、白雲母、小礫を含む。焼成は良好で薄い黄褐色に発色する。

233SE045暗褐色土出土遺物

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径15.6cm、器高2.3cm、底径10.6cmを計測する。底部は糸切り離し。

233SE045茶色土出土遺物 (第36図)

青磁

椀 (7) 体部から高台が遺存し、現存高3.4cmを計測し、高台径4.0cmに復原される。外面に麻漣井文が観察される。龍泉窯系青磁Ⅲ-2類。

233SE050暗褐色土出土遺物 (第37図)

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径13.4cm、器高2.4cm、底径9.0cmを計測する。底部は糸切り離し。

瓦質土器

鉢 (1) 口縁部から体部上半の破片で片口が遺存する。現存高7.9cmを計測する。器面は指頭調整後ハケ目、横ナデで片口を作出する。焼成は良好で灰白色を呈する。AⅡ類。

金属製品

釘 (2) 鉄素材を鍛造により成形。頭部と先端部を欠損し、現存長6.6cm、重量4.3gを計測する。

233SE050褐色土出土遺物 (第37図)

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径12.6cm、器高2.9cm、底径8.0cmを計測する。底部は糸切り離し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.4cm、器高1.5cm、底径4.8cmを計測する。底部は糸切り離し。

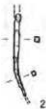
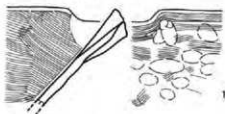
瓦質土器

鉢 (3) 口縁部から体部上半の破片で、現存高3.3cmを計測する。口縁部横ナデ、体部はハケ目調整。AⅡc類。

石製品

すり臼 (4) 茶臼下臼と考えられ、灰色を呈する砂岩系素材を成形する。白面から側面にかけて一部欠けているがほぼ完形。円筒形白面の外側に同心円に受皿が巡り底部が高台状となる形状を呈し、外面は丁寧研磨仕上げされて滑らかであるが、底面は粗仕上げで凹凸が目立つ。平坦な白面には断面U字状の目が外周まで刻まれ、8分画10溝を基本とするが、1区画のみ9溝になっており変則的である。中心付近に同心円状の擦痕が残る。中心部を貫通する軸孔は、白面から3.6cm下位で段差を持ち、底面側軸孔は白面側より小径化、且つ偏芯する。軸孔段差上には黒色を呈すタル状物質が附着する。また白面から約3.8cm下位の外面には細密な条線が1条巡り、その空隙にも軸孔段差に付着するものと同質の黒色タル物質が観察される。この条線を境にして上下で石材構成物の粒度に差違がみられ、白面から側面上位にかけて生じるひび割れが条線部で断絶している。このような現象から本資料は、軸孔

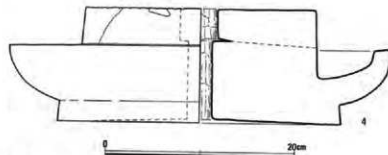
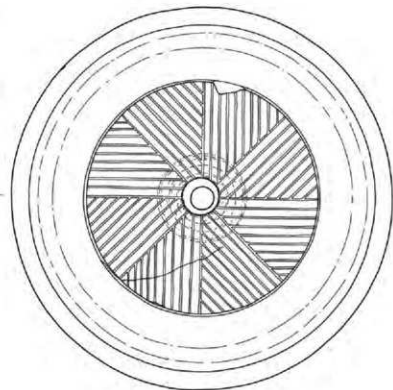
233SE050暗褐色土



233SE050褐色砂



(1-3 → 2, 4-1)



第37図 233SE050遺物実測図 (1/3・1/4)

段差と側面条線を結ぶラインで上下に分かれる可能性があり、個別に粗加工された部材を製作の過程で合体したか、あるいは使用時に破断したため補修を施したものと考えられ、付着する黒色タール状物質は接着剤と推定される。白面径24.5cm、受皿径40.2cm、底径30.1cm、軸孔径は白面側3.9cm、底面側2.5cm、高さ12.0cmを計測し、重量は20.1kgを量る。表面には欠損面も含め茶色を呈す酸化被膜が付着する。

233SE050黄褐色土出土遺物

土師器

小皿 a (遺物計測表) 口径8.0cm、器高0.8cm、底径6.0cmを計測する。底部は糸切り難し。

233SE060暗褐色土出土遺物 (第38図)

土師器

小皿 a (遺物計測表) 口径9.8cm、器高0.9cm、底径7.8cmを計測する。底部は糸切り難し。

瓦器

椀 c (1) 体部下半から高台にかけての破片で、現存高2.3cmを計測する。体部外面には指頭調整痕が残る。内面調整は摩擦著しく不明瞭。焼成は良好で暗灰色から明灰色を呈する。

瓦質土器

鉢 (2) 口縁部から体部上半の破片で、現存高3.8cmを計測する。口縁部は横ナデ、外面口縁部直下にはナデと指頭調整が施される。体部内面にはケズリ調整が施される。焼成は良好で灰白色から暗灰黒色を呈する。未分類資料。

中国陶器

鉢 (3) 口縁部から体部上半の破片。現存高6.2cmを測る。胎土は白色粒子をやや多く含み、暗赤褐色に発色する。I-1 b類。

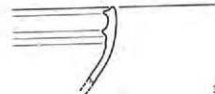
土製品

焼土塊 (4) 規模は4.2×4.0×3.3cmを計測する。壁面と推定される、赤褐色に発色する平坦面が1面観察される。胎土中にはスサの痕跡を多量に包含する。焼成はやや軟質で暗黄褐色に発色する。

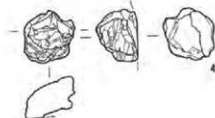
233SE060暗褐色土



233SE060暗褐色土



233SE080灰褐色土



第38図 233SE060・080遺物実測図 (1/3)

233SE080暗褐色土出土遺物

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径12.0~13.6cm、器高2.5~2.7cm、底径8.0~9.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.6~9.0cm、器高0.8~1.3cm、底径6.6~7.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

233SE080灰褐色土出土遺物 (第38図)

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径14.2cm、器高2.6cm、底径9.8cmを計測する。底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.4~8.6cm、器高0.9~1.1cm、底径5.2~6.6cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

須恵質土器

鉢 (1) 口縁部から体部に破片で、現存高7.9cmを測る。器面は回転ナデで仕上げられる。胎土は堅緻で黒色微粒子を含む。焼成は良好で灰青色に発色する。篠淵系。

3) 掘立柱建物出土遺物

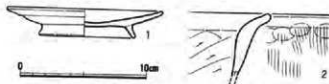
233SB140暗褐色土出土遺物 (第39図)

土師器

皿 c (1) 柱穴cから出土。口縁部から高台が遺存する。口径12.3cm、器高2.2cmを計測し、高台径7.6cmに復原される。

甕 a × 鉢 (2) 柱穴bから出土。口縁部から体部上半の破片で、現存高5.0cmを計測する。口縁部内外面を横ナデ、体部外面にハケ目を施し、口縁部直下に指頭調整が残り。体部内面はヘラケズリが施される。外面には煤が付着する。

233SB140暗褐色土



第39図 233SB140遺物実測図 (1/3)

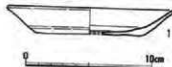
4) 土坑出土遺物

233SK014暗褐色土出土遺物 (第40図)

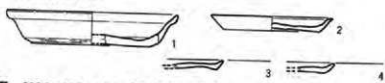
土師器

坏 a (1) 口縁部から底部が遺存し、口径13.2cm、器高2.1cm、底径8.4cmに復原される。底部は糸切り難し後に一部ケズリが施される。

233SK014暗褐色土



233SK037暗褐色土



第40図 233SK014・037遺物実測図 (1/3)

233SK037暗褐色土出土遺物 (第40図)

土師器

坏 a (1) 口縁部から底部が遺存し、口径13.6cm、器高2.6cm、底径9.6cmに復原される。底部は糸切り難しで、体部外面下端に焼成前に生じた擦痕が観察される。

小皿 a (2~4) いずれも底部は糸切り難し。2は片遺存し、口径9.6cm、器高1.2cm、底径7.6cmに復原される。3・4は口縁部から底部まで遺存する小片で、いずれも器高0.8cmを計測する。

233SK055暗褐色土出土遺物

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.8~14.6cm、器高2.4~3.0cm、底径7.0~10.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.0~9.0cm、器高0.8~1.6cm、底径5.8~7.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

233SK055褐色土出土遺物

土師器

小皿 a (遺物計測表) 口径9.0cm、器高1.0cm、底径7.0cmを計測する。底部は糸切り難し。

233SK055褐色土出土遺物 (第41・42)

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.8~14.5cm、器高2.2~3.2cm、底径7.3~11.7cmを計測する。M-032・042の見込みには螺旋状の回転ナデが残る。M-023・027・036の内面には油煙が付着する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.0~9.7cm、器高0.8~1.4cm、底径5.6~8.6cmを計測する。M-059・064・121の見込みには螺旋状の回転ナデが残る。いずれも底部は糸切り難し。

瓦器

鉢 c (1) 口縁部から高台が遺存し、口径14.3cm、器高5.3cm、高台径5.5cmに復原される。内面から外面上半にかけては回転ナデで、内面にてあて痕が観察される。外面体部下位から底部は回転ヘラケズリ、高台周辺は貼付にともなう回転ナデが施され、体部外面下位には指頭調整痕が観察される。胎土は堅緻で、焼成は良好。器面色相は口縁部内側から体部外面上半は黒灰色、以外は明灰色に発色する。

瓦質土器

火鉢 (2) 口縁部から体部上半の破片で、現存高4.5cmを計測する。器面は回転ナデ。口縁部は内側へ肥厚させる。胎土は堅緻。焼成は良好であるがやや酸化焙焼成気味で、器面色相は口縁部から外面は黒灰色、内面は暗褐色に発色する。未分類資料。

白磁

皿 (3・4) いずれもⅡ-1 a類。口縁部から底部が遺存し、3は口径9.8cm、器高1.9cm、底径5.8cmを計測する。口縁部内側には油煙が付着する。4は口径9.6cm、器高1.7cm、底径6.2cmに復原される。

中国陶器

盤 (5) 口縁部から体部上半の破片で、内外面に光沢質の緑釉を施す。現存高は4.2cmを計測する。Ⅱ-2類。

### 瓦製品

瓦玉 (6-19) いずれも瓦片を打削、研磨して成形する。器形は略円柱状を呈するものから、全面が顕著に研磨され半球状を呈するものがある。6・7には瓦凸面の格子目が残り、8・9・16・17には瓦凹面の布目が残る。各法量は、6は径2.3-2.9cm、厚さ2.2cm、重量21.0g、7は径2.55cm、厚さ1.55cm、重量14.8g、8は径3.05-3.1cm、厚さ2.0cm、重量22.6g、9は径2.8-2.9cm、厚さ1.8cm、重量16.6g、10は径3.2-3.6cm、厚さ2.35cm、重量29.6g、11は径2.3-2.7cm、厚さ2.3cm、重量16.6g、12は径2.3-2.5cm、厚さ1.6cm、重量8.6g、13は径2.7-2.75cm、厚さ1.3cm、重量11.2g、14は径2.3-2.5cm、厚さ1.9cm、重量14.6g、15は径2.2-2.5cm、厚さ2.0cm、重量13.2g、16は径2.2-2.3cm、厚さ2.3cm、重量13.4g、17は径2.6-2.8cm、厚さ1.85cm、重量13.8g、18は径2.1-2.3cm、厚さ2.0cm、重量9.7g、19は径2.2-2.6cm、厚さ2.0cm、重量11.0gをそれぞれ計測する。

### 土製品

おはじき (20) 暗褐色を呈する土師器片を研磨し、円盤状に成形する。径1.7-1.85cm、厚さ0.6cmを計測し、重量2.2gを量る。

### 金属製品

銭貨 (第50図3・4) 3は皇宋通寶 (北宋、1038年初鑄)。4は大観通寶 (北宋、1107年初鑄)。それぞれ法量は「銭貨計測表」に掲載した。

釘 (21・22) いずれも鉄素材を鍛造して成形する。21は両端部を欠損し、現存長4.3cm、重量6.7g。22は先端部を欠損し、現存長3.7cm、重量1.2gをそれぞれ計測する。

### 石製品

碁子 (23-80) 黒灰色基調の片岩を素材とする。23-76は扁平な円形状を呈し、径0.8-1.4cm、厚さ0.75cmを計測する。77-78は球状を呈し、径0.9-1.2cmを計測する。79は扁平な方形状を呈し、石材中には灰白色の産晶がみられる。長さ1.2-1.5cm、厚さ0.7cmを計測する。80は扁平な棒状形で、色相は緑灰色を呈する。長さ2.5cm、厚さ0.35cmを計測する。

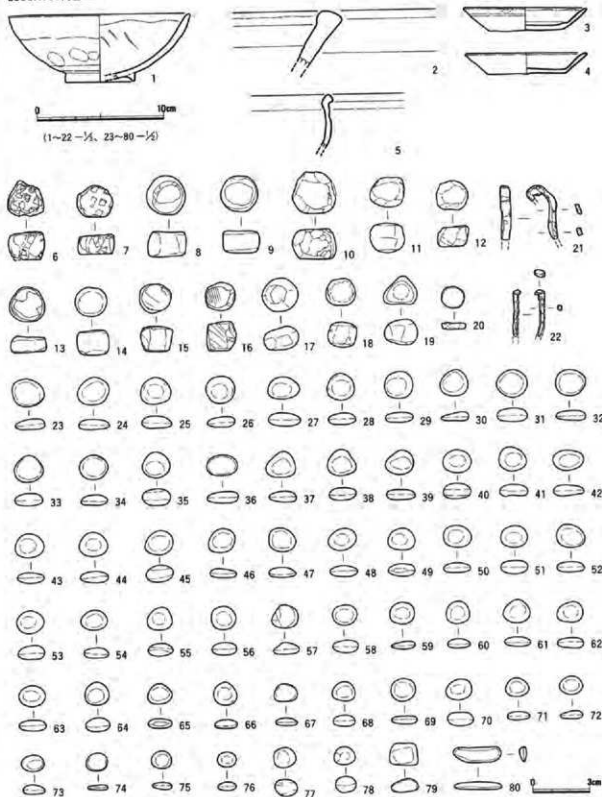
砥石 (81-83) 81は黄白色を呈す細粒砂岩を素材とし、長方形を呈し、一端を欠損する。4面を使用し顕著な擦痕が残る、下端面は自然面あるいは1次成形面と推定される。現存長9.7cm、最大幅3.6cmを計測する。82は黒灰色を呈する粘板岩を素材とし、側面を使用し、顕著な擦痕が観察される。表裏面は剥離する。現存長12.25cm、現存幅7.9cm、最大厚1.7cmを測る。83は灰白色を呈する砂岩を素材とし、円筒形状を呈する。長さ5.3cm、最大厚2.0cmを計測し、重量は24.4gを量る。表面には、研磨による半截円錐状の凹みが側面に多数形成され、下端には自然面が残る。

滑石製用途不明品 (84-86) 84は断面台形を呈し、中央部に半円状の切り込みを入れる。表面には煤が付着する。全長4.3cm、幅1.35cm、厚さ0.9cmを計測し、重量は7.5gを量る。85・86は石鏝を転用したものと思われる。85は石鏝口縁部破片の破断面を平滑に研磨する。現存幅15.7cm、現存高9.55cm、厚さ2.6cmを計測し、重量は540gを量る。86は底部付近の破片に鋸状の工具で切削を加える。現存幅19.55cm、現存高2.3cmを計測し、重量は225gを量る。

### ガラス製品

小玉 (87・88) 鮮やかな青色に発色するガラスを素材とし、巻き上げ技法によって成形する。素材は光沢質で不透明。87は径0.3cm、厚さ0.3cm、孔径0.15cm。88は径0.3cm、厚さ0.2cm、孔径0.2cmをそれぞれ計測する。

### 2338K055褐色土



第41図 2338K055遺物実測図1 (1/2・1/3)

233SK055黄褐色土出土遺物 (第43図)

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.5~13.8cm、器高2.0~3.2cm、底径7.0~9.6cmを計測する。いずれも底部は糸切り彫し。R-027は体部が直立気味に高く立ち上がる器形を有し、口径11.3~11.6cm、器高3.5cm、底径7.6~9.6cmを計測する。底部は糸切り彫し。R-027、M-010・033・044の見込みには螺旋状の回転ナデが残る。M-001の内面には油煙が付着する。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.6~9.6cm、器高0.8~1.5cm、底径5.4~8.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り彫し。M-061・108・112・136・138・155・158・171・208・214の見込みには螺旋状の回転ナデが残る。M-054・061・106・110の内面およびM-239の内外面には油煙が付着し、M-209の内面には粉粒状面が観察される。

土師質土器

鍋 (89) 口縁部から底部外周が遺存する。口径28.0cm、現存高10.7cm、底径22.4cmに復元される。口縁部内外面横ナデ。体部外面は指頭調整ののち、縦位のハケ目と横ナデ調整が施され、体部下端の脣口部にはヘラズリが加わる。体部内面には横位のハケ目ののち、横ナデ調整が施される。口縁部部から外面にかけて藁が付着する。DI a類に属すが、直線的な体部など、より金属製品を意識したものと思われる。

白磁

碗 (90) 口縁部から高台まで遺存する。口径15.0cm、器高6.9cm、高台径5.1cmに復元される。やや青味がかかる釉が高台脇まで施され、高台内には偶発的に釉が付着するIX-2 a類。

皿 (91・92) 口縁から底部まで遺存する。91は口径9.7cm、器高1.6cm、底径6.3cmでIX-1 a類。92は口径11.6cm、器高2.4cm、底径7.2cmでIX-1 b類。

青白磁

小皿 (93) 口縁部から高台まで遺存する。口径6.6cm、器高1.2cm、高台径2.4cmに復元される。型成形であり、内面に花文を打ち出す。胎土は堅緻で黒色微粒子を含み、明灰色を呈するものがあるが、高台部外面は橙黄色に発色する。半光沢質で微細な気泡を生ずる釉は明青灰色に発色し、内面から高台外面まで施される。

中国陶器

盤 (94) 口縁部から体部上半の破片で、現存高4.9cmを計測する。I-2類。

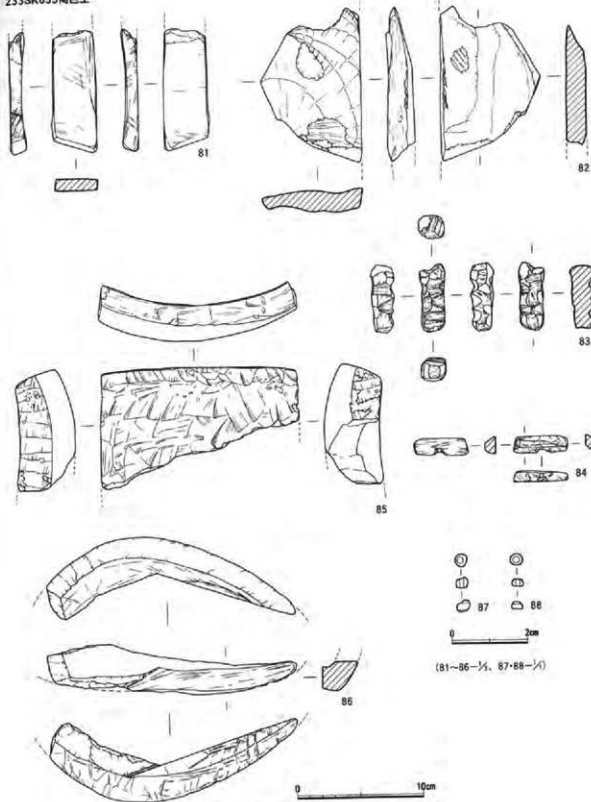
瓦類

瓦玉 (95~99) いずれも瓦片を打割、研磨し成形する。98・99は酸化焙焼成で土師質。他は須恵質である。器形は略円柱状を呈するものから、全面が顕著に研磨され偏球状を呈するものがある。95・97には瓦凹面の布目が微かに残る。各法量は、95は径2.3~2.6cm、厚さ2.2cm、重量14.6g。96は径2.4~2.6cm、厚さ2.0cm、重量14.4g。97は径2.9~3.0cm、厚さ1.8cm、重量17.6g。98は径2.8~3.0、厚さ1.9cm、重量19.8g。99は径2.7~2.9cm、厚さ1.9cm、重量10.2gをそれぞれ計測する。

金属製品

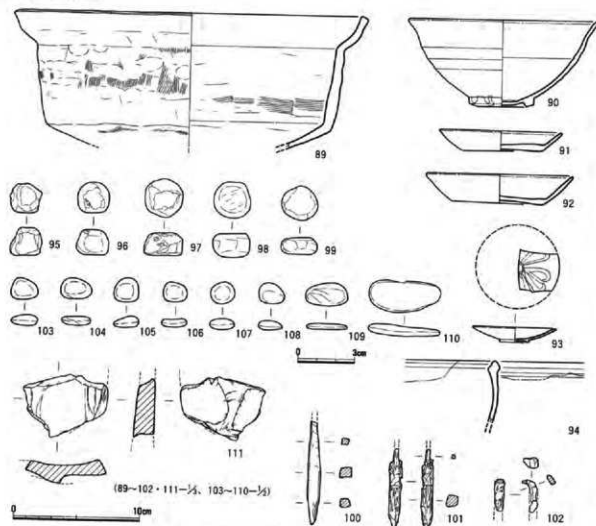
銭貨 (第50図5) 紹定通寶 (南宋、1228年初鋳)。背文は「四」。法量は「銭貨計測表」に掲載した。釘 (100~102) 鉄素材を鍛造により成形。100は基部側を欠損し、中影らみの形態を持つ。現存長8.2cm、重量18.0gを計測する。101も基部側を欠損し、木質部に覆われている。現存長6.3cm、重量4.5gを計測する。102は先端側を欠損し、現存長2.5cm、重量1.0gを計測する。

233SK055褐色土



第42図 233SK055遺物実測図2 (1/1・1/3)

233SK055黄褐色土



第43図 233SK055遺物実測図3 (1/2・1/3)

石製品

葉子 (103~110) 黒灰色基調の片岩を素材とする。103~108は偏平な円形状を呈し、径1.1~1.6cm、厚さ0.5~0.6cmを計測する。109~110は偏平な楕円形を呈し、色相は灰色から灰褐色を呈する。長さ2.2~3.8cm、厚さ0.3~0.6cmを計測する。

砥石 (111) 黒灰色を呈する粘板岩を素材とし、2面が使用され、摩耗する。現存長さ5.0cm、最大幅6.4cm、厚さ1.7cmを計測する。

233SK075暗褐色土出土遺物

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径13.0cm、器高2.6~3.0cm、底径8.0~8.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.8~8.0cm、器高0.9~1.1cm、底径5.6~6.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

233SK075褐色土出土遺物

土師器

小皿 a (遺物計測表) 口径8.2cm、器高1.2cm、底径5.8cmを計測する。底部は糸切り離し。

233SK088暗灰褐色土出土遺物 (第44図)

土師器

坏 a (遺物計測表) 口径12.3~13.9cm、器高2.4~3.4cm、底径8.0~9.3cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

大坏 a (1) 口縁部から底部が遺存し、口径25.0cm、器高3.6cm、底径18.8cmに復原される。口縁部から体部内外面は回転ナデ、内底面は不定方向のナデが施される。底部は糸切り離し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.6~9.0cm、器高1.2~1.4cm、底径6.2~7.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

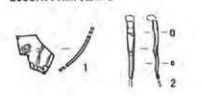
瓦質土器

鉢 (2) 口縁部から体部上半の破片。現存高3.5cmを計測し、内外面にナデが施される。A I類。

233SK088暗灰褐色土



233SK095黒褐色土①



233SK095黒褐色土③



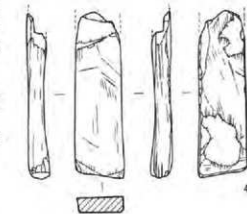
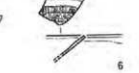
233SK110黒褐色土



233SK095黄灰色土



233SK095黒褐色土②



第44図 233SK088・095・110遺物実測図 (1/3)

### 233SK088暗灰色土出土遺物

#### 土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.8~13.3cm、器高2.6~2.9cm、底径8.4~9.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.2~9.2cm、器高1.1~1.9cm、底径6.8~7.5cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

### 233SK095黒褐色土①出土遺物 (第44図)

#### 土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.0~12.8cm、器高2.1~2.9cm、底径7.2~8.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.8~8.2cm、器高1.2~1.4cm、底径5.8~6.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

#### 青白磁

鉢 (1) 体部の破片で、現存高2.5cmを計測する。内型成形によって草花文を打ち出す。薄い胎土は堅緻で白灰色を呈する。光沢質の軸は内外面に施され、白青灰色に発色する。

#### 金属製品

釘 (2) 鉄素材を鍛造により成形。頸部と先端部を欠損し、現存長4.6cmを計測し、重量は2.2gを量る。

### 233SK095黄灰色土出土遺物 (第44図)

#### 土師器

坏 a (遺物計測表) 口径12.2cm、器高2.5cm、底径8.0cmを計測する。底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.8~8.2cm、器高1.2~1.5cm、底径5.2~6.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

#### 須恵質土器

鉢 (3) 口縁部から体部上半の破片で、現存高3.4cmを計測する。体部内面は酸化焙焼成気味で赤褐色に発色する。東播系であり、第Ⅱ期2段階に属する。

#### 石製品

砥石 (4) 長方形を呈し一端を欠損する。現存長13.2cm、最大幅4.0cm、厚さ1.3cmを計測する。柱状質泥岩と考えられる石材は淡黄褐色を呈する。

### 233SK095黒褐色土②出土遺物 (第44図)

#### 土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.8~12.8cm、器高2.3~3.0cm、底径7.2~8.8cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.4~9.6cm、器高1.0~1.4cm、底径5.6~7.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

#### 須恵質土器

鉢 (5) 口縁部から体部上半の破片で、現存高3.2cmを計測する。焼成は良好とみられ、胎土は還元

化しているがやや軟質。東播系であり、第Ⅱ期2段階に属する。

#### 青白磁

皿 (6) 口縁部から体部上半の破片で、現存高1.6cmを計測する。型成形で内面に文様を打ち出す。胎土は堅緻で黒色微粒子をやや多く含む白灰色に発色する。光沢質の軸は青白色に発色し内外面に施されるが、口縁部は露胎となる。ごく薄い製品である。

### 233SK095黒褐色土③出土遺物 (第44図)

#### 土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.8~14.8cm、器高2.5~3.2cm、底径7.0~10.0cmを計測する。底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.7~8.8cm、器高0.9~1.4cm、底径5.6~7.2cmを計測する。底部糸切り難し。

#### 瓦質土器

鉢 (7) 片口が遺存する口縁部から体部上半の破片。現存高5.3cmを計測する。胎土はやや粗く白色微粒子を多く含む。内外面は横ナア調整。焼成は良好で口縁部外面から体部内面にかけては還元化し黒灰色、体部外面は灰白色を呈する。口縁端部は肉厚とならない形態を有する。

#### 金属製品

銭貨 (第50図6) 皇宋通寶 (北宋、1038年初鑄)。量量は「銭貨計測表」に掲載した。

### 233SK110黒褐色土出土遺物 (第44図)

#### 土師器

坏 a (1) 口縁部から底部が遺存し、口径13.0cm、器高2.3cm、底径8.0cmに復元される。口縁部から体部内外面は回転ナア、内面見込み中央部には螺旋状のナアが施される。内面には斑点状の油じみが付着する。底部は糸切り難し。

坏 a (遺物計測表) 口径12.0~13.0cm、器高2.4~2.9cm、底径7.5~8.5cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.6~8.8cm、器高1.0~1.5cm、底径5.6~6.5cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

#### 白磁

鉢 (2) 口縁部から体部上半が遺存し、口径15.2cmに復元され、現存高3.0cmを計測する。Ⅰ類。

#### 青磁

碗 (3) 体部下半から高台が遺存し、現存高2.5cm、高台径4.5cmを計測する。体部外面に鈎垂弁文が観察される。龍泉窯系青磁Ⅲ-2類。



5) その他の遺構出土遺物

a) たまり状遺構

233SX001暗褐色土出土遺物 (第45図)

中国陶器

盤 (1) 口縁部から底部外周が遺存する小片で、現存高9.0cmを計測する。盤I-2類。

土製品

玉状土製品 (2) 表面に一部剥離がみられるがほぼ完形である。ナデにより球形に成形する。径2.4~2.6cmを計測し、重量は14.2gを量る。

233SX012黒褐色土出土遺物 (第45図)

土師器

杯 a (1・2) 1は口径14.5cm、器高2.8cm、底径10.3cm。2は口径14.6cm、器高2.7cm、底径11.1cmをそれぞれ計測する。いずれも底部は糸切り離し。1の内面見込みには螺旋状の条線を伴う回転ナデが施される。

杯 a (遺物計測表) 口径12.2~14.4cm、器高2.2~3.2cm、底径6.8~10.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

杯×碗 (3) 体部下端から底部の破片で、現存高1.5cmを計測する。底径は3.1cmに復原される。体部内外面は回転ナデ、底部は中実の円盤高台状に仕上げる。底部は回転糸切り離し。焼成は良好で薄い茶灰色を呈する。搬入品か。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.6~9.0cm、器高0.9~1.4cm、底径5.6~7.0cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

土師質土器

鍋 (4) 口縁部から体部上半の破片で、現存高5.4cmを計測する。直立する体部の外面に髹を貼付する。口縁部から鈎下端までナデ調整が施され、以下は縦位のハケ目が施される。内面は横位から斜位のハケ目調整のち、指頭調整が施される。胎土は白色粒子・小礫を多く含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。外面鈎部以下に煤が付着する。CI b類。

火鉢 (5) 口縁部から体部上半および底部が遺存し、口径20.0cm、器高20.5cm、底径14.0cmに復原される。器形は口径・底径比の小さい逆台形状を呈し、ナデ調整で成形される。口縁内側には逆L字状に突帯を巡らす。口縁より約3.7cm下位の体部内面には断面矩形的棒状粘土を貼り付けて棧としており、遺存部位と器面剥離痕のあり方から、3本が平行して貼付されていたものと推定される。体部中位には窓と考えられる切り欠きが観察される。胎土は粗く白色礫を多量に含んでおり、焼成は良好で外面は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。

白磁

壺×水注 (6~8) いずれも壺あるいは水注Ⅲ類系の耳。現存高は1.9~2.0cmを計測する。胎土は堅緻で、灰色を呈し光沢質の釉は暗緑灰色から緑青色に発色する。

合子蓋 (9) 小片で、現存高1.9cmを計測する。酸化焙焼のため、胎土は淡褐色を呈し軟質。外面に施された釉は黄褐色に発色する。

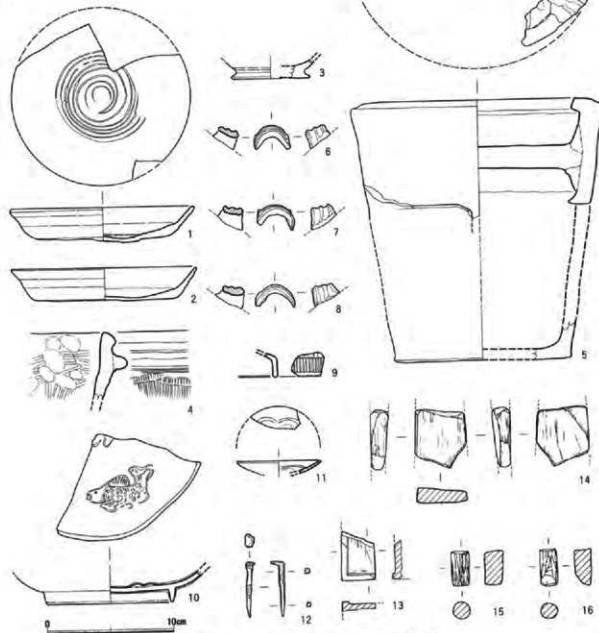
青磁

盤 (10) 体部下端から高台が遺存し、現存高2.5cmを計測し、高台径10.0cmに復原される。見込みには双鱼文が貼付される。龍泉窯系青磁Ⅲ類系。

233SX001暗褐色土



233SX012黒褐色土



第45図 233SX001・012遺物実測図 (1/3)

### 青白磁

皿 (11) 口縁部から体部下半が遺存し、口径6.6cmに復原され、現存高1.0cmを計測する。内型により花文と推定される文様を打ち出す。胎土は堅緻で白灰色を呈し、光沢質で青白色を呈する釉は内外面に薄く施され、微細な発泡が生じる。

### 金属製品

釘 (12) 鉄素材を鍛造で成形する。先端部が欠損し、現存長4.4cmを計測し、重量は2.2gを量る。

### 石製品

硯 (13) 暗赤褐色を呈する粘板岩を素材として、切削により成形。表面は層状に剥離する。現存長3.9cm、現存幅2.6cm、最大厚は0.8cmを計測する。遺存部位から方形硯と類推される。

砥石 (14) 褐色を呈する細粒砂岩を素材とし、4面を使用する。現存長4.8cm、現存幅4.2cm、厚さ1.5cmを計測する。

円柱状滑石製品 (15・16) いずれも滑石を切削により円柱状に成形する。15は径1.4cm、高さ2.7cmを計測し、重量は10.6gを量る。16は径1.3cm、高さ2.9cmを計測し、重量は8.7gを量る。上面から側面上位に黒色を呈すタール状付着物が観察される。

### 233SX036黒灰黄色土出土遺物 (第46図)

#### 土師器

坏 a (1・2) いずれも口縁部から底部が遺存する。1は口径15.6cm、器高3.2cm、底径10.6cmを計測する。内面見込みには一定方向のナデが施されるが、一部螺旋状ナデが残る。2は口径12.2cm、器高3.2cm、底径8.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り摩し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.0cm、器高0.9~1.2cm、底径6.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り摩し。

### 233SX036黒褐色土出土遺物 (第46・47図)

#### 土師器

坏 a (遺物計測表) 口径12.0~16.2cm、器高2.2~3.4cm、底径7.6~10.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り摩し。

小皿 a (遺物計測表) 口径7.4~9.6cm、器高0.8~1.5cm、底径5.4~8.4cmを計測する。いずれも底部は糸切り摩し。

小皿 b (遺物計測表) 口径6.6cm、器高1.7cm、底径5.0cmを計測する。底部は糸切り摩し。

#### 土師質土器

鉢 (3) 口縁部から体部上半の小片で、現存高6.9cmを計測する。口縁部横ナデ、体部外面は縦位のハケ目で、指頭調整痕が残る。体部内面は横位のハケ目調整が施される。胎土は白色礫を多く含む。

#### 須恵質土器

鉢 (4~6) いずれも口縁部から体部上半の破片。4・5は東播系第Ⅲ期1段階の製品と考えられ、4は現存高6.3cmを計測し、体部内面に磨耗がみられる。5は現存高3.7cmを計測する。6は現存高6.3cmを計測し、口縁部外面から体部内面上位を回転ナデ。体部外面外は指頭調整のち、弱い回転ナデ。体部内面下位は斜位のナデのち、擋り目であろうか3条の浅い沈線が斜位に施される。胎土は堅緻で白色粒子を少量含む、焼成は良好で灰色に発色する。産地不明。

甕 (7) 体部下半から底部の破片で、現存高5.4cmを計測する。体部外面は回転ナデ、内面はナデ調

整が施される。胎土は堅緻で白色粒子を多く含む、焼成不良で淡黄褐色に発色する。

#### 瓦質土器

火鉢 (8) 口縁部から体部上半の破片で、現存高5.5cmを測る。口縁部上面横ナデ、体部外面ナデ、内面はケズリ調整が施される。B I a類。

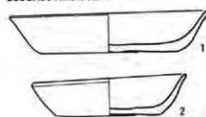
#### 白磁

皿 (9・10) 9は口径9.4cm、器高2.6cm、底径6.2cmに復原される。IX-1 b類。10は口径9.8cm、器高1.7cm、底径5.8cmに復原される。IX-1 a類。

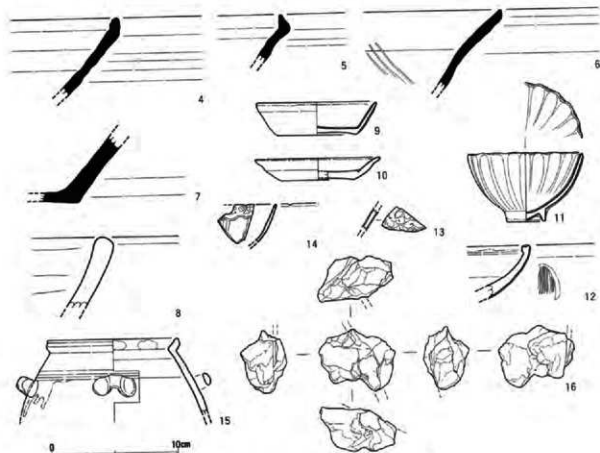
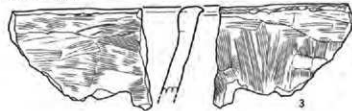
#### 青磁

小碗 (11) 口縁部から高台が遺存し、口径9.2cm、器高5.4cm、高台径3.2cmを計測する。口縁部から体部を襲状に捻り、上面観が花弁状の意匠とする。胎土は堅緻で灰白色を呈し、明緑灰色に発色する釉

233SX036黒灰黄色土



233SX036黒褐色土



第46図 233SX036遺物実測図1 (1/3)

を内外面に厚く施したのち、高台周辺の軸を抜き取る。露胎部は淡褐色に発色する。胎土、軸調は龍泉系青磁Ⅲ類の特徴を有する。未分類。

香炉 (12) 口縁部から体部の破片。現存高4.2cmを計測する。体部外面には片形蓮弁文を刻み、蓮弁内に縦の筋目を施す。内面は回転ヘラケズリ。黒色微粒子を少量含む胎土は堅緻で灰色を呈し、微細な空隙を生じる。緑灰色に発色する軸は口縁内面から外面にかけて厚く施される。内面露胎部には煤が付着する。胎土、軸調は龍泉系青磁Ⅲ類の特徴を有する。未分類。

壺×碗 (13) 体部と推定される小片で、現存高1.6cmを計測する。胎土は堅緻で黒色微粒子を含み、灰色を呈する。外面には宝相華唐草文が白色土で背地象嵌される。半光沢質で緑灰色に発色する軸は内外面に施され、細貫入を生じる。象嵌高麗青磁。

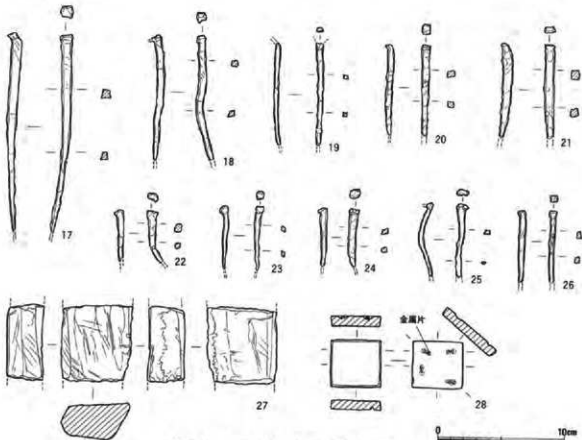
#### 青白磁

碗 (14) 口縁部から体部が遺存する小片で、現存高3.0cmを計測する。型成形で口縁端部に輪花を刻み、内面上位に4弁からなる花文、その下位に如意頭と推定される文様が打ち出される。胎土は堅緻で黒色微粒子を少量含み、乳白色を呈する。青白色に発色する軸は内外面に薄く施され、外面にはピンホール状の微小な軸切れが生じる。

#### 中国陶器

耳壺 (15) 口縁部から体部上半が遺存し、口径10.2cmに復原され、現存高6.1cmを計測する。横形の耳が1ヵ所遺存し、外面上位には沈線が2条施される。胎土は堅緻で黒色および白色微粒子を含み、灰

233SX036黒褐色土



第47図 233SX036遺物実測図2 (1/3)

色に呈し、軸は灰白色に発色する。口縁部内傾面に目跡が2ヵ所残る。Ⅵ類。

#### 土製品

焼土塊 (16) 規模は5.9×5.0×3.7cmを計測する。芯材の痕跡と推定される器面の滑らかな部位が1ヵ所観察される。胎土は軟質で角閃石とスズイを含み、黒灰色から灰色を呈する。

#### 金属製品

銭貨 (第50図7) 元豊通寶 (北宋、1078年初鑄)。法量は「銭貨計測表」に掲載した。

釘 (17-26) いずれも鉄素材を鍛造して成形。いずれも先端部を欠損する。各法量は、17は現存長15.8cm、重量31.4g。18は現存長10.0cm、重量11.2g。19は現存長8.1cm、重量1.9g。20は現存長7.2cm、重量8.0g。21は現存長7.5cm、重量14.2g。22は現存長4.1cm、重量3.5g。23は現存長5.1cm、重量3.2g。24は現存長4.7cm、重量4.0g。25は現存長5.8cm、重量3.5g。26は現存長5.7cm、重量5.6gをそれぞれ計測する。

#### 石製品

砥石 (27) 暗灰色を呈する硬砂岩を素材とし、3面を使用する。表面には糸線状の太い擦痕が顕著に残る。

石鈿 (28) 磁方。閃緑岩を素材とする。色相は白色基調で黒灰色の斑晶がみられる。表面には2個1対の被着孔がランダムに4ヵ所穿たれ、うち1つの孔内には留め金具と推定される緑青を生じた管状の金属片が観察される。縦3.7cm、横3.9cm、厚さは0.7cmを計測する。

#### 233SX090黒褐色土出土遺物 (第48図)

##### 土師器

坏 a (遺物計測表) 口径11.8-12.4cm、器高2.4-2.7cm、底径8.0-8.8cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

小皿 a (遺物計測表) 口径8.2-8.6cm、器高1.0-1.3cm、底径6.0-7.2cmを計測する。いずれも底部は糸切り離し。

##### 白磁

皿 (1) 体部下半から底部が遺存し、現存高3.0cmを計測し、底径6.0cmに復原される。外面体部下半から底部にかけては施軸されない。Ⅸ-2類。

##### 青磁

碗 (2) 口縁部から体部が遺存し、口径13.0cmに復原され、現存高は4.2cmを計測する。外面に蓮蓬弁文が施される。龍泉系青磁Ⅲ-2類。

#### 233SX126暗褐色土出土遺物 (第48図)

##### 土師器

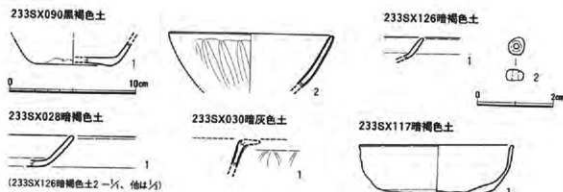
小皿 a (遺物計測表) 口径8.6cm、器高1.1cm、底径6.6cmを計測する。底部は糸切り離し。

##### 青磁

皿 (1) 口縁部から体部の小片で、現存高1.7cmを計測する。酸化焙焼成気味で胎土は暗褐色を呈する。同安系青磁Ⅰ類。

##### ガラス製品

小玉 (2) 鮮やかな青色に発色するガラスを素材とし、巻き上げ技法によって成形する。ガラスは光沢質で不透明。径0.45cm、厚さ0.3cm、孔径0.1cmを計測する。



第48図 233SX028・030・090・117・126遺物実測図 (1/1・1/3)

b) 小 穴

233SX028暗褐色土出土遺物 (第48図)

土師器

坏 a (1) 口縁部から底部外周が遺存し、現存高2.5cmを計測する。底部は糸切り難し。

233SX030暗灰色土出土遺物 (第48図)

青磁

坏 (1) 体部が遺存し、現存高2.3cmを計測する。体部外面には鋸歯弁文が施される。龍泉窯系青磁Ⅲ-4類。

233SX093黒褐色土出土遺物

土師器

小皿 a (遺物計測表) 口径7.0~8.6cm、器高1.1~1.3cm、底径5.0~6.6cmを計測する。いずれも底部は糸切り難し。

c) 不明遺構

233SX117暗褐色土出土遺物 (第48図)

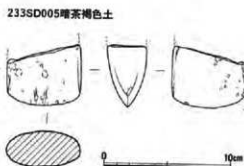
土師器

丸鉢 a (1) 口縁部から底部が遺存し、口径12.2cm、器高4.1cm、底径8.9cmを計測する。底部はヘラ切り難し。

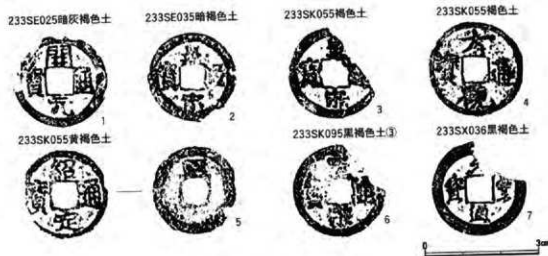
6) その他の遺物 (第49図)

石製品

石斧 (1) 灰白色を呈する黒色粒子を含む玄武岩製の磨製石斧であり、基部側が欠損する。表面は風化し粉味を帯びる。玄武岩製であることから弥生時代の所産と考えられるが、断面が扁平で薄い傾向にあることから、縄文系の可能性も考えられる。幅5.9cm、現存長4.8cm、最大厚3.2cmを測る。233SD005暗茶褐色土から出土。



第49図 その他の遺物 (1/3)



第50図 出土銭貨拓影図 (1/1)

銭貨計測表

径・厚さの単位: cm 重量: g

番号	遺跡名	銭名	天地外径	天地内径	左右外径	左右内径	厚さ	重量	備考
1	233SE025暗灰褐色土	開元通寶	2.3+ $\alpha$	2.0	2.4+ $\alpha$	2.0	0.09~0.11	1.9	
2	233SE035暗褐色土	皇宋通寶	2.3	1.9	2.3+ $\alpha$	1.8	0.09	2.0	
3	233SK055褐色土	皇宋通寶	2.4	2.0	1.9+ $\alpha$	1.4+ $\alpha$	0.11~0.13	1.4	
4	233SK055褐色土	大観通寶	2.45	2.2	2.45	2.2	0.14~0.17	3.0	
5	233SK055黄褐色土	紹定通寶	2.3	2.0	2.2+ $\alpha$	2.0	0.08~0.12	2.0	背文「四」
6	233SK055黄褐色土①	皇宋通寶	2.4	2.0	2.4	2.0	0.11~0.13	1.4	
7	233SK036黒褐色土	元豊通寶	2.4	1.8	2.4	1.8	0.11	2.8	

## Ⅷ 小 結

今回の大宰府条坊跡第233次調査により、五条地区に新たな調査事例を追加することができたことは大きな成果であった。調査では、2面の遺構面と整地層が確認され、第Ⅰ面からは溝7条、掘立柱建物1棟、櫓列1列、井戸12基、土坑19基、たまり状遺構、小穴群などが検出された。また、第Ⅱ面からは溝3条、掘立柱建物2棟、櫓列1列、土坑3基、たまり状遺構、小穴群などが発見された。

以下、第Ⅰ面および第Ⅱ面から検出された主な遺構を取り上げ、現時点で考えられる幾つかの点を整理しておきたい。

はじめに、調査区内の全体的な様相について述べることにする。調査区内では、表土(盛土・耕作土)直下の様相が場所によって異なることが確認された。調査区の中央から南側では、褐色土で形成された整地層が存在するが、北側と南西側では地山が露出し、整地層が削平された可能性が考えられる。調査では便宜的に第Ⅰ面・第Ⅱ面として調査を実施しているが、第Ⅰ面の北側から検出された井戸(233SE010・011・020)と第Ⅱ面から検出された掘立柱建物(233SB140)は、いずれも11世紀前後(大宰府X期)から12世紀中頃の間に形成されていたと考えられ、第Ⅰ面の北側地山層と第Ⅱ面は同一面の可能性が高いと判断される。また、褐色土整地層には律令的な食器類を示す遺物なども看取されたが、底部処理に糸切り織技法を用いた土師器の供具類が含まれていたことから整地層形成時の定点的な定説。さらに整地層を切り込む最も古い遺構が12世紀中頃の溝(233SD077)であることから、整地層形成の下限は12世紀中頃と推測される。

つぎに主だった遺構について、南北溝より見ていきたい。南北溝(233SD005)は幅1.8~3.5mを測り、検出位置・遺構形状・覆土の堆積状況などから推測して、昭和49年度に九州歴史資料館によって調査が実施された大宰府史跡第33次補足調査時発見の溝(SD600)と同一と判断された。最終的な埋没時期は、13世紀中頃~14世紀前半(大宰府XVII~XX期)と推測される。この南北溝と直交する形で検出された東西溝(233SD070)は、埋没時期が11世紀後半から12世紀前半(大宰府XII~XIII期)と考えられ、両者の間に時間差が存在するものの、その方向性や規模ならびに配置状況から、平安時代後期から中世にかけての当地区における土地区割りの一つの基準線になっていたものと考えられる。方位については、南北溝(233SD005)はN-6°-Eを測り、東西溝(233SD018・040・070・105・120)はN-77~87°-Wとやや数値にばらつきがあるものの、平均ではN-81°-Wを指針し、南北溝と東西溝はほぼ直交関係にあるといえよう。

井戸は、12基のうち井戸枠が残存していたものが8基を数え、石組は3基(233SE003・233SE011・015)、木枠組は5基(233SE020・025・035・045・050)となる。石組の233SE011は11世紀前後(大宰府X期)、同様に233SE015は13世紀前後から前半(大宰府XVI~XVII期)の埋没と考えられる。また、233SE015では、周囲を取り囲むように小穴9穴(233SX028)が検出され、上屋施設を構成した柱穴群と推測した。なお、233SE003は大半が調査区外にかかることから不明瞭であるが、遺存状況より判断して石組井戸として取り扱った。一方、木枠組の井戸は、方形木枠組が1基(233SE020)、円筒形結物組が4基(233SE025・035・045・050)となる。最古の木枠井戸は、縦板組隅柱横棧組構造の233SE020で、11世紀前後(大宰府X期)頃の埋没と判断される。また、結物組4基(233SE025・035・045・050)の埋没時期は13世紀前後から14世紀後半(大宰府XVI~XX期)と推測され、中世段階では結物組が一般化しており、本地域に通用なあり方として追認することとなった。なお、結物は下端の部材の長さが不ぞろいであり、板底のはめ込み痕跡がなくなったことから、木桶の転用ではなく、井戸専用の枠であったと考えられる。

井戸の深度では、底面が砂礫層で止まったものと、黄褐色粘土層(風化花崗岩)まで到達したものに分けられる。前者は6基(233SE010・011・015・060・064・080)を数え、底面標高は34.9~35.8mを測り、主に調査区の北側に分布する。後者は5基(233SE020・025・035・045・050)を数え、底面標高は33.1~34.6mを測り、調査区の中央付近に集中する。いずれの井戸も調査時には顕著な湧水は認められず、後世の環境変化による水位の低下が原因と考えられる。

掘立柱建物は、側柱建物2棟(233SB130・135)と、床でないし間仕切りの可能性を有する建物(233SB140)1棟の計3棟である。前者の2棟は東西棟(233SB130・135)で、主軸方位はN-82°-WとN-89°-W、後者は南北棟(233SB140)で、N-16°-Eを指針する。

櫓列(233SA125・155)は2列あり、両者の明確な埋没時期は判然としなが、前者の233SA125は南北溝(233SD005)と約10.5m(35小尺)の間隔で並行関係にあり、両者の関連性が推測される。主軸方位は前者の南北櫓列(233SA125)がN-7°-W、後者の東西櫓列(233SA155)がN-87°-Wを指針する。

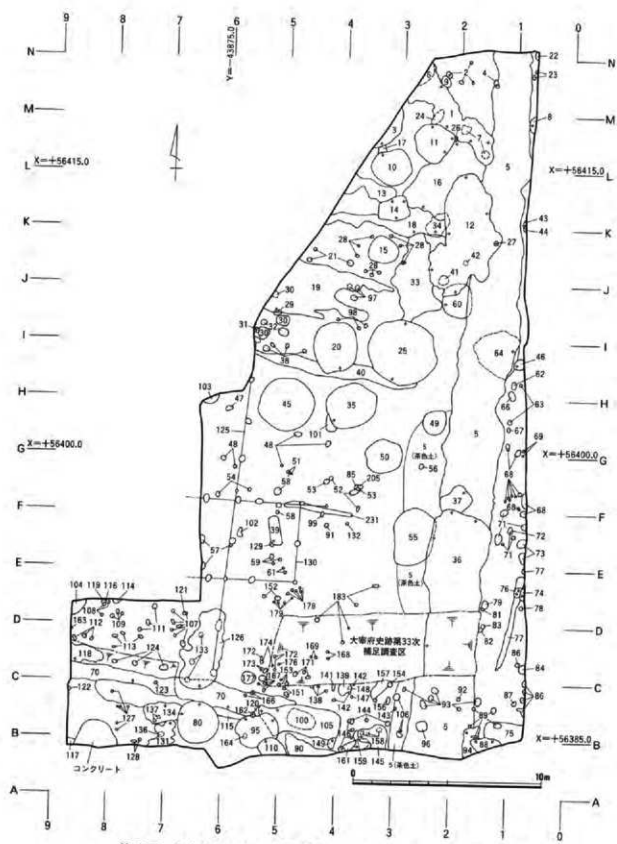
土坑は22基が検出されているが、特に233SK055およびSK095からは土師器の供具類を中心とした遺物の多量産獲がみられ、五条地区における中世都市的な様相が本地点においても把握された。埋没時期は233SK055が13世紀初頭(大宰府XVII~XIX期)、233SK095が13世紀後半(大宰府XX期)以降と推測される。

最後に、今回特記される事項としては、正方位を基準とする条坊プランとは異なる7度前後東偏またはそれと直交する平安時代後期から中世にかけての溝、建物、櫓列を検出したことが挙げられる。

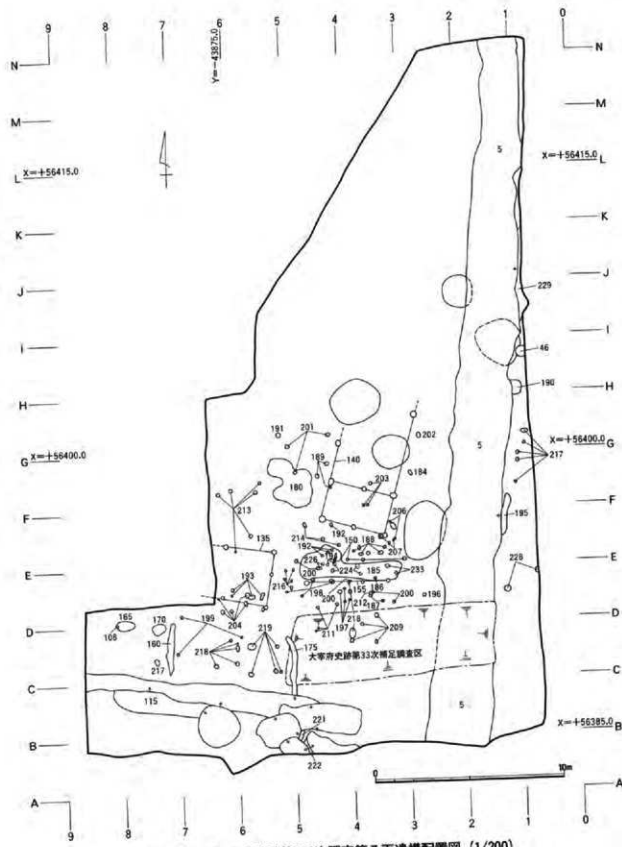
本地点北東近隣の条坊跡第156・158次調査では、従来の条坊プランを下敷きに、中世の街区割りがなされた旨と指摘される遺構(156SD065、158SD001)が検出されており(井上2002)、五条地区内には、条坊の遺制を踏襲した正方位地割りに加え、新たな基準による斜行地割りが成立しているとみられる。この斜行地割りに関連する事象としては、大宰府条坊跡北東の想定郭外から天満宮安楽寺に至る範囲で、平安時代後期の12世紀代に、北に対し東に6度ほど傾く土地区割りが想定されており(井上・山村2006)、これと近似する地割りが、想定郭内にあたる本地点の同時期あるいは先行する11世紀後半から12世紀前半段階の遺構(233SD070)に認められたことは、重要な問題提議と考えられる。今後、周辺の調査資料蓄積を通して、本地域における斜行地割りの始原の時期や意味、分布範囲の把握、および条坊制との関わりなどの究明が課題となろう。

### 引用・参考文献

- 九州歴史資料館 1975『大宰府史跡 昭和49年度発掘調査概報』
- 九州歴史資料館 1979『大宰府史跡 昭和53年度発掘調査概報』
- 太宰府市史編纂委員会 1992『太宰府市史 考古史料編』太宰府市
- 狭川真一 1998『大宰府条坊跡X』太宰府市教育委員会
- 井上信正 2002『まとめ』大宰府条坊跡21 一第156・157・158次調査』太宰府市教育委員会
- 山村信宏 2002『大宰府-平安の地方都市と集落』『季刊考古学』第93号 植山園
- 井上信正・山村信宏 2006『大宰府の条坊プラン』第32回 古代城郭官衛施設検討会



第51図 大宰府条坊跡第23次調査第Ⅰ面遺構配置図 (1/200)



第52図 大宰府条坊跡第23次調査第Ⅱ面遺構配置図 (1/200)

大宰府条坊跡第233次調査 遺構番号台帳 (1)

S-番号	遺構番号	階	備考	地盤土状況(古-新)	遺構間切合(古-新)	時期	地区番号
1	233SK001	たまり		暗褐色土	5-7-9-11-16-24-26-1	F期	L1-M2
2		礎瓦	1次	暗褐色土	8+2		M1-2
3	233SK003	井戸	石組	暗褐色土→暗褐色土	12-3		L1-M3
4		礎瓦	1次	暗褐色土	5+4		12世紀中頃
5	233SD006	溝		灰土→黄灰色土→暗褐色土 暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土 暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土 暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土 暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	60-64-2-4-12-27-36-57-55 89-92-94-96	13世紀中頃-14 A2-MO	
6	233SK006	土境?		暗褐色土→暗褐色土	1-6		L1
7		小穴群	2次	灰褐色土	7-1		M1-2
8		小穴	1次	暗褐色土	9+8		12世紀中頃
9		小穴	1次	灰褐色土	9+1-2		L0
10	233SK010	井戸		暗褐色土	17-10		M2
11	233SK011	溝	石組	暗褐色土→暗褐色土	17-10	X-XIII期	K-L2-3
12	233SK012	溝		暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土 暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	16-24-26-11-1	XVI期	L2
13		土境?		暗褐色土	5-16-18-27-33-34-41-42-60-12	F期	L1-K1-2
14	233SK014	土境		暗褐色土	13-14	E期	K3
15	233SK015	井戸	石組	暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	13-16-18+14	E期	K2-3
16		たまり		暗褐色土	5-18-26-34+16+1+11-12-14	F期	K-1,2
17		小穴	1次	暗褐色土	3-10+17		L3
18	233SD018	土境		暗褐色土	33-34+18+12-14	XVI-XIX期	J-K2-4
19		たまり		暗褐色土	29-30-97+19	灰土	I-J3-5
20	233SK020	井戸		暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	80+20	XVI期	II-3,4
21		小穴群	3次	暗褐色土			N9
22		小穴	1次	暗褐色土			M0
23		溝	2次	暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	34+11-1		L-M2
24		小穴	1次	暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	33-40-25	XX期	H-12-3
25	233SK025	井戸		暗褐色土	26-16+11-1		L2
26		小穴	1次	暗褐色土	5-12+27		J1
27		溝		暗褐色土	23+28		J2-3
28	233SK028	小穴群	9次(S15の上層施設の可能性あり)	暗褐色土	29-19		15
29		小穴	1次	暗褐色土	30-31		14-5
30	233SK030	小穴群	3次	暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	29-19		15
31		小穴	1次	暗褐色土	33+12-18-25-28-60		16
32		小穴群	3次(1次はS125(変更))	暗褐色土	34+18-16+12		J-K2
33		たまり		暗褐色土	101-35		G-HD-4
34	233SK035	井戸		暗褐色土→暗褐色土→黄灰色土→暗褐色土	5-96+37-36		H-12-3
35	233SK036	たまり		暗褐色土	5-37-36		F1-2
37	233SK037	土境		暗褐色土	129-30		H4-5
38		小穴群	4次	暗褐色土	49+20-25		E5
39		溝		暗褐色土	41+12		E3
40	233SD040	遺		暗褐色土	42+12		J1
41	233SK041	土境		暗褐色土	44+43		K0
42		小穴	1次	暗褐色土	44+43		K0
43		溝		暗褐色土	64+46		H0
44		小穴	1次	暗褐色土	66+86		H0
45	233SK045	井戸		暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土 暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土 暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土			G5-6
46	233SK046	土境		暗褐色土	129-30		G5-6
47		溝		暗褐色土	129-30		G5-6
48		溝		暗褐色土	129-30		G5-6
49	233SK049	土境		暗褐色土	129-30		G5-6
50	233SK050	井戸		暗褐色土	129-30		G5-6
51		小穴群	2次	暗褐色土	129-30		G5-6
52		小穴群	3次	暗褐色土	129-30		G5-6
53		小穴群	2次	暗褐色土	129-30		G5-6

大宰府条坊跡第233次調査 遺構番号台帳 (2)

S-番号	遺構番号	階	備考	地盤土状況(古-新)	遺構間切合(古-新)	時期	地区番号
54				暗褐色土			F9-6
55	233SK055	土境		暗褐色土以上層断面に白土		5-90-96	F期-E2
56		小穴	1次	暗褐色土			F2
57		小穴群	6次(1次はS130(変更)、2次はS125(変更))	暗褐色土			D-E5-6
58		小穴群	3次	暗褐色土	58+51		E-F4-5
59		小穴群	4次(1次はS130(変更))	暗褐色土			D-E5
60	233SK060	井戸	井戸跡類	暗褐色土→暗褐色土	33-60+5+12		11-2
61		小穴群	2次	暗褐色土			D4
62	233SK062	土境		暗褐色土			H1
63		小穴群	2次	暗褐色土			G-H9-1
64	233SD064	溝	井戸跡類	暗褐色土→暗褐色土	64+5+46		H-D9-1
65		小穴群	6次(1次はS125(変更)、3次はS130(変更))	暗褐色土			F3-6
66	233SK066	土境		暗褐色土			G-H9-1
67		小穴	1次	暗褐色土			G1
68		小穴群	12次	暗褐色土			F-G6-0
69		溝		暗褐色土			G8
70	233SK070	溝		暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	115-70-96-100-105-118-130-136		B4-C0
71		小穴群	6次	暗褐色土	72-71		E-P0-1
72		小穴	1次	暗褐色土	72-71		E0-1
73		小穴	2次	暗褐色土			D-E0
74		小穴	1次	暗褐色土			D9
75	233SK075	土境		暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	75+88-89		XVII期
76		小穴	1次	暗褐色土	77-75-74		D9
77	233SD077	溝		暗褐色土	77-75-74		12世紀中頃
78		小穴	1次	暗褐色土			D0
79		小穴	1次	暗褐色土	81-79		12世紀中頃
80	233SK080	井戸		暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	115-70-134-80		XVII-XVIII期
81		小穴	1次	暗褐色土	81-79		D1
82		小穴	1次	暗褐色土	83-82		C1
83		小穴	1次	暗褐色土	83-82		D1
84		小穴	1次	暗褐色土			C0
85		小穴	1次	暗褐色土	205+86		F-C0
86		小穴群	5次	暗褐色土			12世紀中頃
87		小穴	1次	暗褐色土			B0
88	233SK088	土境		暗褐色土→暗褐色土	75-94+88		XVIII-XIX期
89		小穴群	8次	暗褐色土	5-75-94+88		12世紀中頃
90	233SK090	たまり		暗褐色土→暗褐色土	222+20		F期
91		小穴	1次	暗褐色土			E4
92		小穴	1次	暗褐色土			E5
93	233SK093	溝		暗褐色土	5-92		平安時代前期
94		土境		暗褐色土	3-94+88-89		12世紀中頃
95	233SK095	土境		黄灰色土以上層断面に白土	70-105-115-120-164+95+110-162		XVIII期
96		小穴	1次	暗褐色土	5+96		12世紀中頃
97		小穴群	3次	暗褐色土	97+19		12世紀初
98		小穴群	3次	暗褐色土			12世紀中頃
99		小穴	1次	暗褐色土	231+99		平安時代前期
100	233SK100	土境		暗褐色土	180+185		H4
101	233SK101	土境		暗褐色土	104+35		12世紀中頃
102		小穴	1次	暗褐色土			E5
103	233SK103	土境		暗褐色土→暗褐色土			G6
104		土境		暗褐色土→暗褐色土			D8
105	233SD105	溝		暗褐色土→暗褐色土	70-100-120-221+105+95-149		D8
106		小穴群	3次	暗褐色土			D0
107		小穴群	7次	暗褐色土	121+107		平安時代前期
108		小穴群	3次	暗褐色土	119+108		D8
109		小穴群	3次	暗褐色土			D7
110	233SK110	土境		暗褐色土→暗褐色土→暗褐色土	86-221+222+110		XIII-XIII期
111		小穴群	3次	暗褐色土			C-D7
112		小穴群	3次	暗褐色土			平安時代前期



大宰府条坊跡第233次調査 遺構番号台帳 (3)

S-番号	遺構番号	種別	備考	層土状況(古-新)	遺構間切台(古-新)	時期	地区番号
113	小穴 4次	暗褐色土				平安時代前期~	
114	小穴 1次	暗褐色土				平安時代中期~	
115	Z33SD115 溝?	灰白色土-灰褐色土		115-70-80-127-134	B層	B5-B-8	
116	小穴 1次	褐色土		119-116		D8	
117	Z33SX117 不明	暗褐色土			X層	A8	
118	小穴 1次	暗褐色土		70-118		12世紀中頃~	
119	小穴 3次	暗褐色土		119-108-116		D8	
120	Z33SD120 溝?	暗褐色土		70-120-95-105-102	E層	B4-5	
121	小穴 1次	暗褐色土		121-107		D6	
122	小穴 1次	暗褐色土				B8	
123	小穴 1次	褐色土		70-123		12世紀中頃~	
124	小穴 3次	暗褐色土				D層	C6-7
125	Z33SA125 竪列	8次(S-329/1次、S-489/2次、S-507/2次、S-486、S-183の2次、S-182/2次、S-182/2次)		57-125-126		15-C6	
126	Z33SX126 土壇	暗褐色土		125-133-136	X層	B-D-6	
127	小穴 6次	黒褐色土		115-127		平安時代中期~	
128	小穴 2次	暗褐色土				12世紀中頃~	
129	小穴 1次	褐色土		129-30		E5	
130	Z33SD130 竪列	S-570/1次、S-590/1次、S-662-d、f、S-125/1次、S-181/2次、S-182/2次		221-130		D-F4-6	
131	土壇	暗褐色土		134-136-131		D層	A-B6-7
132	小穴 2次(1次IS-130C-東室)	暗赤褐色土				平安時代前期~	E-3-4
133	小穴 5次(2次IS-125C-東室)	暗褐色土		133-126		平安時代中期~	C-D6
134	土壇	暗褐色土		115-137-131-80-131		D層	B6-7
135	Z33SB135 竪列	竪目				D-125-6	
136	小穴 1次	暗褐色土		136-131		A-B7	
137	小穴 2次	暗褐色土		137-134		B7	
138	小穴 2次	暗褐色土				12世紀中頃~	B4
139	Z33SK139 土壇	灰褐色土		148-139		12世紀中頃~	E3
140	Z33SB140 竪列	竪目		140-285-307		X層	E-G3-4
141	小穴 1次	灰褐色土				平安時代中期~	B4
142	小穴 3次	褐色土				B3	
143	小穴 1次	灰褐色土		146-144		12世紀中頃~	B2
144	小穴 3次	暗褐色土				B3	
145	土壇	暗赤色土-暗褐色土-暗褐色土		158-150-145		12世紀中頃~	A-3
146	小穴 4次	暗褐色土		161-146-144		12世紀中頃~	A-B3
147	小穴 1次	灰褐色土				B3	
148	小穴 1次	暗褐色土		148-139		B3	
149	小穴 1次	褐色土		105-149		12世紀中頃~	A4
150	小穴 4次(竪目)	暗褐色土		185-226-150		E3-4	
151	小穴 2次	暗褐色土				B4	
152	小穴 2次	暗褐色土				D4	
153	小穴 3次	暗褐色土				B4	
154	小穴 1次	暗褐色土		157-154		12世紀中頃~	B3
155	Z33SA155 竪列	4次(竪目)		185-200-155-198		D3-4	
156	小穴 2次	暗褐色土		157-156		C層	B3
157	土壇	灰褐色土		157-154-156		B3	
158	小穴 1次	褐色土		158-145		B3	
159	土壇	灰褐色土		161-159-145		12世紀中頃~	A-B3
160	Z33SD160 溝	竪目				C7	
161	土壇	暗褐色土		161-146-159		A3	
162	小穴 1次	暗褐色土		70-162-160		12世紀中頃~	B5
163	小穴 1次	暗褐色土				C8	
164	小穴 1次	暗褐色土		164-85		A-B5	
165	Z33SK165 土壇	竪目		165-168		C7	
166	小穴 2次	暗褐色土		70-166		E層	B6
167	小穴 4次	暗褐色土				B-C5	
168	小穴 2次	暗褐色土				12世紀中頃~	C4
169	小穴 2次	暗褐色土				C4	
170	Z33SK170 土壇	竪目				C7	
171	小穴 3次	暗褐色土				C4	
172	小穴 3次	茶色土		172-174		平安時代中期~	C5
173	小穴 2次	暗褐色土				12世紀中頃~	C5
174	小穴 2次	暗褐色土		172-174		12世紀中頃?	C5
175	Z33SD175 溝	竪目		175-70		B-C4-5	

大宰府条坊跡第233次調査 遺構番号台帳 (4)

S-番号	遺構番号	種別	備考	層土状況(古-新)	遺構間切台(古-新)	時期	地区番号
176	小穴 1次	黄褐色土				D層	C5
177	Z33SK177 土壇	暗褐色土				D層	B-C5
178	小穴 5次	暗褐色土				D4	
179	小穴 1次	暗褐色土				D4-5	
180	Z33SX180 土壇	竪目				F4-5	
181	小穴 1次(S-133C-東室)	暗褐色土-暗赤褐色土-暗褐色土		180-201		12世紀中頃?	F5
182	小穴 1次(S-125C-東室)	暗褐色土				D-D4	
183	小穴 5次	暗褐色土				F2	
184	土壇	暗褐色土		223-224-226-185-150-153-192		D-E3-4	
185	小穴 1次(竪目)	暗褐色土		185-186		D6-6	
186	小穴 2次(竪目)	暗褐色土		187-212		D3	
187	小穴 6次(竪目)	暗褐色土				D3	
188	小穴 3次(竪目)	暗褐色土				E3	
189	小穴 2次(竪目)	暗褐色土		190-5		F4	
190	Z33SK190 土壇	竪目				G-H1	
191	小穴 1次(竪目)	暗褐色土		185-192		G5	
192	小穴 1次(竪目)	暗褐色土		204-100		E4	
193	小穴 4次(竪目)	暗褐色土		224-185-194		E-F1	
194	小穴 3次(竪目)	暗褐色土		195-5		D2	
195	Z33SD195 溝	竪目				D0-4	
196	小穴 1次(竪目)	暗褐色土				D4-5	
197	小穴 4次(竪目)	暗褐色土		150-185-198		C-D6-7	
198	小穴 4次(竪目)	暗褐色土		185-226-200-212-226		I3-E4	
199	小穴 3次(竪目)	暗褐色土				F-G4	
200	小穴 5次(竪目)	暗褐色土		180-201		G2	
201	小穴 1次(竪目)	暗褐色土				F3	
202	小穴 3次(竪目)	暗褐色土		204-193		F3	
203	小穴 5次(竪目)	暗褐色土		205-103-85		E3	
204	小穴 1次	暗褐色土				平安時代~	E3
205	小穴 2次(竪目)	暗褐色土		209-208		C-D3-4	
206	小穴 2次(竪目)	暗褐色土		209-208		C-D3-4	
207	小穴 4次(竪目)	暗褐色土		209-208		C-D3-4	
208	小穴 4次(竪目)	暗褐色土				C-D4	
209	小穴 4次(竪目)	暗褐色土				I3	
210	小穴 1次(竪目)	暗褐色土		187-200-212		B-F5-6	
211	小穴 1次(竪目)	暗褐色土				E4	
212	小穴 6次(竪目)	暗褐色土				D4-5	
213	小穴 3次(竪目)	暗褐色土				C7	
214	小穴 5次(竪目)	暗褐色土				C5-6	
215	小穴 1次(竪目)	暗褐色土				C5	
216	小穴 2次(竪目)	暗褐色土				B4	
217	小穴 5次(竪目)	暗褐色土				D3	
218	小穴 3次(竪目)	暗褐色土				A-B4	
219	小穴 2次(竪目)	暗褐色土		221-160-95-119		12世紀中頃?	A-B4
220	小穴 1次(竪目)	暗褐色土		222-99-119		D3	
221	Z33SX221 土壇	竪目		223-185		D-E3-4	
222	小穴 2次(竪目)	暗褐色土		224-185-154		D-E3-4	
223	小穴 4次(竪目)	暗褐色土				D-E4	
224	小穴 2次(竪目)	暗褐色土		226-185-200		F-G0-1	
225	小穴 2次(竪目)	暗褐色土				D0-1	
226	小穴 5次(竪目)	暗褐色土				1-10	
227	小穴 2次(竪目)	暗褐色土-暗赤褐色土-暗褐色土		5-259		E-F4	
228	不明						
229	溝?			99-231-130			
231							



大宰府糸紡跡第233次調査 土師器計測表(1)

種別	器種	遺物番号	口径	高さ	底径	底面形状	内底ノズ	底口形状	注記	備考
小皿	M-007	(11.8)	2.4	18.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-004	(12.0)	2.8	18.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-005	(13.0)	3.0	18.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-006	(13.6)	3.0	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-004	(13.8)	3.0	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-008	(13.8)	3.0	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-029	(13.8-14.3)	3.0	19.0-19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-011	(14.0)	3.0	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-044	(14.0)	2.6	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-009	(14.0)	2.6	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-007	(14.0)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-009	(14.0)	2.9	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-018	(14.0)	3.0	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-010	(14.0-14.7)	3.0	19.8-20.1	1.0	円	○	○		
小皿	M-008	(14.2)	2.8	19.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-041	(14.2)	2.8	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	R-010	(14.2)	3.1	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	R-012	(14.2)	3.4	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-007	(14.2)	3.5	19.3	1.0	円	○	○		
小皿	M-006	(14.0)	3.0	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-000	(14.2-14.8)	3.2	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-001	(14.4)	2.8	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-043	(14.4)	2.7	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-001	(14.4)	2.7	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-006	(14.4)	2.7	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-003	(14.4)	2.9	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-004	(14.4)	2.9	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-001	(14.4)	2.7	19.2-20.1	1.0	円	○	○		
小皿	M-005	(14.0)	3.4	19.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-102	(14.6)	2.7	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-027	(14.6)	3.0	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-041	(14.6)	3.0	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-002	(14.6-15.3)	2.7	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-009	(14.7)	2.7	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-005	(14.7)	2.9	19.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-009	(14.8)	2.7	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-017	(14.8)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	R-011	(14.8)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-020	(14.8)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-048	(14.8)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-010	(14.8)	2.9	19.8-20.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-046	(14.8)	3.1	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-001	(14.8)	3.2	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-001	(14.8)	3.4	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-010	(14.8)	3.4	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-000	(14.8-15.3)	2.7	19.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-001	(15.0)	2.3	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-028	(15.0)	2.6	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-013	(15.0)	2.6	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	R-009	(15.0)	2.6	19.7	1.0	円	○	○		
小皿	R-008	(15.0)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-042	(15.0)	2.7	19.5	1.0	円	○	○		
小皿	M-002	(15.0)	3.0	19.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-040	(15.2)	3.0	19.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-005	(15.2)	3.0	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-005	(15.2)	2.9	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-006	(15.2)	2.9	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-007	(15.2)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-008	(15.2)	2.8	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-012	(15.4)	2.8	19.1	1.0	円	○	○		
小皿	M-011	(15.4)	2.8	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-006	(15.6)	2.8	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-015	(16.0)	2.9	19.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-118	(16.0)	1.8	19.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-083	(16.0)	0.9	19.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-102	(16.0)	1.0	19.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-101	(16.2)	1.3	19.7	1.0	円	○	○		
小皿	M-102	(16.2)	1.3	19.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-008	(16.2)	1.9	19.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-008	(16.4)	1.0	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-114	(16.4)	1.1	19.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-128	(16.4)	1.1	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-111	(16.4)	1.2	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-123	(16.4)	1.2	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-096	(16.4)	1.2	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-096	(16.4)	1.2	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-127	(16.4)	1.4	19.1	1.0	円	○	○		
小皿	M-096	(16.4)	1.0	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-104	(16.4)	1.0	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-075	(16.6)	1.0	19.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-110	(16.6)	1.0	19.0	1.0	円	○	○		

大宰府糸紡跡第233次調査 土師器計測表(2)

種別	器種	遺物番号	口径	高さ	底径	底面形状	内底ノズ	底口形状	注記	備考
小皿	M-066	(8.6)	1.0	6.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-060	(8.6)	0.9-1.1	6.9	1.0	円	○	○		
小皿	M-074	(8.6)	1.0	6.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-131	(8.6)	1.2	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-119	(8.6)	1.2-1.7	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-071	(8.7)	1.0	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-080	(8.7)	1.3	6.7	1.0	円	○	○		
小皿	M-077	(8.7)	0.9	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-080	(8.8)	0.9	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-129	(8.8)	0.9	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-009	(8.8)	0.9-1.2	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	R-014	(8.8)	1.0	6.3	1.0	円	○	○		
小皿	M-076	(8.8)	1.0	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-062	(8.8)	1.1	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-060	(8.8)	1.1	6.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-090	(8.8)	1.1	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-112	(8.8)	1.1	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-081	(8.8)	1.2	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-100	(8.8)	1.2	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-073	(8.8)	1.2	7.5	1.0	円	○	○		
小皿	M-085	(8.8)	0.8	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-108	(8.8)	1.0	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-116	(9.0)	1.0	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-096	(9.0)	1.0	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-104	(9.0)	1.0	6.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-101	(9.0)	1.1	6.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-087	(9.0)	1.1	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-105	(9.0)	1.1	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-109	(9.0)	1.1	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-113	(9.0)	1.1	7.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-089	(9.0)	1.1	7.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-099	(9.0)	1.2	6.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-029	(9.0)	1.2	6.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-080	(9.0)	1.2	6.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-115	(9.0)	1.2	6.7	1.0	円	○	○		
小皿	M-081	(9.0)	1.2	6.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-107	(9.0)	1.2	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-126	(9.0)	1.2	7.4	1.0	円	○	○		
小皿	M-103	(9.0)	1.2	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-067	(9.0-9.4)	1.2	7.1-7.8	1.0	円	○	○		
小皿	M-084	(9.1)	1.2	7.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-084	(9.1)	1.3	7.4	1.0	円	○	○		
小皿	R-015	(9.2)	1.0	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-060	(9.2)	1.0	7.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-094	(9.2)	1.1	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	M-072	(9.2)	1.2	7.5	1.0	円	○	○		
小皿	M-065	(9.2)	1.2	7.7	1.0	円	○	○		
小皿	M-095	(9.2)	1.4	6.6	1.0	円	○	○		
小皿	M-088	(9.2-9.5)	1.2	6.6-7.1	1.0	円	○	○		
小皿	M-117	(9.2)	1.3	7.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-063	(9.5)	1.3	7.2	1.0	円	○	○		
小皿	M-124	(9.8)	1.4	7.0	1.0	円	○	○		
小皿	R-017	(9.8)	1.4	7.0	1.0	円	○	○		













大宰府条坊跡第233次調査 土師器計測表 (13)

233S006(報告表上)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	埴	M-002	12.7	2.7	8.8	円	○	○	○	
土師器	埴	M-003	12.7	2.7	8.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-007	17.4	3.2	8.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-004	12.8	1.1	6.9	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-005	12.8	1.2	6.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-005	17.8	1.3	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-006	17.6	1.3	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-047	7.6	1.0	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-009	7.9	1.0	6.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-040	7.9	1.2	5.6	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-001	7.9	1.2	6.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-007	16.0	1.1	6.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-005	8.0	1.2	6.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-006	16.0	1.3	5.6	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-008	16.0	1.3	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-004	8.0	1.4	6.1	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-003	8.1	1.3	6.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-002	16.2	1.2	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-030	8.2	1.3	6.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-031	8.2	1.4	6.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-030	16.1	1.2	17.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-027	8.8	1.3	6.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-006	8.6	1.3	6.5	円	○	○	○	

233S006(報告表下)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	埴	M-014	11.8-12.1	2.5	8.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-019	12.0	2.6	8.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-018	12.0	2.6	7.4	円	○	○	○	
土師器	埴	M-007	12.1-12.1	2.7	8.4-7.9	円	○	○	○	
土師器	埴	M-017	12.2	2.5	8.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-016	12.2	2.6	8.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-015	12.2	2.8	8.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-011	12.4	2.6	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-003	12.4	2.6	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-012	12.4	2.6	8.6	円	○	○	○	
土師器	埴	M-010	12.6	2.6	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-009	12.6	2.8	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-008	12.6	2.6	8.6	円	○	○	○	
土師器	埴	M-005	12.8	2.8+	16.1	円	○	○	○	
土師器	埴	M-003	12.8	2.9	7.5	円	○	○	○	
土師器	埴	M-003	13.0	2.6	8.1	円	○	○	○	
土師器	埴	M-004	13.0	2.6	7.5	円	○	○	○	
土師器	埴	M-002	13.1	2.6	8.4	円	○	○	○	
土師器	埴	M-001	14.4	3.2	10.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-036	7.7	1.0	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-007	17.8	1.1	6.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-006	7.8	1.2	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-002	7.9	0.9-1.1	6.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-004	7.9	1.0	6.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-033	16.0	0.9	17.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-002	8.0	1.3	5.6	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-001	8.1	1.0	6.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-029	8.1	1.4	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-030	8.1	1.4	6.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-028	16.2	1.2	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-005	8.2	1.2	6.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-007	16.2	1.2	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-025	16.2	1.0	6.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-001	8.4	1.2	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-032	16.0	1.2	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-022	8.6	1.4	7.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-021	8.7	1.4	7.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-000	8.7	1.2	7.0	円	○	○	○	

233S010(報告表上)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	埴	M-011	12.0	2.5	16.1	円	○	○	○	
土師器	埴	M-012	12.9	2.5	16.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-011	12.9	2.7	8.7	円	○	○	○	
土師器	埴	M-008	13.0	2.4	17.4	円	○	○	○	
土師器	埴	M-009	13.0	2.6	8.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-007	13.0	2.7	7.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-006	13.3	2.8	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-006	13.5	2.9	9.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-004	13.6	2.7	8.3	円	○	○	○	
土師器	埴	M-001	13.7	3.1	8.3	円	○	○	○	
土師器	埴	M-003	13.9	3.3	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-002	14.0	3.2	10.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-001	14.2	3.8	13.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-022	16.0	1.2	16.0	円	○	○	○	

大宰府条坊跡第233次調査 土師器計測表 (14)

233S008(報告表上)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	小皿	M-021	8.4	0.9	5.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-020	8.4	1.1	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-019	16.0	1.1	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-028	16.0	1.1	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-017	16.0	1.2	17.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-015	16.0	1.0	17.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-016	16.0	1.0	17.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-014	8.2	1.1	7.4	円	○	○	○	

233S010(報告表下)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	埴	M-002	13.0	2.6	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-001	13.8	2.6	8.8	円	○	○	○	
土師器	埴	M-004	16.2	1.0	16.8	円	○	○	○	
土師器	埴	M-003	16.2	1.1	17.0	円	○	○	○	

233S010(報告表下)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	埴	M-003	12.0	2.4	7.5	円	○	○	○	
土師器	埴	M-002	12.0	2.7	16.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-001	13.0	2.8	8.0-8.5	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-014	17.0	1.2	16.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-013	7.8	1.2	5.8	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-012	7.9	1.1	6.0	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-011	16.2	1.2	6.5	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-010	8.3	1.2	5.8-6.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-009	16.1	1.0	16.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-008	16.1	1.1	16.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-007	8.4	1.5	6.4	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-006	16.0	1.2	16.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-005	16.0	1.0	16.2	円	○	○	○	
土師器	小皿	M-004	16.0	1.2	16.2	円	○	○	○	

233S010(報告表下)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	埴	M-001	10.0	2.3	17.0	円	○	○	○	
土師器	埴	M-002	10.0	1.7	17.0	円	○	○	○	

233S010(報告表下)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	埴	M-001	12.4	2.8	8.2	円	○	○	○	
土師器	埴	M-002	12.4	2.8	17.4	円	○	○	○	
土師器	埴	M-001	8.2	1.0	6.5	円	○	○	○	
土師器	埴	M-006	8.8	1.1	6.8	円	○	○	○	
土師器	埴	M-003	9.0	1.1	17.0	円	○	○	○	

233S010(報告表下)

種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	底面形状	内底ノテ	取付位置	内底形状ノテ	備考
土師器	小皿	M-001	16.0	1.1	16.0	円	○	○	○	















大宰府条坊跡第233次調査第1面全景（写真上が南西）



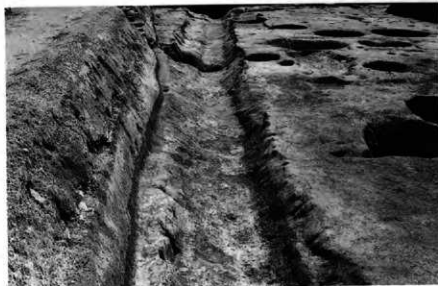
大宰府条坊跡第233次調査第1面全景（写真上が西）



大宰府条坊跡第233次調査第Ⅰ面中央全景 (写真上が西)



大宰府条坊跡第233次調査第Ⅱ面全景 (写真上が西)



233SD005全景 (北から)



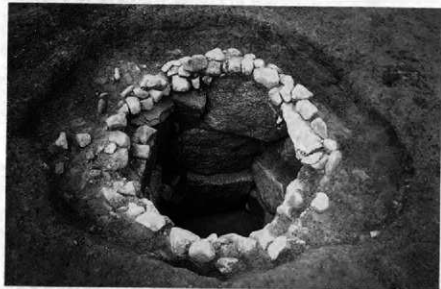
233SD005遺物出土状態 (K1区、北から)



233SD070・115全景 (西から)



233SE011全景 (東から)



233SE015全景 (南東から)



233SE020全景 (西から)



233SE020井戸枠詳細 (西から)



233SE025全景 (東から)



233SE025井戸枠詳細 (西から)





233SE035全景 (東から)



233SE035井戸枠詳細 (東から)



233SE045全景 (西から)



233SE045井戸枠詳細 (南から)



233SE050全景 (東から)



233SE050井戸枠詳細 (西から)





233SB130全景 (西から)



233SB135全景 (西から)



233SB140全景 (北から)



233SA125・SX126全景 (南から)



233SK055遺物出土状態 (西から)



233SK095遺物出土状態 (南から)

## 報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうほうあと 31									
書名	大宰府条坊跡 31									
副書名	第233次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	第89集									
編著者	北平剛久・香川達郎									
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所									
所在地	太宰府市教育委員会 〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1-1-1 福92-921-2121 玉川文化財研究所 〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9 福945-321-5965									
発行年月日	平成18(2006)年6月20日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【観山指定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積	調査原因
大宰府市条坊跡 第233次	左第7条9坊	大宰府市 五条2丁目 2724-3099 5 集	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	m <sup>2</sup>	
			402214	Z10044-253	+56400.0	-43865.0	20040522	20041027	1147.6 (基<)	共同住宅建設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
大宰府条坊跡 第233次	官衙	平安時代中期～ 鎌倉時代後期	跡・獨立柱建物・欄干 井戸・土坑・小穴群		須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・ 国産陶器・奈良陶磁器・瓦葺・金属 製品・石製品・木製品・ガラス製品			平安時代中期～鎌倉時代後期の区画 施設および断崖を発見		

太宰府市の文化財第89集  
大宰府条坊跡 31  
- 第233次調査 -

平成18(2006)年6月

発行 太宰府市教育委員会  
〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1-1-1  
編集協力 玉川文化財研究所  
〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9  
印刷 株式会社アルファ  
〒250-0001 神奈川県小田原市順町5-25-23

